



特集「境界地域研究ネットワーク JAPAN の立ち上げに向けて」



国境フォーラム IN 対馬・国際セッション (2010年11月12日)

* * *

I 「対馬リトリート 2010」：国境フォーラム IN 対馬/上対馬巡検(2010.11.12-14)

【基調講演】「ローカル・イニシアティブ：国境を越える競争と協力」 藪野祐三（九州大）

【現場報告】田村慶子（北九州市立大） 古川浩司（中京大） 長嶋俊介（鹿児島大）

浅羽祐樹（山口県立大） 山上博信（日本島嶼学会） 佐藤由紀（早稲田大）

本間浩昭（毎日新聞） 佐竹政治（北海道新聞） 黒岩幸子（岩手県立大）

堀場明子（上智大） 高木彰彦（九州大）

II 「日本のボーダー・世界のまなざし：境界地域研究ネットワークの

立ち上げに向けて」(2010.12.6 東京・日本財団ビル)

【ラウンド・テーブル】「対馬フォーラム：成果とこれから」

司会 古川浩司（中京大）

報告 加峯隆義（財団法人九州経済調査協会 調査研究部次長）

豊田充（対馬市 地域再生推進本部副本部長）

佐藤由紀（日本島嶼学会理事 小笠原研究者）

外間守吉（沖縄八重山・与那国町長）

【エッセイ】「世界のボーダースタディーズとのネットワーク構築」 池直美（北海道大）



境界地域研究ネットワーク JAPAN の立ち上げに向けて

グローバル COE「境界研究の拠点形成」が、文科省のプログラムであるかぎり、研究者を中心としたアカデミックな事業になるのは当然である。しかしながら、境界研究（ボーダースタディーズ）は現場にかかわる身体性への自覚なしには成り立たない。そして現場に密着した研究から生まれ蓄積されたものが、再び現場へと還元できなければ、学問としての存立基盤そのものを問われかねない。境界研究は研究者だけの独りよがりの学問と化してはならないからだ。では、どのようなかたちで現場とともにこの事業を発展させたらよいのだろう。

このような思いから、私たちがかねてより細々とではあるが、関係自治体とともに地道に続けてきた「国境フォーラム」を発展させ、特に実務者間のネットワークを結成できないかと考えつづけてきた。2011 年から 3 年間、笹川平和財団から「境界地域研究ネットワーク JAPAN の設立」にかかわるプロジェクトの助成を受けることが決まり、実務にかかわる活動のスケールを高めることが可能となった。境界研究に関する実務を研究とつなぐネットワークが始動し始めている (http://www.spf.org/projects/project_6232.html)。

本グローバル COE プログラムとこの笹川助成プロジェクトの主催により、2010 年に連続開催された「国境フォーラム IN 対馬」(11 月 12-13 日)とそのフィードバックをかねた東京会議(12 月 6 日)の様態を本号で特集する。「国境フォーラム IN 対馬」はすでに、「ライブ・イン・ボーダースタディーズ」号外のかたちで、ハイライトとなった自治体首長を交えた討論の部分を刊行しているが、本号ではその前に行われた藪野祐三九州大学名誉教授による基調講演とフィールドワークも含む「対馬リトリート」参加者たちのエッセイを収録した。改めて対馬のみなさんと参加者の方々にお礼を申し上げますとともに、先の号外と併せてご一読いただければ幸いである。

境界地域で行ったフォーラムの成果を中央に届けるのも、私たちの使命である。本プログラムの主催により札幌で開催した国際シンポジウム「地域を融かす境界研究」(12 月 4 日)の錚々たる報告者たちを交えて、対馬でのフォーラムの成果報告会を虎ノ門の日本財団ビルで行った。各省庁、大使館、メディア、大学などから 70 名を超える参加者があり、日本と世界の国境問題をめぐって議論は白熱した。本特集はそのなかから、「国境フォーラム IN 対馬」にかかわる討論をお届けする。本特集をつうじて、読者のみなさんのボーダーリテラシー(境界を知ること)が一步でも涵養されることを願いながら。

(拠点リーダー 岩下明裕)



北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

国境フォーラム

in 対馬

2010年
11/12金・13日

対馬市交流センター

長崎県対馬市厳原町今屋敷675-4

海と陸の架橋
——日本の「勝手口」の明日

11/12
[全]

■13:00~ 3階 大会議室

オープニング・セレモニー —— DVD「知られざる北の国境：樺太と千島」上映会他

■14:30~18:00 3階 大会議室

『ボーダースタディーズから見た国境と島嶼』

※特別編訳 浜野 日本国境地域の国境論

「9.11以降のアメリカ・カナダの国境」 イマニューエル・ブルネイ・シェイ (ピクトリア大学/カナダ)
「欧州オレンス地域：国境を越える協力」 カールステン・インディゲン (南デンマーク大学/デンマーク)
「ドーバー海峡：国境を越える協力」 ミンシエル・ブリヤール (リール大学/フランス)
「釜山と福岡：国境を越える交流」 張清国 (東西大学/韓国)
「島嶼研究から見た太平洋経済圏」 葛数登 (名城大学/日本)
[司会] 岩下明裕 (北海道大学/日本)

■9:00~12:30 3階 大会議室

実務会議「日本の境界地域を考える」

「境界自治体の実務かつ概念的な定義について」 古川浩司 (中京大学)
与那国町・小笠原村・根室市・対馬市他自治体、福岡市・釜山市、各都庁の関係者による報告と発言
[司会] 長嶋俊介 (鹿児島大学)

■14:00~14:30 3階 大会議室

プレゼンテーション「対馬の心象地図：高校生は韓国をどう見ているか」

〔編纂〕 浅羽祐樹・林松博 (山口県立大学) [プレゼンテーション] 山口県立大学国際文化学部ゼミ学生

11/13
[土]

■15:00~15:40 2階 イベントホール

基調講演「ローカル・イニシアティブ：国境を越える競争と協力」

藪野祐三 (九州大学名誉教授)

■15:45~18:15 2階 イベントホール

座談会「ボーダーに暮らす私たちからの提言」

財部能成 (長崎県対馬市長) 長谷川俊輔 (北海道根室市長) 松田良孝 (八重山毎日新聞)
山田吉彦 (東海大学) 藪野祐三 (九州大学) 他 [司会] 岩下明裕 (北海道大学)

入場無料

下記ホームページで登録してください。

関連イベント

■「知られざる日本の国境」展

11月9日(火)~14日(日) 3階 展示ホール
かつて樺太(サハリン)に設置された「日露国境標石」のレプリカや
北海道・根室市と国後島の間(敷設された海底通信ケーブルなど、
日本の「国境」の過去と現在を表す資料を展示します。
※入場無料 09:00~22:00 (14日は12:00まで)

■DVD「知られざる北の国境：樺太と千島」上映
11月12日(金)~14日(日) 4階 図書館 視聴覚室



[主催] 北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」
管川平和財団助成「境界地域研究ネットワーク JAPAN」の設立
[共催] 対馬市 日本島根学会 北海道大学スラブ研究センター
財団法人九州経済調査協会
[協力] 山口県立大学国際文化学部

問い合わせ 北海道大学スラブ研究センター「境界研究の拠点形成」事務局

Tel: 011-706-2380 / 4809
E-mail: gooe-jimu@slav.hokudai.ac.jp

<http://borderstudies.jp>



I 「対馬リトリート 2010」：国境フォーラム IN 対馬/上対馬巡検(2010.11.12-14)

【基調講演】「ローカル・イニシアティブ：国境を越える競争と協力」

藪野祐三（九州大学）

（岩下明裕）「国境フォーラム IN 対馬」は、会場をイベントホールに移して、今からフィナーレです。フィナーレは特別セッションと称し、「対馬で日本の境界を考える」というテーマで、基調講演、座談会と続きます。私は進行役の、北海道大学スラブ研究センターの岩下明裕です。

「国境フォーラム」は、2007年の与那国を皮切りに、小笠原、根室と持ち回りで開催され、今回、対馬でとなりました。おかげさまで昨日と今日の午前中の会議は盛況でした。

早速、今日の講演をお願いしている、九州大学名誉教授の藪野祐三先生を紹介します。藪野先生は、もともと大阪の方で、初めて話を聞かれる方はびっくりされると思いますが、早口でメモなど取れません。「俺の講義ノートを取ったら、単位で優をやる」と学生に豪語されるほどで、大学院生だった私が九州大学に移られたばかりの藪野先生の講義を聞いたときは、もう25年ぐらい前でしょうか、驚愕しました。こんな面白い講義を大学で本当にやっていいのか。これはもうほとんど漫談でした。

対馬でこのフォーラムをやろうと決めたとき、地元に近い方でどなたに講演いただくのが一番いいのだろうかと考えました。真っ先にお顔が浮かんだのが藪野先生だったのですが、私はこれまでに2度、報告あるいは講演を頼んでいて、2度とも断られていたので自信がありませんでした。ところが、たまたま偶然、出張でかけた福岡のとある喫茶店で一緒になったときに、先生を抱きしめて、無理やりここにお連れすることができませんでした。

藪野先生にお願いした理由ですが、1990年代、「地方の時代」がブームとなった折、『ローカル・イニシアティブ』という本を中公新書で書かれたことが頭にあったからです。国境を超える試み、これはある意味で、今、私たちがやっている国境をローカルで考えるという試みの原点です。こういうフォーラムやネットワークをつくらうという考えも、どこかで藪野先生の考えなり、思想を私は下敷きにしていたのだなと思ったりもします。この原点を今日は振り返りつつ、原点は今後はどうつながるのかということをご伺いしたいと思い、先生をお招きしています。30分ちょっとという短時間ですが、どうぞ藪野節をお楽しみください。私も25年ぶりに楽しみにしています。きっと抱腹絶倒の会になると思います。それでは藪野先生を拍手でお迎えください。（拍手）



(藪野祐三) こんにちは。岩下さんと、というか、当時は、「岩下君」ですが、偶然、福岡で会いまして、まさかこういうことになるとは思っておりませんでした。今日は申し訳ないですが、5時半に退席しなければなりません。というのも、明日、福岡市長選挙がありまして、朝から市長選挙をウォッチしなければならないので、急きょ今日中に帰ることになりました。

岩下さんの方から『ローカル・イニシアティブ』について紹介がありましたが、これは岩下さんの『北方領土問題：4でも0でも2でもなく』と同じ中公新書として出版したのですが、岩下さんの方は、朝日新聞の大佛次郎論壇賞を取ったんですね。賞金はいくらだったのでしょうか？ 私も欲しかったですね。あまりこう言うと品のない話になってしまいますが（笑）。

私が『ローカル・イニシアティブ』を出したのは1995年ですが、なぜ『ローカル・イニシアティブ』というタイトルにしたのか。当時、「地方の時代」ということももちろん言われていたのですが、きっかけは神奈川県長洲知事です。知事は、任期を全うするに当たり、最後に1つ政策提言をしたいということで、「アジア太平洋と地方の時代」という研究成果を出したいとおっしゃって、委員会を作られました。私も委員のひとりとして参加しましたが、その委員長が武者小路公秀先生、あの武者小路実篤のおいっ子さんでした。この方は、生まれがジュネーブ、お父さんが駐ドイツ日本大使。いわゆる日独防共協定を結んだ時の大使で、ご自身はヒトラーに抱いてもらった方です。ご存じだと思いますが、日独防共協定を結んだときに、ヒトラーは武者小路大使に犬を贈っています。その経験が、武者小路先生の戦後の平和活動の原点となるのですが、それはまた別のお話です。

この手の話をするときがないのですが、武者小路先生と話をすると、近代日本史をまるごと振り返るようなことになります。だいたい生まれがジュネーブですからね。ただ武者小路先生の講演は、あまり弾まないのです。なぜ弾まないかというと、先生の頭はフランス語ですから。お話は、全部通訳の話を聞いている感じですね。頭の中は、まずフランス語なのです。今日は外国からの参加者のために、同時通訳の方がおられるのでゆっくりしゃべれと言われており、そうしますが、武者小路先生は日本語で話すのがだめです。フランス語はとてもいいのですが、ドイツ語、フランス語、中国語もOKです。で日本語が一番だめという、骨の髄から国際人である先生ですが、その先生が、ある日、東京駅にいたとき将校に襲撃されて、ここの部屋から逃げたのですよ、なんて話ばかりで、研究会どころではありません。武者小路先生の同時代史講話でこちらがはるかに楽しかったものです。

そのとき、武者小路先生に、「地方の時代」を英語では、何と云うのですかと尋ねてみました。先生は、それは「ローカル・イニシアティブだよ」とおっしゃられて、ぜひそれを使わせていた



だきたいという申し入れをして、先生が作られた言葉を私がいただいた、というわけです。

インターネットで調べてみますと、「ローカル・イニシアティブ」という本が1冊だけ見つかります。1900年頃にアメリカ人が書いた本、これのみです。そこでこのタイトルを冠した本を出したいと中央公論社に持って行ったのです。5万部は売れるかなと予想しましたが、2万で止まってしまい残念でした。当時、編集長が、言われていました。カタカナの本は売れませんよ。『ローカル・イニシアティブ』というカタカナの本は絶対に売れない。やっぱり売れませんでしたね。

この「ローカル・イニシアティブ」についてですが、私がこの講演で一番こだわりたい言葉が、この「ローカル」です。「ローカル」という言葉は日本語に訳せません。みなさん、「ローカル」というと田舎で、何と申しますか、あまり派手ではない、地味なことだという印象をお持ちでしょう。ところが、「ローカル」を日常的に探してみますと、たくさんありますね。たとえば、インターネットのLANがそれです。LANとは、「ローカル・エリア・ネットワーク」です。ですから、九州大であれば九州大のサーバーは、「ローカル・エリア・ネットワーク」で、「ローカル」です。問題はこれをどう訳すかでしょう。例えば、20年前にNGOが「Think globally, Act locally」という標語を作ったことがあります。これは「地球的に考えて田舎で行動しろ」ではありません。「アクト・ローカリー」は、「足元で行動しろ」です。

「ローカル」とは皆さんの「現場」、「足元」という意味です。自治体という意味でもありません。哲学的な意味が込められています。一例をあげます。ジャンボ・ジェット機で、皆さんがロンドンあるいはニューヨークに行かれるとき、退屈のぎにナビゲーションシステムをみられることがあるでしょう。ナビゲーションシステムで、ぱっと福岡空港を飛び立つと、福岡や、九州より大きい飛行機の影が映ります。飛んだ後にわーっと赤く線がついて進んでいきますが、そのとき3つの時間が出ます。3つの時間というのは、例えば成田空港からニューヨークに飛ぶと想定し、今、飛行機がアンカレジの上にある場合、出発時間、つまり成田空港の時間、それから到着地時間、ニューヨークの時間、現在地アンカレジの時間の3つの時間です。では英語表記はどうなっているのでしょうか。Local time at origin が出発地時間、Local time at present position が現在地時間、Local time at destination が到着地時間、すべて「ローカル」が入ります。要するに、ローカルは当地の時間という意味になります。「ローカル」は気品のある言葉です。しかし、ローカルという言葉は、あまり高く評価されていません。「ローカル・ピープル」は、「ナショナル・ピープル」よりだめだと評価されてしまっているのです。そうではありません。「ローカル」は、現場、足元という意味ですから。

ですから、本来はすべてが「ローカル」なのです。例えば、菅総理も、一皮むけば、東京都の



何区か選出の民主党の党首、もう一皮向けば衆議院議員で、もっとむけばローカルで選挙された人です。我々は、全部ローカルで選挙された人が、手続きによってナショナルに行き、インターナショナルに行くというプロセスを知るべきです。すべてのリソースというのはローカルにあるのです、この原点に帰りたいというのが私の気持ちです。『ローカル・イニシアティブ』で、私が一番言いたかった「ローカル」とは、哲学的な意味をもっており、自らの足元、自らのリソースを探せということにあります。

私も、「まちづくり」とかいろいろな企画に呼ばれますが、とにかく行くたびに、皆さん不満から始まります。例えば、「国境フォーラム」をしようとする、あるいは自治体が集まろうとする。どうなるかといえば、人がいない、金がない、それから資料がないという話から、討論が始まります。とにかく、ないないづくしとなってしまうのです。「ない」ことから始めるは、本当に不幸です。私は、やっぱり「ある」ことから始めてほしい。例えば、日本で一番人口の少ない鳥取県、60万人。確か、2番目に少ないのは島根県でしたね。島根県立大学をつくったときに、私も参画しましたが、島根県立大学がある浜田の駅前に行くとき本当に人がいません。1日に100人も見ればびっくりします。本当に人がいません。いるのは、JRの職員と警官と消防署員だけです。あとは誰もいない。すると皆さん、何もないじゃないかと言う。だけど、お年寄りには時間がいっぱいあります。時間というリソースをどう使うか考えてみるべきです。リソースが「ない」という認識から始めるのではなく、「ある」という前提から始めてみたい。これが私の基本的な発想です。

ないものねだり、は誰でもできます。あるものを発見する、のは難しいです。例えば、ポジティブに考えるという意味で、先ほどの山口県立大学の学生諸君の報告はよかったですよね。ポジティブに考えるか、ネガティブに考えるか。ポジティブに考えるというのは難しいのですが、しかしネガティブに考えるのは簡単なんです。今日、座っておられる隣の方の悪口を書いてみてください、100個は書けますよ。「貸した金は返さない」、「途中で居眠りする」、「頭がはげている」。隣の人の悪口を100個は書けますが、隣の人のいいところを書けといわれると困ってしまう。ありませんとなる。それほどいいことを見つけるのは、それほど難しいのです。いわゆる、ポジティブなリソースを発見するという行為には、すごく力がいられます。例えば、対馬なら対馬のリソースは何だどこを発見するためには、力とインテリジェンス、エネルギーが費やされなければなりません。そこから出てきたものが、対馬の1つの原点になっていく。これが私の考えです。

昨日たまたま、『社会力の市民的創造』という本を出版しました。2,000円ですが、まあ売れないでしょう。出版社はいつも言います、先生が書いた本は売れませんね。売れないのは仕方ないのですが、そこでも経験的なことを書いています。だいたい成功しているところ、やはりリソー



スの発見に成功したからです。

今日の話、ちょっと早口ですか。外国の方のための同時通訳にあわせたペースで話すと皆さんお眠りになりますから。だいたいイベントホールの空間が広いでしょう。まず緊張感が少ない。ましてや、岩下さんが設定した時間が午後 3 時。これは眠気以上の何物でもありません。これを、眠らずに聞かせるというのは至難の業です。どうぞ、眠たい方は眠ってください。ただ 1 つだけお願いがあります。無理をして聞いてもつまらないですから、寝ていただければいい。ただ、お願いがあります。ぜひひざに手を置いて熟睡してください。爆睡しないように。爆睡というのは、ぐーっといって隣の人にもたれる、これはやめていただきたいと思います。最悪の午後 3 時はティータイムですね。

さてローカルの例で、北九州市の話をしてします。北九州市は何を考えたかということ、お年寄りが多いことを前向きにとらえました。北九州は実に高齢化の都市で、高齢化は 25% いくくらいでしょうか。すると、何が問題かということ、65 歳以上、あるいは 75 歳以上で元気でお一人のお年寄りは何の行政サービスも受けていないということです。これは不幸です。皆さん、元気でおったらだめです。元気でおったら何一つ行政はやってくれません。今日は自治体の市長さんたちもおられますけど、はっきりいえば、病気になるから介護が来てくれます。病気にならないとほったらかしです。これは本当に矛盾ですよ。自分で頑張って医療費を使わない、介護保険のいらぬ独居老人を果たしてほっておいていいのか、これを最初に考えた北九州市職員はすごいと思います。

とにかく、助けないといけないと考えた女性消防団は、これまで助ける人を間違っていたのではないかと思い、話し合いを重ねます。その結果、防火目的のため、80 歳以上、75 歳以上でしたか、70 歳以上で健康、介護保険、病院に通っていないお年寄りのマップを作り、防火のために予防として訪問介護をするというシステムをつくりました。ローカル・リソースの最たるもので、全国からこれを視察に来ています。お金はゼロで動かしています。素晴らしいアイデアでしょう。だから対馬の皆さんも、健康になったらだめです。市役所は来てくれませんから。健康だと放っておかれるというのは、矛盾ですよ。

今日の国境フォーラムに話をつなげましょう。1 つは、もう一度、強調したいのですが、「ローカル」という言葉です。「ローカル」とは現場、「問題を共有している人の集まり」と思っただいてもいい。場所はどこであろうといいわけです。上対馬であろうと、厳原であろうと、場所はどこでもいいのです。

昔、私は学生時代に浅茅湾で釣りをしたことがあります。当時、大学紛争で「全共闘」関係の



指名手配の写真も、浅茅湾の船着場に貼ってあったのを記憶しています。これはすごいな、赤軍さえもここには逃げて来られない、と思いました。浅茅湾に行って釣るのですが、タイが釣れない。すると漁師の方が、エビを付けないと、イカではタイは釣れないよとおっしゃいました。でも漁師の方がやるとすぐ釣れるのです。私は1日やりましたけど、やっと2匹釣れましたかね。まあ、こんな話ばかりやっているときりがありませんが、必ず何かリソースがある。それをポジティブに見いだしてください。

2つ目は、ローカルの大きさはきりが無いということです。自分が問題を抱えた時点で大きさが決まるのです。ちょうど水とコップのような関係で、大きいコップを持ってくればたくさん水が入る。小さなコップだと少ししか入らない。ですから、ローカル=自治体ではないということ肝に銘じておいていただきたいのです。このローカルの例としては、個人でもローカル・ピープルということで、1人でできることもあります。なにも「国境フォーラム」というかたちでシンポジウムなどしなくても、1人で国境問題を超越する行動ができることもあります。

さて、個人、自治体とくれば、3番目は、国です。個人、自治体、国という、この3つがローカル・イニシアティブによって、国境を超えた事例でお話しします。言い換えると、ローカルには、個人としてのローカル、自治体としてのローカル、国家としてのローカルの3つの種類があるということなのです。

第1に個人としてのローカルについてですが、日本で原子爆弾の被害を受けたのは広島、長崎です。ところが、1984年ですか、チェルノブイリで原子力発電所の事故が起きたときに、被ばく者がたくさん出ました。ところが、この被ばく治療に日本人の医師は誰一人行っていません。このことに私は矛盾を感じました。世界最大の被ばく治療の医療技術を持っている日本人がなぜソ連に飛ばなかったのか。それは、被ばく者治療法、援護法があり、法律で縛りがあるからです。在日の方と日本人の被ばく者しか日本では治療はできません。あのチェ・ゲバラのお嬢さんがこの間、福岡に来ましたけど、あのキューバさえチェルノブイリから2,000人の治療のために子供を引き受けましたと聞いています。これは感動的です。しかし、日本は何もしなかった。それ以来、私は被ばくレスキューをつくりたいと思うにいたりました。戦争ではなくても原子力発電所の事故で被ばく事件が起きたときに、広島から医師団がレスキューとして飛ぶ。これこそ「ローカル・イニシアティブ」だとずっと思っていたのです。

すると、1995年に、当時の広島市の平岡市長が、原爆投下は国際法違反であるということで、オランダ、ハーグの国際司法裁判所に訴えに来られたのです。そのとき私もたまたまオランダで世界自治体会議に参加しており、平岡市長が講演に来られたと聞きました。世界自治体会議に一



緒に参加していた富野さん、元逗子市の市長でしたが、富野さんが「藪野、お前がそういう考えを持っているのであれば、平岡さんに直接言え」と言われたのです。「平岡を知っているから、今晚、一緒に中華料理を食いながら、それを言え」というので、私は平岡市長に直訴することになりました。レスキューをつくりませんか。人を助けることで、いわば人に与えることによって、人は振り返ってくれるものです。被害者意識ではなくて、人を助けるというメンタルで行動しませんか、と言ったのです。平岡市長は、うーん、しかしね、やはり被ばく者の方々に予算が欲しいし、そこまで余裕はないということをおっしゃり、その話は終わりました。

次の日、いわゆる市民相手に被ばくの訴えをされたときに、おそらく私の本を読んでいただいていたのでしょね、「ひょっとしたらこれを書かれた先生じゃないですか」と、わたしの『ローカル・イニシアティブ』を取り出して、尋ねられました。「はいそうです。読んでいただいていたのですね」という会話のやりとりをしました。

それはそれで、終わったのですが、ずっと時間がすぎて、驚いたことに2年前の朝日新聞に記事が出ていました。実は、平岡さんは退職した後、1人でNGOを作り上げて被ばく市民支援をされ始められていたのです。これはすごいですね。市長を辞めた後、踏ん返り返っているのではなくて、私が示唆したからかどうかはわかりませんが、しかし、個人の意思として、被ばく治療をNGOとして支援していくというネットワークをつくられた。あのときの精神は生きたのだなと感激しました。国境を超えた被爆者サポートシステム。私はこのとき平岡さんがすごい人であることをようやく理解しました。これがわかったのは20年後のことですが、後で分かるという話の例があります。個人としてもこういうことができるわけです。

もうひとつ。私もよく言われるのですが、「いつも人の前で偉そうなことを言うのでしょね」。そうです、大学の教師は偉そうなことを言います。「人の前で偉そうなことを言うのであれば、1つぐらいは人がびっくりするぐらいの社会貢献をしておきなさいよ」と言われております。そこで2つだけやっています。聖書には、善意、いわゆるボランティアなことは隠れて左手でしろと、右手ではしてはいかんとあります。人の目につくのはよくないという話ですが、私は逆に考えて、善意は人に言えと言っています。なぜかと言えば、人に言えばやめられませんからね、

1つは献血です。これは150回超えました。献血の話をしていると、もう3時40分過ぎますので。赤十字に行って献血をすると、患者さんには血はもらわない方がいいですよと言いながらも、血を採るんですね。皆さんご存じですか。献血するのはただですが、その400ccを血液製剤に消毒して、いわゆる血小板に替えて、リングルでといて皆さんに投薬したときに、いくら医療費が取られているかご存じですか。確か7万円ですよ。このこともやっぱり赤十字ははっきり言う



べきですよ。医療費が高い、私のただの血が7万円になる。製薬会社はもうけていますよ。

もう1つは、誕生日が来たときに、ある団体に誕生日の年のお金だけ寄付をするのです。50歳だと5万円、51歳だと5万1,000円。1年間生きていた喜びにそうしようと思うのですが、寄付よりも献血の方が楽ですね。献血はすぐ行きますけど、なかなか5万円は出せませんね。他人の結婚式に5万円出せるのに、ボランティアに5万円出せますか。これは厳しいですよ。金は人から取るが、自分からは絶対に出さない。この2つの行為は、人の前と言えるようになりましたが、人の前に立つためにはそれだけの苦勞があるという苦勞話です。手前みその話で申し訳ありません。

平岡さんが個人でやる被ばく治療の次に、自治体の話です。2つめの自治体という大きさもちろんローカルです。私は1994年にドイツに行きまして、ベルリンで学会がありました。今は、退職していますが、現役時代には、私も海外旅行に頻繁に出かけました。岩下さんには負けるでしょうが、年10回は超えましたね。まあ、スーツケースを空けている時間がないぐらい飛んだのです。国際会議に強くなるためには、英語なんかしゃべれなくていいですよ。This is a Penと言っていれば相手は分かります。相手が何言ってるかわからなくても、ああ、OK、OKで何とか通じます。とにかく、相手がYesかNoで、Yes. By the way とほかの話をすれば、何となく通じます。国際会議に強くなるには、時差ぼけとミスにこだわらないという、この2つだけです。朝が来たら起きる、夜が来たら寝る、これはどこに行ってもやればいい単純なことです。

あと1つ、付け加えれば、何でも食べることができるということは、必須ですね。エジプトでは、油の強いサテも食べましたし、タイではワニも食べました。現地の人に勧められた、それを食べないと失礼ですからね。さらに機内食は、食べ過ぎないということも必要です。海外旅行をしたとき、例えば、一番遠いアルゼンチンに行きましたけど、月曜日の朝に出て、着いたのは水曜日の夕方です。必ず機内食を一度抜く、これは原則です。時差ぼけがあって、1日36時間になっても食事は3度で終える。機内食を抜くのは難しいですが、胃腸から疲れてきますから。まあ、こんなことを言ったらきりがありませんけど。

1994年にベルリンに行ったのです。私のこれまでも最大のミスですけれども、旅行会社から電話がかかってきました。「藪野さん、どうして今日ベルリン行きに乗らなかったのですか」と尋ねられたのです。「うそっ？ ベルリンは明日ですよ」と言ったら、「それは到着日ですよ」と言われまして、えっ？ とびっくりしました。手帳に、誤って到着日を出発日と記載していたのです。海外旅行に行きそびれたのは初めてでした。すぐエージェントに言って、何とかならんかと言ったら、パリ行きの次の便がありますので、それを予約します。これはルート変更ということ



で3万円のサーチャージで大丈夫です。全部空港に伝えておきますので、チケットはベルリン行きですが、パリ行きに乗ってくださいということで、ことなきを得ました。搭乗手続きは済ませましたからということで済みました。パリからベルリンには、エアーフランスでノーマル運賃で飛びましたが。人生で唯1度だけですが、ノーマル運賃で飛んだのですが、ノーマルだと、どの飛行場でも買えるのですね。福岡空港の発券カウンターで、「パリからベルリンまで、蕨野の予約があると思うので、発券して下さい」というと、その場で買えました。ノーマルだと世界どこでも買えるのですね。

ベルリンの会議が終わってから、ポツダムに行きました。ぜひ皆さん、海外旅行をされるときはポツダムに行ってみてください。いわゆる、ポツダム会談の場所です。いわゆるスターリンとチャーチルとルーズベルトの3人が日本をどう降伏させるか会議をしたところです。3つ部屋があって、三角形の3つの角に、配置されていて、今は、ポツダム記念館として残っています。

そのときに、ご存じだと思いますが、ベビー、子供ができたというメモをルーズベルトに渡したのですが、それが原子爆弾投下の発端となりました。「リトルボーイ」という名前の付いた原子爆弾が広島に落とされた。「ファットマン」という名前の原子爆弾が長崎に落ちたのです。ファットマンというのは太った男とって、チャーチルの愛称ですね。

わたしがポツダム会談場を見学したのは、1994年ですが、その1年後の1995年、ちょうど平岡さんが原子爆弾反対を言われたその年に、たまたま新聞を見ていると、何とベルリン市議会が、広島に原子爆弾が落とされたことが決定されたのは、このポツダムであるとして、ポツダム市議会はそれを人類の悲しみとして訴えるという声明を出したのです。すごいと思いました。この責任の取り方。直接手を加えていない、それも占領されているポツダムですよ。そのポツダムけれども、そこでルーズベルトが決めたということに歴史的責任を感じるという声明を出したのです。私はすごいなと思いました。それだけの知的インテリジェンスが日本にあるのだろうかと考え込みました。これが私の言う第2のローカル、自治体としての1つのイニシアチブです。

これが国境を超えて、私個人の胸を打ってもいい、あるいは町の胸を打ってもいい。何も自治体の首長さん同士が手を握る必要はないのです。そのレスポンスをする人が個人であれ、あるいは今日、山口県立大学の学生諸君の見事な報告を思い起こしてもいいのです。そのレスポンスは高校生にも期待していますし、また、市民にも期待しています。具体的に誰にそのレスポンスがあったのか、誰に直接伝わったのかということは、平岡さんや、ポツダム市議会は期待していないのです。ただ伝わることを期待しているのです。これが「ローカル・イニシアティブ」です。だから、1度で終わってもいいのです。



第3のローカル。国家もローカルです。どういうことかということ、アメリカが日米摩擦で、日本がいろいろな自動車を造ったときに、自動車の部品をアメリカで買いなさい。部品を日本から輸入してはいけませんとして、しきりと80年代、90年代言われたのが、ローカルコンテンツです。部品はローカル、アメリカで調達しなさいという意味です。この場合、アメリカという国家がローカルです。ローカルというのは、その問題を共有する広がりを持った場ですから、国であったり、自治体であったり、個人であったりします。社会問題を共有したいという集まり、魂の塊です。

そのときに私は、これまた1995年ばかり話して申し訳ないんですが、1995年1月17日、阪神淡路大震災が起きたんです。1991年1月17日、これは湾岸戦争が起きた年です。1月17日、これは山口百恵の誕生日です。山口百恵を言って笑っていただける方は年ですね。今の若者は知りません。そのときに、阪神淡路大震災があったときに、介助犬を連れてスイスのレスキューが、兵庫、伊丹に降り立ったわけです。私は、なぜこんなに早くスイスのレスキューが日本に来ることができたのか、不思議に思いました。もう震災があった翌々日には来ているのですよ、たとえ10人であれ。これっていったい、どうしてそういうシステムが可能なのかということ調べてみたかったです。

たまたま、先ほど言った1995年にオランダのハーグにいたときに、よく知っているテレビ朝日の特派員で佐伯さんという方が、平岡さんの取材に来ていて、たまたまホテルのロビーでパタリ会ったのです。「こんなところで、よくまあ、会いましたね」と会話を交わしました。実は、1995年の阪神淡路のときに、スイスのレスキューがどうしてすぐに来ることができたのか、私は分からなかったもので、佐伯さんに暇な時間に、調べてくれないかと頼みました。というのも、彼はヨーロッパに常駐していますので、スイスのことも調べられるだろうと思ったからです。しばらくして、1~2カ月してから彼が私にレポートをくれました。すごいですね、日本の政府が、あるいは自治体でもいいのですが、公的機関。市役所レベルではだめだと思います。県知事、あるいは国レベルがスイスにレスキューを頼んだ瞬間、レスキューは何とチューリッヒ空港に飛んで行きます。その後、何が起きるか。我々はこれからレスキューとして日本に飛ぶ。チューリッヒから日本行きの飛行機の前に行って、誰か10人席を譲ってくれないか、ボランティアはいないかと言うのです。そうしたら、喜んでわたしの席を使ってくれという人がすぐ10人、20人出るというのですよ。皆さん譲りますか？ わたしが乗る、俺は格安航空券で楽しみにしていた海外旅行だ、どうしてキャンセルするのだとって、席を空けませんよね。どうぞとって、大勢のスイス国民が席を譲るのです。いわゆる国の、国民のそういうサポートシステムがあることによ



って、一番早い便に乗れます。だから、その瞬間に日本に来ることができるのです。それは、スイスという国民が世界を救いたいという、そういう気持ちを持ったレスキューの結果ですね。我々はそういうリソースというものを集約していかないといけませんね。

岩下さんの指示でストップウォッチは持たないということなので、あと1分で終わらないといけません。実は、我々は海峡を挟んでいろいろな紛争があります。しかし、何が一番重要か。この3つの例で私が何を一番訴えたかったかというのは、この本を右から左に動かすのにも手があります。手によって右から左に本を動かせるのです。本を動かすのにも手があるのに、まして人を動かすのには心があります。心が動かなければ人は絶対に動きません。心が動けばお金を出すのです。我々は、やっぱり国境を挟んだ中で心を動かすプログラムをつくっていかないといけないと思うのです。

あと15秒ですけれども、国境というものの以外に我々はいろいろなバリアがあります。障害者と健常者のバリア、男性と女性のバリア、いろいろな形で、目に見えない中で差別に苦しんでいます。我々はいろいろなバリアの中に、感動という、心動くという、そういうツール、リソースを持つことによって、いろいろなボーダーというものを乗り越えていく必要があるだろう。その1つに、国境を超える、あるいはこの国境フォーラムの成果が見えていけばいいなと思っています。

私の時計はスイス、レイルウォッチで1秒の狂いもありません。ちょうど40分になりました。ありがとうございました。(拍手)

(岩下) ありがとうございました。これぐらい時間を厳格に守れるのは、先生がテレビ慣れされているからでしょう。明日の選挙分析も楽しみにしております。

最後に藪野先生が言われた、いろいろなボーダーがある、いろいろな境界がある。我々のグローバルCOEの名前が「境界研究」という名前にしてあるのは、そのことを意識してのことです。国境だけではない、いろいろなボーダーを研究すると。しかし、中でも一番ハードルの高いのは、政治的な主権が絡む国境ということで、それをメインに今回やっております。

先生がポジティブとネガティブに考えるという話をして、俺の本は売れないと言われましたが、私は2万部売れたと聞いてびっくりしました。私が賞をもらった『北方領土問題』は、賞をもらわなかったら、おそらく3,000部ぐらいしか売れなかったんじゃないでしょうか。賞をもらって、朝日新聞がわっと書いて、産経新聞が「岩下けしからん」、「譲り合って解決するとは何事だ」と批判を始めて、それからようやく売れたからです。

そういう意味では、いろいろ苦労されているのだろうとは思いますが、『ローカル・イニシアテ



北海道大学グローバルCOEプログラム

📧 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

イブ』の2万部、ポジティブな考え方にたてば、素晴らしい成果と思います。どうぞ、藪野先生に拍手をもう一度お願いします。(拍手)

これから座談会に入ります。藪野先生にも退出時間まで加わっていただきます。ちょっと場を展開する関係で、5分ほどそのままお待ちください。すぐ始まります。1点だけお願いです。150人以上の方が来られておりますが、なにぶんここは会場が広うございます。どうぞ前の方に詰めてください。ぜひ3段ぐらい前の方に来ていただければと思います。それでは、5分後にまたお会いしましょう。(続きは、号外「国境フォーラム IN 対馬」速報で)

<http://borderstudies.jp/essays/live/pdf/tsuhimalive3.pdf>



DVD「ユーラシア国境の旅」絶賛上映中！





【現場報告】

「国境フォーラム IN 対馬」参加記

田村慶子

対馬は美しい島である。切り立った山々が突然視界から消えたかと思うと、小さいけれど息を飲むほどの美しい入り江や湾が眼の前に現れる。入り江や湾の内海は穏やかで、海底が透き通って見える。ただ、400 から 600 メートルほどの山々が島の大部分を占め、耕作にはあまり適さない。島の名物が対洲ソバナなのは、土地が痩せているからであろう。そのために島の人々は古代から海の民であり、島の中にある浅芽（あそう）湾では、昔はクジラを追い込んで捕っていたという。また、日本本土よりも朝鮮半島に近いその地理的位置を利用して、対馬では古くから朝鮮との交易も盛んであった。15 世紀から 16 世紀には朝鮮の李王朝と対馬の島主宗氏は条約を結んで独自の交流を行い、対馬が日朝貿易をほぼ独占する体制ができあがっていった。1607 年から約 200 年の間に 12 回日本を訪れた朝鮮通信使一行を釜山まで出迎え、江戸まで警護・随行したのは、対馬藩である。

「国境フォーラム IN 対馬」は 2010 年 11 月 12 日（金）－13 日（土）に対馬市の中心地厳原（いずはら）町の対馬市交流センターで開催された。これは、沖縄・与那国島で開催された第 1 回（2007 年）、小笠原諸島で開催された第 2 回（2008 年）、根室市での第 3 回（2009 年）に続くものであり、朝鮮半島への窓口として栄えた対馬に境界研究や島嶼研究の内外の研究者、自治体関係者などが多数集まった。

まず、12 日のラウンド・テーブル「ボーダースタディーズからみた国境と島嶼」で行われた報告と議論を概観しよう。報告は日英同時通訳が入って英語で行われた。なお、報告者の 1 人であったミッシェル・ブリヤール（リール大学、フランス）氏は急用で来日が出来なくなり、報告はキャンセルされた。

エマニュエル・ブルネイ・ジェイ（ヴィクトリア大学、カナダ）氏の「9.11 以降のアメリカ・カナダ国境」は、「世界で最も平和な国境」であるアメリカ・カナダ国境の報告である。2001 年の 9.11 事件までは、警備は穏やかでほぼ自由に行き来できた。これは、両国が北米自由貿易協定のメンバーであるために人とモノの移動が原則自由であることに加えて、同じ言語を共有する友好国であり、安全保障の関心もほぼ共通しているからである。9.11 事件以後は、ID カードの提示がなければ通過できないなど警備体制は強化されたものの、手続きには簡素で便利なシステムが導入され、両国の経済統合はますます加速化されている。近い将来には、安全保障でのより一体となった国境協力が行われるだろう。



カールステイン・インディゲン（南デンマーク大学、デンマーク）氏の「欧州オレスン地域」は、オレスンと呼ばれるデンマークとスウェーデン国境地域についての報告である。ヨーロッパの歴史は「国境を引く歴史」と言っても過言ではないほど、国境線はめまぐるしく変化してきた。だが、EU 結成と加盟国の国境を越えた協力によって、EU 内の国境は見えなくなりつつある。オレスン地域におけるデンマークとスウェーデン両国の協力は、EU 加盟国の協力の中でも顕著なもので、両国民は毎日橋を渡って行き来するなど生活面も含めての経済統合が進んでいるだけでなく、教育機関での相互入学も進んでいる、

張済国（東西大学、韓国）氏の「釜山と福岡：国境を越える交流」は、釜山市と福岡市の一層の交流進展のために何が必要なのかを報告したものである。日韓の相互交流は盛んになっているものの、さらに深化させるためには強い利害関係の構築が必要である。そのためには、日韓の間に横たわる問題（独島、歴史認識）の長期的解決だけでなく、釜山と福岡の間で「リトル日韓自由貿易協定」を結んで、地方政府・市民どうしの経済交流を強めていくことが望まれる。ただ、福岡は経済交流にはあまり熱心でなく、釜山が熱心に取り組もうとしているという温度差があつてなかなか進展していない。

嘉数啓（名桜大学、日本）氏の「島嶼研究からみた国境離島問題」は、6,000 を越える日本の島々の特徴を概観し、その中でも面積も人口も最大の沖縄本島およびその島々で進められている独自の産業や産品を説明した。ただ、観光は最大の産業であるものの、観光開発による土壌や水質汚染も深刻であるために持続可能な観光開発への関心が高まっていること、また、新たな経済的自立の道として「沖縄—台湾特別経済区」を設けて台湾との経済交流が進められていることも報告した。（編集注：報告のいくつかは *Eurasia Border Review* 次号に収録予定）

約 130 人が参加したフロアからは、ジェイ報告に対して、メキシコもまた北米自由貿易協定締結国であるが、カナダとアメリカ間の国境がなくなりつつある一方で、アメリカとメキシコ国境には依然として大きな壁がある。メキシコと他の 2 国の間には共通の安全保障の関心はないと考えていいのか、張報告に対して、釜山と福岡の温度差の原因は何か、といった質問が出された。

「世界で最も平和な国境」であるカナダ・アメリカ国境の事例は、日本と隣国の国境を考えたときには参考にならないかもしれない。また、デンマークとスウェーデンは言語が相互に理解可能なために、日本と隣国との交流の参考にはならないかもしれない。しかし、紛争も含めた相互交流の長い歴史と、経済関係の密接さゆえに共通の利害関係があることが両国の関係を強固なものとしている。4つの報告を聞いて、日本に住む私たちに求められるのは、対馬と釜山、与那国と台湾、根室とロシアが経済関係を深化させていくための、また対馬や与那国、根室を含めた日



本の境界自治体を発展、繁栄させるための知恵を出していくことであろうと改めて感じた。

13日（土）は、日本の国境地域に関わる実務会議、対馬の高校生の意識調査報告、関連自治体首長によるディスカッションなど盛りだくさんのプログラムが行われた。また、海外の研究者が参加していることに留意して、報告や紹介すべてに英語への同時通訳が付いた。

午前の実務会議「日本の国境地域を考える」は、古川浩司（中京大学）氏による「境界自治体の実務かつ機能的な定義について」という基調報告から始まった。報告者は、日本の境界自治体で聞き取りや資料収集を行い、自治体と東アジア諸国の交流や、国境離島の関連法制などについて調査を続けている研究者である。報告は、境界自治体の実務的な定義、境界自治体の機能を概観し、現行法制に基づく情報交換を含めた境界自治体ネットワークの可能性を述べた。

基調報告に続いて、対馬市、釜山市、福岡市、根室市、小笠原諸島、与那国町、稚内市、新潟市、佐渡市、隠岐島（島根県）、北大東島、竹富町（沖縄県）、石垣市など多数の境界自治体の事例報告や紹介が行われた。自治体それぞれの現状や抱える問題は異なっているとしても、率直な意見交換をすることで経験を共有し、今後の戦略や「境界自治体ネットワーク（仮称）」というネットワークづくりに活かそうという試みである。

このなかで主催地である対馬市と釜山市の事例報告を簡単に紹介しておきたい。

冒頭で紹介したように対馬は朝鮮半島との往来で栄えてきた。だが、戦後の断絶は島の経済を直撃した。加えて漁業の衰退によって島の人口は激減し、1980年代から韓国との交流の復活が模索され始めた。対馬は現在、島の人口を上回る韓国人観光客で少しずつ賑わいを取り戻しつつある。島の人口約3万5,000人に対して2009年の韓国人出入国者数は9万3,000人余りにのぼった。2009年からは定期航路に加えて、ソウル-対馬、釜山-対馬の空路チャーター便の運航も始まった。韓国人の主な目的はトレッキングと釣り、買い物である。対馬の山々は神の山々とされて地元の人あまり登らなかったため、手つかずの自然が残されていることが、自然がほとんど失われた韓国の人びとにとって大きな魅力となった。対馬市はこの交流を市民レベルで根付かせようと、朝鮮通信使行列を再現した「対馬アリラン祭」、日韓の著名ミュージシャンが集う「対馬ちんぐ音楽祭」、日韓のランナーによる「国境マラソン大会」を毎年開催している。さらに行政交流として韓国の影島区と姉妹島縁組を締結した。これは主に韓国からの漂流ゴミ問題を話し合うためである。対馬は細長いために漂流ゴミの「防波堤」になってしまい、大量のゴミが繰り返し海岸に押し寄せて深刻な問題となっているために、ゴミ問題や河川の浄化に関する行政交流セミナーが行われている。また、韓国との貿易も模索中である。

釜山市は、姉妹都市を世界中に23持って積極的に国際交流を進めている。国際交流のインフラ



整備は素晴らしい。釜山市の職員を 11 カ国に派遣して様々な交流を行っているのみならず、市内居住の外国人を主体とする国際委員会を組織して外国人が抱える問題の解決を話し合い、外国人向けの英文広報紙「Dynamic Pusan」も発行している。また、複数の言語で対応する「外国人コールセンター」も運営している。

各自治体の持ち時間は 10 分—20 分という短いものであったが、遠路はるばるこれだけ多くの境界自治体が参集し、それぞれの課題と取り組みを知ることは大変重要なことであろう。さらに、この集まりを境界自治体ネットワーク構築につなげていくことも強く求められている。いくつかの自治体からも「定期的な情報交換の場を持ちたい、ネットワークを構築して互いの課題を整理し、組織としても目標を共有するステップづくりを行いたい」（対馬市）、「互いの取り組みを共有することで、地域活性化に繋がる事業展開に結び付けたい」（根室市）、「境界自治体の振興策の国へのアピールなどを連携して取り組んでいく契機としたい」（与那国町、隠岐島）、「連絡協議会の設立を望む」（竹富町）といった声が上がった。

午前の最後は、山口県立大学国際文化学部学生によるプレゼンテーション「対馬の心象地図—高校生は韓国をどう見ているか」であった。対馬の 3 つの高校の生徒に対して実施したアンケート結果を基に、高校生が感じる「韓国との心の距離」の発表である。対馬の高校生は、実際にかかる時間や距離よりもずっと韓国を身近に感じていること、また国内では、対馬は長崎県にあるものの、高校生は福岡市の方が近くに感じていることなどが報告された。

報告した学生は指導教員（浅羽祐樹・林炫情先生）とともに何度も対馬を訪れて、自分たちの足と眼でこの島をじっくりと眺めたのであろう、報告には対馬への愛情と愛着さえ感じられた。学生の「対馬との心の距離」も短くなったに違いない。学生の多くは韓国に短期・長期で留学した、もしくはこれから留学予定であるという。彼女ら・彼らの将来が楽しみである。

13 日午後は会場をイベントホールに移して、基調講演と座談会が行われた。

基調講演「ローカル・イニシアティブ」の講師は薮野祐三（九州大学名誉教授）氏である。ローカルとは、講演者によれば、「田舎」「地方」という消極的な意味ではなく当事者主義の思想であり、そこに住む人が描きだす、宇宙にも等しい生活空間である。しかし、近代化と工業化のなかで多面的に存在したローカルのなかから 1 つのローカルが他のローカルを傘下に収めるようになり、傘下に収めたローカルが「中央」、他が「地方」に転落していった。ローカルの機能を取り戻そうというのが、現在の地方分権であり、ローカルが主体となって新しい生活空間を創造しようという運動がローカル・イニシアティブである。この運動を成熟させるために必要な基本理念は国際化であり、境界自治体にはとりわけそれが求められている、薮野氏はこのように結んで、



聞き入る自治体関係者と実務家を元気付けた。

「国境フォーラム IN 対馬」最後のプログラムは、座談会「ボーダーに暮らす私たちからの提言」であった。財部能成（対馬市長）氏は、対馬に韓国企業や韓国人所有の不動産が増えていることをマスコミは盛んに報道するが、それらは全体の不動産の1%にも満たないこと、対馬は穏やかに韓国との交流を進めていることを冒頭で述べ、韓国人の不動産購入よりも漂流ゴミ問題の方が深刻であり、有害物質の分析とその世界への公表が重要であると述べた。

長谷川俊輔（根室市長）氏の報告は、「確定しない国境」を抱えている根室の苦しみであった。ロシアとのビザなし交流が19年続いているが、最近ではロシア側から領土を話題とするような集会を禁止するように要請があったこと、ロシアのメドベージェフ大統領が北方領土の国後島を訪問（2010年11月1日）したために、北方領土への関心は一時的に高まったものの、またすぐに忘れられるのではないかと強い危機感から、最近では銀座（東京）で「北方領土を返せ」行進を毎年実施して、風化しつつある領土問題を世論に喚起しているとの報告もなされた。

八重山毎日新聞の松田良孝記者は、『八重山の台湾人』（南山舎）というルポで高い評価を受けているジャーナリストである。八重山は沖縄県に位置するにもかかわらず、八重山の人々は那覇に行くことを「沖縄に行く」と言うくらい、沖縄県に所属するという意識は薄い。戦後の八重山の発展に貢献した人のなかには戦前に台湾で教育を受けた人が多く、近年の観光客に占める台湾人の割合もとても高い。他の境界自治体と情報交換などを通して、八重山と台湾の人的・経済的交流をもっと進めるための方策を探りたいと結んだ。

パネリストの最後は、『日本の国境』（新潮新書）や近著『日本は世界4位の海洋大国』（講談社プラスアルファ新書）で注目されている山田吉彦（東海大学）氏である。氏によれば、現在少しずつ国境の概念は変わりつつある。国境離島は近隣諸国との接点であり、国際交流や観光、資源の共同開発などの経済交流の取り組みは海洋管理の重点事項として不可欠であることが認識されつつあり、民主党政権も国境離島や境界自治体を重視する政策を打ち出しているから、将来は明るいのではないかと述べた。

山田氏は、尖閣諸島での中国漁船が海上保安庁の巡視船に衝突した事件（2010年9月7日）で、連日マスコミの取材に追われている。取材がほとんど彼に集中すること、つまり海の国境の専門家が山田氏以外にあまり見当たらないという日本の国境研究の貧困さはいかがなものであろうか。このフォーラムを契機に境界研究や島嶼研究のより一層の充実と、境界研究ネットワークの構築と発展が求められているのであろう。



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ





【現場報告】

「境界自治体ネットワーク」の息吹
— 「国境フォーラム in 対馬」実務会議を終えて —

古川浩司

1. はじめに

2010年は、日本にとって、いみじくも『境界（国境）』を認識せざるを得ない年となった。9月の尖閣諸島沖での中国漁船衝突、11月のロシアのメドベージェフ大統領の国後島訪問など、連日のマスコミ報道に、国民の多くは、その意思とは無関係に、日本の『境界』を確認することを余儀なくされたことであろう。しかしながら、これとは別に、日本の『境界』自治体の住民は、『境界』意識の有無にかかわらず、日々そこに暮らし続けている。

2010年11月13日に対馬で開催された実務会議のお話を伺った時、4年前に「自治体の「脱国家政策」の可能性」と題する論文を執筆したことを思い出した。稚内市、対馬市、石垣市と与那国町の事例を踏まえつつ、その現状と課題を検討した上記論文で使用した『脱国家』という言葉に関しては、その後の自治体調査を通じて¹、「国境地域の存在が国家の存在をも前提としているかぎり、国境地域がすべてを自由にやることはあり得ない」（岩下 2010,7-8）ことを痛感したため、かなり理想的な言葉であったと現在では感じる。しかし、「国境を越えた自治体の政策は、世界各地でも見られるし、日本の境界地域でもその萌芽が見られる」という考えは、今もなお変じていない。一方、上記論文の結論で、「自治体が「脱国家政策」を実現させるためには、地域圏形成に向けた近隣自治体間の協力に加え、同様の状況を抱える自治体間の協力や当該地域の官民協力が重要である」（古川 2006, 337）としつつ、その実現に向けた行動努力までは積極的に行ってきたわけではなかったため、自身の研究と直結する今回の会議は、筆者自身にとって非常に感慨深いものであった。

そして実務会議の結果、大きな意義を見出せた反面、4年前に論文を書いていた頃には考えもしなかった困難にも直面した。しかしながら、少なくとも、「境界自治体ネットワーク」形成へと動き出したことは事実であるし、その動きを止めないためにも今後の展望を語ることも必要であろう。

以上の問題意識から、本稿では、実務会議を振り返り、その意義と課題を述べた上で、最後に今後の進め方に関する私見を述べたい。

¹ その成果として、古川 2010a、古川 2010d、古川 2008 などがあげられる。



2. 実務会議の概要

境界自治体ネットワーク形成に向けた実務会議は、「国境フォーラム in 対馬」のプログラムの一環として、11月12日9時より12時30分まで対馬市交流センターにて開催された。会議には、『境界自治体』の自治体職員の他、議員や研究者などが参加した。

なお、事前準備として、参加者に関しては、①基本情報（地域概要・所属組織の紹介）、②境界自治体としての政策（a.国際交流、b.海洋政策など）、③「境界自治体ネットワーク（仮称）」に望むこと等につきレジュメをご作成いただいた（このうち、②に関しては後述する）。

実務会議では、まず冒頭で司会を務めた長嶋俊介氏の趣旨説明の後、筆者が基調報告（「境界自治体の実務かつ機能的な定義について」）を行い、『境界自治体』に関する法制の現状を説明した上で²、『境界自治体』を『安全保障の最前線』もしくは『国際交流の玄関口』のいずれか、もしくは、その両方の機能を有する自治体」と定義した。なお、『安全保障の最前線』とは、具体的には、国境監視（例：CIQ・不法操業・不審船等への対応）、国土保全（例：領土・領海・排他的経済水域）、環境保全（例：漂着ごみ問題）などを指す。一方、『国際交流の玄関口』とは、境界交流による相互理解・地域振興（例：超国境経済圏）を意味している。

基調報告の後、会議を2部構成とし、第1部では、対馬・釜山交流を中心に、開催地である対馬市、その国際（境界）交流の相手である韓国・釜山広域市、そしてその釜山広域市と交流している福岡市と対馬市の属する長崎県の関係者に、特に日韓両国の国境を越えた国際交流に関してご報告いただいた上で、意見交換を行った。なお、境界自治体としての施策に関する報告概要は、以下の通りである。

第1部の境界自治体としての施策に関する報告概要（発表順）

- ①対馬市（地域再生推進本部副部長・豊田充氏）
 - ・韓国との交流（イベント交流・行政交流・その他）
 - ・漂着ごみ問題への取組
 - ・防人の島新法の制定
- ②韓国・釜山広域市（文化観光局国際協力課・黄正恵氏）
 - ・国際交流インフラの支援（部署別・都市別推進計画、釜山姉妹都市委員会、海外姉妹都市協力委員・外国人支援システムなど）
- ③韓国・東南圏広域経済発展委員会（前任研究員・李舜禎氏）
 - ・東南広域経済圏発展計画（超国境経済圏とのネットワーク構築など）

² 詳細は、古川 2010b を参照されたい。



④福岡市（総務企画局国際部国際係長・岡部孝雄氏）

- ・福岡市と釜山市との交流状況（行政交流都市、福岡・釜山経済協力協議会及び釜山・福岡アジアゲートウェイ 2011 実行委員会、経済協力事務所の相互設置など）

⑤長崎県（対馬振興局管理部長・江口博章氏）

- ・韓国との交流に関する長崎県の取組（日韓海峡沿岸県市道交流知事会議、日韓海峡沿岸県市道水産関係交流事業、21 世紀まちづくり推進総合補助金事業）
- ・新たな離島振興法の実現（「国境離島・外洋離島フォーラム」の開催）

続いて第 2 部では、上記以外の日本の『境界自治体』のうち、2007 年より日本島嶼学会・北海道大学スラブ研究センター共催で年 1 回開催されてきた「国境フォーラム」の 2009 年開催地の北海道根室市、2008 年開催地の東京都小笠原村、2007 年開催地である沖縄県与那国町関係者による基本情報および『境界自治体』としての施策などをご説明いただいた。これに引き続き、他の自治体関係者（北海道稚内市、新潟県新潟市、佐渡市、島根県隠岐郡、沖縄県北大東村、石垣市、竹富村）及び内閣官房総合海洋政策本部事務局関係者に同様に基本情報や施策をご紹介いただいた。

なお、境界自治体としての施策に関する報告概要は、以下の通りである。

第 2 部の境界自治体の施策に関する報告概要（発表順）

①根室市（総務部北方領土対策課長・高橋雅典氏）

- ・北方領土問題により様々な制約を受け、特殊な事情におかれている状況説明

②小笠原村（東京連絡事務所長・湯村義夫氏）

- ・外国船籍の漁船等で発生した患者に対する救急受診対応
- ・沖ノ鳥島（日本最南端）等での海洋資源調査（東京都・国）

③与那国町（教育委員会教育長・崎原用能氏）

- ・台湾花蓮市との交流（中学生修学旅行事業など）

④稚内市（建設産業部サハリン課長・佐藤秀志氏）

- ・サハリンとの交流（人的交流の促進、稚内港を拠点とした経済活動の促進、定期航路の安定的な運航と充実、サハリン事務所を拠点とした情報収集と発信・強化、自由貿易地域構想の実現に向けた取り組み推進）

⑤新潟市（環日本海経済研究所調査研究部研究主任・新井洋史氏）

- ・環日本海地域を重視した国際交流政策（経済交流の推進、物流・人流の拠点性の向上、外国人受入の推進、交流推進の体制）



- ⑥佐渡市（伝統文化と環境福祉の専門学校・塚本健二氏）
 - ・国際交流（市役所プロジェクトチーム「佐渡・東アジア交流推進会議」の設置など）
 - ・海洋政策（「海ごみサミット・佐渡会議」の開催など）
- ⑦隠岐郡（隠岐広域連合議会議長・波多紀昭氏）
 - ・竹島領有権確立運動に対する取組
- ⑧北大東村（(株) フロンティア・プラネット・大城リエ子氏）
 - ・漁港建設
- ⑨石垣市（企画部参事兼観光課長・宇保安博氏）
 - ・台湾との交流（国境地域間交流推進事業、台北教育大留学生派遣事業、台湾東部・八重山諸島観光経済圏の形成など）
- ⑩竹富町（企画財政課企画係・小濱啓由氏）
 - ・海洋政策（生活保全航路の改善、海岸漂着ごみ対策、油化プラントの実証実験、竹富町海洋基本計画の策定）
- ⑪内閣官房総合海洋政策本部事務局（内閣参事官・上原淳氏）
 - ・低潮線保全法の整備（基本計画の策定、低潮線保全区域の指定、特定離島における拠点施設の整備）

ところで、第2部においても、第1部と同様に、当初は質疑応答の時間も設定していたが、各報告・発表者の時間が当初主催者の設定していた時間よりも超過したこともあり、質疑応答を行うことなく終了した。詳しくは後述するが、この点は反省材料として今後に活かしたい。

3. 意義と課題

これまで述べてきたように、実務会議は、関係者の予想を上回るほどの大盛況の中で終了したが、その意義と課題として、次の点があげられる。

まず意義としては、『境界自治体』が共通して保持する機能に関する意見交換および情報共有を行うことができたことがあげられる。このことは、会議後に行ったアンケートで、「釜山広域市と福岡市の間に位置する対馬市の関わり方を考えるために情報交換や協議の場を定期的に設定していくことの必要性を感じた（対馬市・豊田氏）」、「対馬市のイベント交流や行政交流セミナーを台湾との交流促進のために参考にしたい（石垣市・宇保氏）」、「福岡アジアゲートウェイの実行が、今後の八重山（石垣・竹富・与那国）と台湾（花蓮市等）が目指す交流の先進事例として大変参考になった（竹富町・小濱氏）」という主旨の回答があったことから読み取れる。これまで



全国市長会、全国町村会という枠組みがあるとは言え、これらは『境界自治体』とは無関係であることを考えると、同様の機能を有する自治体を一堂に集めた会議を開催できたことは、今後の展開次第では後世高く評価され得ると言っても決して過言ではないであろう。また、アンケートの回答にはなかったが、会議終了後に、とある参加者より、「釜山広域市の国際交流のインフラ支援が参考になった」という意見もあったことも付記しておきたい。

一方、課題としては、まず『境界自治体』をいかに定義するかという点があげられる。実際、『境界自治体』の定義を広く捉えて参画自治体を増やすことにはメリット、デメリットの両面がある（新潟市・新井氏）」というご指摘もあり、形成されるべき境界自治体ネットワークの方向性をより明確にするためにも、定義の問題に関しては引き続き検討する必要があることを痛感した。

次に、意義としてもあげたが、逆に単なる情報共有の場に終わってしまったという点で、さらなる期待をしていた参加者には物足りなさを与えてしまったことも課題としてあげられる。「実務会議」と銘打つ限り、自らの施策を紹介し、それに対する意見交換を望んでいたにもかかわらず、説明する時間もそれに対する意見交換の時間も十分に与えられなかったことは、今後の反省材料とし、次回の実務会議では、少なくとも今回の倍の時間を確保できるように提言したい。

最後に、前の点と関連するが、『課題（議題）設定』の必要性である。主催者側の準備不足に対する批判を承知で言えば、主催者側に、参加者の中から、そのような意見が発出される期待があったことも事実である。ただ、先述したとおり、これは双方が考えるべきことである。そこで、現時点で、議論の叩き台として、次の2点を来年の実務会議で設定すべき議題を提起したい。

第一は、「超国境経済圏の可能性」である。具体的事例としては、福岡・対馬ー釜山経済圏、稚内ーサハリン経済圏、八重山ー台湾東部経済圏があげられる。そこで、これら3つの事例を通じて、いわゆる海外の経済特区制度に通じる自由貿易地域制度を検討するための議論の場の設定を提言したい。

第二は、「国境離島新法・海洋基本計画の可能性」である。すなわち、『境界自治体』の望む施策が現行制度により実現できるのか、それとも、新法でないと実現できないのか」という問いを考えてみたい、そこで、国境離島新法に最も積極的な対馬市、海洋基本計画策定中の竹富町の取組の比較や、他の『境界自治体』や低調線保全法を所管する総合海洋政策本部事務局関係者の意見を踏まえながら議論を進めることを提言したい（なお、これらの議題は一例であり、あくまで叩き台であるため、この他にも、今回の参加者からも次回の実務会議に向けて積極的なご提案がなされることも期待したい）。



4. まとめに代えて

本稿では、対馬で開催された実務会議の概要を踏まえた上で、その意義と課題を述べ、特に課題として『課題設定』の必要性を提起した。この点は、筆者による指摘にかかわらず、何らかの形で、進展していくものと確認しているが、最後にさらに長期的な視点から、まとめに代えて、今後の課題を指摘しておきたい。

例えば、「超国境経済圏」実現のための自由貿易地域制度や国境離島新法は、現行法制から逸脱し、政治的判断が必要となる点で、その実現のためには、国会議員（特に首相や関係大臣）もしくはその関係者の協力も不可欠となろう。実はこのことも、冒頭で述べた拙稿でも言及していたことであるが、国家のあり方を変える提言を実現させるためには、立法者である国会議員（特に首相や大臣）のリーダーシップが重要だからである。政策を実現するために、首相や大臣のリーダーシップが重要であることは、例えば、小泉政権の「構造改革特区」制度が、首相の（解散までして積極的に国民の信を問うた郵政改革とは対比的に）消極的なリーダーシップにより、事実上、「構造『微調整』特区」制度に留まってしまったことから明らかである。特に、近年の政治家によって国家のあり方に関して決断できないことが日本の停滞を招いていると思われる³。

と言え、今後の展開は決して明るいものであるとは言えないが、情報発信次第では決してそのように言い切れないとも考える。ちなみに、首相のリーダーシップを促すためにも、同様のことが境界自治体の首長、ひいては地元企業及び住民にも求められることは言うまでもない。

最後はかなり野心的な提言になってしまったが、本論を締めくくりの当たり、最後に改めて主催者である北海道大学スラブ研究センター、笹川平和財団、並びに、お忙しい中、全国各地の『境界自治体』より駆け付けてくださった参加者の皆さんに改めて謝意を表しつつ、「境界自治体ネットワーク」の息吹がこれからさらに大きくなっていくことを期待したい。

【参考文献】

岩下明裕編著（2010）『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』北海道大学出版会

古川浩司（2010a）「日本の国境隣接地域ブロック（北海道・九州北部・沖縄県）における東アジアとの交流・連携に関する研究」（平成 21 年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書：http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/kokudokeikaku_fr8_000040.html）。

古川浩司（2010b）「日本の国境離島法制—現状と課題—」（「都市経済研究」2010 年第 1 号所収：http://npil.canpan.info/report_detail.html?report_id=7482） 58-64 頁。

³ この点に関しては、古川 2010c も参照されたい。



古川浩司（2010c）「戦後政治家論」（諏訪春雄編著（2010）『平成異変 打開のリーダー』勉誠出版所収）279-291 頁。

古川浩司（2010d）「国境地域の挑戦」（岩下明裕編著（2010）『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』北海道大学出版会所収）149-177 頁。

古川浩司（2008）「東アジア海洋世界における日本—過去、現在、未来？—」（『太平洋地域の過去・現在・未来』中京大学社会科学研究所所収）81-97 頁。

古川浩司（2006）「自治体の「脱国家政策」の可能性—稚内市・対馬市・石垣市の事例から—」（『社会科学研究』第26巻第2号、中京大学社会科学研究所所収）317-343 頁。



【現場報告】

境界島嶼ネットワーク始動：国境フォーラム IN 対馬・実務会議総括

長嶋俊介

1 島関係者・境界島出身者として

国境フォーラム IN 対馬の実務会議は初期の目的を果たし、交流ネットワークの基盤ができたことは、島嶼(学会・出身者)関係者として、慶賀としたい。狭義国境自治体から→幅と内容が他の島々にひろがり→対岸国の一部とも、何か共有できそうな→そういう広がりや意識にもなりつつある。今回かいま見られた成果の一端ともいえる。文字通り網の目があらいままだが、日本列島のはじっこの枢要各地にまでひろがるネットができつつある。

しかしあくまでも出発点としてであり、課題は多い。各出席者からの報告は個別にあるので、また次なる会合での確認と発論があるはずなので、ここでは総括的印象のみを記す。



1960年論者は佐渡から派遣され北朝鮮



旧峰町志多賀の書店看板に記された国境島

*帰還船内を案内してもらった。曾我母子境界島認識は、多元的であり、拉致事件被害者家族は我が実家(商店)に買い物に来ていた。親和国境は具体課題である文化・社会・経済・政治そして環境問題にもかかわる。

2 対馬は境界「研究」交流ネットの発祥地：史跡・現実・交流そして発信・政策

「国境トンネル」が鰐浦から国境展望台真下近くを通り比田勝方向に抜ける所にある。その名は、自治体・地元の人以外にはほとんど知られていない。対馬の「境界島」の歴史は、魏志倭人伝以前から、そして今日に至る、対馬史そのものの中核をなすほどに重い。それだけに境界島案内や説明にも2・3日が必要である。

通例ツアーから外れる場所にも、そのような遺物が立体的・広域的に散在している。倭寇の基地、防人古代城、古墳群、文禄・慶長の役倉庫群跡、ナキモフ号(日本海海戦沈没)砲台、朝鮮通信



使外交機関跡、同宿泊寺・山門、小西行長の娘廟、漂民家跡、小船越梅林寺(応永の外寇=対馬帰属問題として後日持ち出されることもある、後の文引交易常務箇所)、朝鮮人炭焼き跡地、韓国渡来要人顕彰碑(各所にある)等は、マニアックな史跡のようだが、全国区的に意義ある史跡で、国境・境界島の立つ位置の重み・苦しみ・役割・リスク・交流を、島や国内外の人にしっかり知ってもらえる場所である。壱岐・対馬・馬渡島は壊滅的外寇経験地であり、対馬はその多重被害・加害拠点かつ善隣親和外交的克服地である。

今後とも深い研究が多角的に必要な場所である。そこから「交流」ネットが始まることも意義深い。国境フォーラム終着駅が、次への始発点となった。



鰐浦側から見た国境トンネル



比田勝側から見た国境トンネル

* 国境(境界)は見る側・みる立場により、見え方が一変する。このトンネルの表現は、シンプルにしてかつ興味深い。

3 境界島の立つ位置・発言の180度転換

今回自治体の方々も含めた実務家フォーラムの狙いの一つは、境界島からの発信:地元視座の問題状況・現状認識・課題の披瀝にあった。当事者的には小さなことに思えることでも、外には大きく響く境界島事案もある。第二は、他の境界島の事案から、気づく自分の島の立つ位置の特異性・重要性・共通性がある。第三は、それと関わる、県・国・シンクタンク関係者・関連周辺都市の目線の確認であり、「境界島存立」のエンパワメント(単なる自立ではなくそれを妨げている条件の除去・改善)的基盤として重いものがある。

あくまでも島から見た実務協議の意義だが、いままでは島は孤立し、発言も「遠吠え」的に消えていた。それが届く意見になり、政策的にも配慮される事態の出現は、画期的である。中央・国策としての要塞島押しつけや、境界変動・通航制限による末端地化という、従来のトップダウン



ン型境界島構図とは 180 度違う。

4 境界島発言に関する印象とお詫び

今回は時間が短く発言者には大変失礼な設定になってしまった。また趣旨説明を咀嚼してもらった丁寧な案内にも欠けていた。このことを詫びたい。そのことが、自治体のリーダーから引き出したかった「国境事実と認識」の研究者とのギャップとしても映ってしまったかもしれない。具体的には、領海・EEZ 起点島(無人島を含む)負担・危機認識・有利性発露経営への関わり、国境交通交流拠点としての歴史と展望(生々しい当事国間関係での課題)、民間・自治体役割と対応限界打開策等である。これらは初回だったので様子見的・儀礼的表明制約がかかり、かつ時間も素通りであった。これらを率直多様に意見交換できるようになるには、さらなる積み重ねがなくてはこそ可能にもなる。多元的交流(国内類島・境界対岸当事者、経済・文化・史跡保存・観光、資源・境界協働管理等)をめぐる議論が境界・くにざかいの島々で、次回以降多様な積み重ねが可能であることを確信する。



移動展示「知られざる日本の国境」IN 対馬



【現場報告】

21 世紀の伊能忠敬：対馬調査隊からカニ食べ隊／泳ぎ隊へ？

浅羽祐樹

対馬調査隊

伊藤阿弥加、河村麻衣、酒井陽平、藤井里江、藤村菜美、山本美里、林炫情、浅羽祐樹、私たち 8 名はこう名乗った瞬間、「イける」と思った。それくらい名前は重要だ。いつしか、そう呼び合うことが心地よくなっていた。

対馬の心象地図：高校生は韓国をどう見ているか

対馬調査隊のミッションは、対馬の高校生たちははっきりと意識していないかもしれないが確かに抱いている心のボーダースを描くこと。むしろ外部の人間こそ指摘しやすいことを憚らず指摘すること。当事者にとっての暗黙知を「かたち」づけ、制度知として共有できるようにすること。特段驚くことがない知見であっても根拠を示して確証すること。

21 世紀の伊能忠敬

地図を描くとはどういうことか。特に、心の地図を描くとはどういうことか。調査の内容や方法以上に、調査の意味について、何より、対馬調査隊の存在意義について、トコトン話し合った。グルグル回り、温故知新。「あ！」と閃いた。19 世紀初頭、伊能忠敬が全国を測量して歩き、『大日本沿海輿地全図』を完成させたように、対馬調査隊は「21 世紀の伊能忠敬」になると決意した。

山口県立大学発：国際的に行動する能力

山口県立大学では、「国際的視点を持ち、地域の諸課題を文化という側面から比較分析できる教養と技能を備え、国内及び国外における実習や留学経験、実践的な意思疎通能力に裏打ちされた行動力を発揮し、地域の国際化、個性豊かな地域文化の発掘と創造に資する人材を育成(公立大学法人山口県立大学中期計画)」しているが、特に国際文化学部(学部長岩野雅子、http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/index.php?M_ID=3)では、「すべての学生が国内又は国外の実習や留学を通して国際的に行動する能力を身に付ける(同中期計画 No.10)」ことを目指している。今回の対馬調査では、問題の発見、調査の企画・実施、そして、その結果を国境フォーラムや韓国学研究会第 14 回研究発表会(2010 年 12 月 11 日、広島大学、<http://www.aksj.org/14kennkyuhoukokukai.pdf>)の場で発表するといった一連の活動を、学生と



教員が最初から最後まで一緒になって行うことで、創造・交流・行動・発信といった山口県立大学の教学上の成果を示すことができたのではないかと自負している。

私たち家族

ヨン様はファンのことを「私たち家族」と呼んでいる。国境フォーラムや韓国学研究会第 14 回研究発表会では口頭発表した調査結果を論文「地図の遠近感：対馬の高校生は韓国をどう見ているか」(『山口県立大学学術情報(国際文化学部紀要)』第 3 号、近刊)としても刊行する予定である今、「対馬調査隊」にとって対馬調査は「家族旅行」としてそれぞれの思い出に刻まれている。

「私たち家族」、「21 世紀の伊能忠敬」は、「対馬調査隊」だけでなく、「19 世紀の伊能忠敬」が測量しなかった根室や小笠原・与那国でも、「カニ食べ隊」や「泳ぎ隊」にもなる!!!



韓国学研究会第 14 回研究発表会での様子





【現場報告】

「エトピリカ文庫対馬」の開設および維持のために

山上博信

1 エトピリカ文庫対馬を開設すること

国境フォーラムは、対馬での開催をもって日本を一周（与那国・小笠原・根室・対馬）したことになります。

国境フォーラムに関わった境界研究や島嶼研究に関わる研究者たちは、国境フォーラム IN 対馬の開催を記念し、日本や世界の様々な境界研究にかかわる図書や文献などを集め、国境隣接地域に暮らす対馬市民のみなさんに対し、これら資料を提供することを目的としてエトピリカ文庫を対馬にも開設することにしました。

2 エトピリカ文庫の趣旨とエトピリカ文庫対馬実現への協力体制

ここで、エトピリカ文庫開設の趣旨について、GCOEのHPから引用しつつご説明申し上げます。

『北方領土問題：4でも0でも2でもなく』（中公新書）により第6回大佛次郎論壇賞（2006年：朝日新聞社）を受賞した拠点リーダー岩下明裕が、根室市に行った寄付をもとに、2007年に北海道立北方四島交流センター「ニ・ホ・ロ」に設置された文庫です。エトピリカとは、千島列島や根室地域で境界を越えて飛び回る海鳥であり、その名称とロゴには、北方領土問題の解決と日ロ間の国境が自由に往来できる日を待ち続ける地元のみなさんの思いが込められています。文庫にはロシアに関する文献のみならず、様々な日本の境界地域の書籍・映像資料も収められています…。

エトピリカ文庫は、根室に引き続き、昨年春、北海道大学総合博物館（以下、「エトピリカ文庫北大」と言います。）にも開設されました。

筆者は、エトピリカ文庫北大開設に際し、小笠原、南北大東、八丈・青ヶ島の各地域の自治体および教育委員会に協力を要請し、書籍や資料の収集をいたしました。

その後、筆者は、国境フォーラム IN 対馬開催を記念してエトピリカ文庫対馬に開設するとの動きが起きつつあるとの報せを受けました。この企画は、日本島嶼学会における事実上のモットー「研究の成果は、地元のみなさんに還元すること」にも適うすばらしい内容であること、対馬最北端と朝鮮半島の最短距離はわずか49.5kmであり、対馬市民がほかの地域の住民以上に国境問題に関心を持っていることから、できる限りの協力をさせていただくこととしました。



具体的には、筆者の持つブログを通じて情報発信をすること、多数の研究者に呼びかけ人になっていただくべく要請をすること、そして市役所とは違って、利用者である対馬市民の間で関心を高めることです。

3 エトピリカ文庫の立ち上げ方針と募金の呼びかけ

エトピリカ文庫対馬の事業を立ち上げ、永く維持するためには、一定の費用がかかることから、研究者と対馬市役所の間で協議を重ね、ふるさと納税により、広く募金を呼びかけることとしました。

募金呼びかけ人には、日本島嶼学会会員を中心に、多数の著名な研究者が名を連ねていただくこととなりました。同時に、書籍や資料など物件の寄贈よりも募金を優先し、それを原資として文庫にふさわしい資料を選書する方針が確認されました。

(1) 呼びかけ文

北大グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」をサポートする私たち研究者は、日本の国境隣接自治体の図書館へのエトピリカ文庫設置を支援したいと考えています。文庫は日本や世界の様々な境界研究にかかわる図書や文献などを集め、国境隣接地域に暮らす市民のみなさんに資料を提供することを目的としますが、同時にこれを国境地域にかかわる情報を広く共有できるネットワークとして育てていきたいと考えています。将来的には与那国、石垣、稚内から小笠原など日本中の地域にこれを増やしていくことも考えていますが、さしあたり 2010 年 11 月の対馬での国境フォーラム開催をターゲットに、対馬での文庫開設を目指しています。

文庫開設にともない、国境問題にとりくむ実務家の方々や国境に関心をもつ市民のみなさんのご寄付の協力をぜひともお願いします。

(2) 2010 年 10 月 19 日現在の呼びかけ人（順不同）

- 鈴木勇次 （長崎ウェスレアン大学教授・日本島嶼学会会長）
- 長嶋俊介 （鹿児島大学国際島嶼教育研究センター教授・日本島嶼学会理事）
- 遠部慎 （徳島大埋蔵文化財調査室助教・日本島嶼学会理事）
- 佐藤由紀 （早稲田大学社会科学総合学術院助手・日本島嶼学会理事）
- 対馬秀子 （埼玉医科大学短期大学非常勤講師・日本島嶼学会理事）
- 山上博信 （国立民族学博物館客員研究員・日本島嶼学会理事）



- 大西広之 (日本司法支援センター・日本島嶼学会監事)
川口祐二 (三重大学客員教授)
前泊美紀 (沖縄県那覇市議会議員・日本島嶼学会会員)
佐久川政吉 (日本島嶼学会会員)
鍬方志郎 (元兵庫県飾磨郡家島町長・日本島嶼学会会員)
中谷誠治 (パラオ国際サンゴ礁センター・チーフアドバイザー・日本島嶼学会会員)
吉岡慎一 (みずほ総合研究所・日本島嶼学会監事)
可知直毅 (首都大学東京教授 小笠原研究委員長)
延島冬生 (小笠原学研究者)

(3) 対馬市民の受け入れ協力について

幸いなことに、現地協力者として、対馬観光物産協会事務局の全面的なご理解をいただき、募金の呼びかけ文に添付する美しい写真をご提供いただきました。同協会の協力もあってエトピリカ文庫開設に関しては、現地の関心を高めることにつながりました。





4 エトピリカ文庫対馬開設記念セレモニー

準備は万端整い、2010年11月13日午後、厳原の対馬市交流センター4階「対馬市立つしま図書館」の一角にエトピリカ文庫対馬がオープンしました。

開設記念セレモニーには、エトピリカの舞う根室市から長谷川俊輔市長がかけつけ、対馬市の財部能成市長にエトピリカ文庫の銘盤が贈呈されました。

セレモニーに際しては、財部能成対馬市長、岩下明裕 GCOE 拠点リーダー、長谷川俊輔根室市長、鈴木勇次日本島嶼学会会長が順に記念スピーチをしました。



5 今後もエトピリカ文庫対馬の事業維持に理解と協力を求めること

エトピリカ文庫対馬の事業を維持するためには、一定の資金が必要です。私も対馬から戻ってすぐ東京池袋のサンシャインで開催された「アイランダー」の対馬ブースで寄付の呼びかけをいたしました。

ふるさと納税による寄付受け入れは、今後も全国のみなさまに広く協力を呼びかけて参ります。詳しいことは、わたくしのブログの記事をご覧ください。

「対馬エトピリカ文庫の開設にむけて寄付のお願い」

<http://bonin.ti-da.net/e3250054.html>

ふるさと納税による寄付の申込書 (PDF ファイルバージョン)

<http://home.ktroad.jp/heiwa/Etupirka1102.pdf>



■寄付の申し込みのお問い合わせは

対馬市地域再生推進本部 協働のまちづくり推進グループ

TEL.0920-53-6111 内線 308

FAX.0920-53-6122

■寄付に関する税額控除等に関するお問い合わせは

対馬市市民生活部税務課

TEL.0920-53-6111 内線 220・221

最後に エトピリカ文庫を各地に開きたい

根室で産声を上げたエトピリカ文庫は、北大総合博物館、対馬と開設されました。境界研究者、島嶼研究者は、与那国や小笠原をはじめ、各地の境界地域の住民のみなさまに関係書籍や資料を提供したいと考えています。

今回のケースは、対馬市役所のふるさと納税という興味深い手法が採られました。世界にはさまざまなファンドレイジングがあると聞きます。

今後とも、各地の境界地域の実情に即した「エトピリカ文庫」を開くことができると願っています。



島の見本市「アイランダー」対馬ブースで寄附の呼び掛けをする筆者(右)とスタッフのお二人



【現場報告】

対馬リトリート：「見えないけれどあって、あるけど見えない」国境の身体性

佐藤由紀

与那国に始まって小笠原、根室と続いてきた国境フォーラムも今回の対馬で国境島嶼自治体を一巡することとなった。与那国における第一回国境フォーラムから早四年。国境フォーラムは関係者のひたむきな尽力と惜しみない愛情によってすこやかに成長を遂げた。

今回、国境フォーラムの開催地となった対馬は、南北に長く島の北端から対岸の釜山までの距離が 50 km。韓国展望台からは、条件を整えば釜山の街が見えるという。現場主義の我々はその「国境」を確認すべく今回もまたリトリートを実施した。

50 kmとはそんなに近いのだろうか？と思いつつ海の彼方に目を向けていた時、誰かが携帯電話の画面を見て驚きの声を上げた。「あれっ？<K>っていうマークが出てる。」Kは Korea のK。つまり、展望台付近は電波が韓国圏になる場合もあり、国際ローミングにしていると、はぐれた同行者にうっかり電話しようものなら、知らずのうちに高い通話料金を取られることになる。電波で国境の現場であることを認識するという期せずしての経験は、「見えないけれどあって、あるけど見えない」という国境の本質のひとつを再確認するものとなった。

展望台から半島を望んだが、あいにくその日は黄砂の影響で明確に確認できるとまではいかなかった。しかし、向こう側にあるということをつかっていた上で見ていると、なんとなく、半島のシルエットが感じられる。「うーん、見えますかねえ？」と誰かが言うと、「心の目で見て」と誰かが言った。私は「見える？」といぶかしげに私のまなざしの向こう側を覗き込んだ同行者に「ココロメデミテ」とおうむ返しに伝えた。

確かに、遠方にそれらしきものを望むことは出来る。しかし、私たちは国境を確認しようという意識で半島にまなざしを差し向け、釜山の街の気配を 50 km離れたこの場所から感じ取ろうとしているが、当然のことながら、国境が見えるわけではない。それを十分に認識しているはずであるにもかかわらず、国境を可視化し自己から切り離れた地点で認識しようとする意識の潜在は、国境は<他者性>をもつものという意識が我々に潜在していることを表しているのではないだろうか？

韓国からの参加者が帰途につくとのことで、バスは比田勝港へ向かった。国際ターミナルと書いてあるが、入管手続きはどこですのさ？ と周囲を見回していると、乗船客の列の横に小さな案内パネルが設置された建物に気が付いた。どうやらこれが入管というわけらしいのだが、



乗船客が列をなしていなければ、それとは認識しづらい建物である。そしてここでの出入国手続きは、「ハイ、どうぞ。ハイ、どうぞ。」といった具合で、乗客たちが捌かれてゆく「にわかシェンゲン」的状況らしいのだ。どこかで似たような状況を目にしたことがあるな、と考えていたところ、十数年前に訪れたコロンビア・エクアドル国境の「一応、国境警備」的な掘っ立て小屋の付近で展開されている風景（もちろん、比田勝港の設備はそれとは比較にならないものであるが）がよみがえってきた。



韓国からの参加者も一緒に「日露友好の丘」を視察（黒岩エッセイ参照）



今日はかすんでみえない釜山の夜景を心でみる（ちなみに翌日は快晴でばっちり）



【現場報告】

対馬で考えた北方領土

本間浩昭

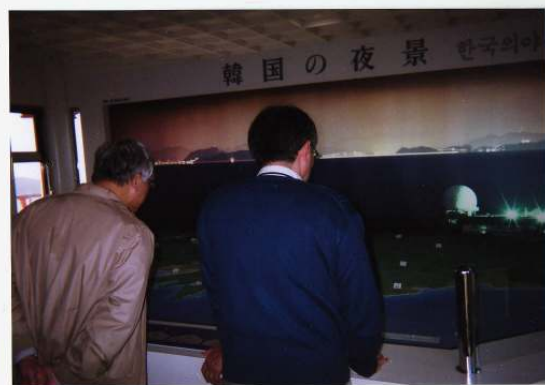
対馬の“見えない壁”

日本と韓国とを隔てる対馬海峡の“壁”は、黄砂で見えなかった。いや、目に見えるようなラインが海に引かれているわけではないから、仮に視界が良かったところで、そもそも見えるというものではない。だが、根室海峡を左右に隔てている“見えない壁”を足かけ 22 年間見続けてきた私にとって、そこに何かの違いを垣間見ることができるのではないかと、とかすかな期待をこめて水平線の彼方に目をこらした。

対馬の北端に近い対馬展望所。ガイドブックやパンフレットには「韓国までわずか 49.5km」と書いてある。もちろん誤りではない。陸から陸までの距離はそれだけあるのだろうから。だが、実際の国境線は対馬海峡の中間の海に引かれている。半分の 24.75km 沖にある海の国境線。そこから半島までの距離を意識する者は、まずいない。おそらくそのあたりに、ボーダー意識の希薄な日本人の現実がある。

毎日新聞北海道面で 3 回の企画を書いた（記事参照）。初回で国境を越える電波の話を取り上げた。国際ローミングサービスで韓国の提携事業者の電波を拾ってしまうボーダーの現実に、私自身が驚いたからだ。

「韓国の会社は電波が強いようです」。根室に戻ってから日本島嶼学会理事の山上博信先生とメールでやりとりをされていて、そうご教示いただいた。本来であれば、釜山から 25km 付近まで届けば十分はずなのに、対馬北端の 50km 先まで届く強い電波を韓国の携帯電話会社は発している。その背景に何があるのかは、もちろん分からない。だが、おそらく「何か」があるのだろう。





電波という“見えない壁”の存在。そこに、もう一つの国境線が引かれているような気がする。左手で携帯を操作していた韓国人女性の顔がぱっと華やぐ姿があった。何が起きたのか、じっと目をこらしていたが、何をつぶやいたのかは、ハングルを解さない私にも分かるような気がした。

「韓国の電波を拾っている……」。おそらくそういうニュアンスのことばだったのだろう。「いちばん近い日本」に渡航し、国際ローミングなどされずに自国の電波を拾った者でなければ味わえない、なんとも表現しがたい思い。

もちろん大半の韓国人観光客は、「国内通話が対馬でも通じる」という事実そのものに、純粹に感動しているのだと思う。だが同時に、ある種の優越感に似た何かを心の奥に感じているのではないか。日本人がこの展望所で携帯が国際電話にローミングされてしまうときの複雑な気持ちの裏返しのように。

「同様のことは、与那国の最西端（台湾本島まで 111 キロ）で、台湾の電話会社に切り替わることがあります」。山上先生は、別のボーダーの現実も教えて下さった。とりあえずここでは、「電波の実効支配」と呼んでおこう。

根室海峡の“見えない壁”

地図上に描かれることはほとんどないが、根室海峡のほぼ中央部を上から下に引かれたいびつな線がある。日本政府はロシアの実効支配を認めていない。だが、海峡を左右に隔てる地理的な中間ラインは、やはりある。ラインより東側の海を「推定危険水域」、あるいは「ロシア主張領海」と呼ぶ。旧ソ連の赤い旗に見立てて「赤い海」と呼ぶ人すらいる。

ここに暮らしている人々は“見えない壁”と呼んでいる。旧西ドイツと東ドイツを隔てていた「ベルリンの壁」は、目に見える硬い壁だったが、根室海峡の“壁”は、そうではない。英語で *invisible wall*、見えざる壁なのである。海峡の真ん中に便宜上、存在している架空の線ではあるが、領有権をレンガや有刺鉄線などで主張する国境と同じ。ただ見えないだけだ。「心理的なボーダー」と呼ぶこともできよう。

彼らにそう言わせるのは、この海がかつて銃撃・拿捕の海であったことの名残ともいえる。“壁”を少しでも越えれば、豊饒の海がある。拿捕される危険性がないわけではないが、その確率が低いのであれば、手薄な監視をくぐり抜けて大漁をもくろむ暮らしは、ある意味でボーダーに生きる人々の知恵であった。ときには国境警備隊から弾が飛んで来た。拿捕された日本人は 1 万人近い。収容所などで命を落とした漁師も 31 人を数える。

そんな“壁”の周辺にも「電波の壁」があり、通信の壁の歴史がある。オペレーター（交換手）



がつながなかった国際電話の壁を、機械化が溶かしたエピソードは企画⑤の後半でふれた。少し補足しておく。ビザなし交流が始まった当初は、テレックスが使われた。静止衛星を利用したインマルサット（グローバル衛星通信ネットワーク）が活躍した時代もある。

それからしばらくして、北方領土の一部の地域で日本の携帯電話がそのまま通じた時代があった。国後島最大の都市・古釜布（ユジノクリリスク）まで通じた時代があったし、歯舞群島・志発島沖で、船の最上デッキで電波を拾ったこともある。晴れた日は電波の条件が良かったし、曇天のときは悪かった。少なくとも 1990 年代ぐらいまでは。

だが、いまは違う。以前であれば、根室海峡の中間線付近まで軽く通じていた携帯が「圏外」になる。条件が良くても、せいぜい国後島の材木岩付近で日本の電波を拾える程度である。

電波は au の方が比較的良く入るが、昔に比べれば五十歩百歩である。なにしろ非常に多くの住民が「昔はもっと入った」という記憶を共有している。便利だった過去は、なかなか忘れられるものではない。NTT ドコモに以前、尋ねてみたが、「そんなはずはないのですが……」という答えしか返ってこなかった。

そもそも番号ポータビリティ制度ができる以前から、根室海峡に面した一帯に暮らす住民は au 派がかなり多かった。通じるか、通じないか。それだけで人は「通じる」方の携帯にシフトする。住民を動かしているのは、専らロコミである。それもまた、ボーダーに暮らす人々のもう一つの「生きる知恵」である。

ボーダーを越えるような強力な電波を韓国や台湾が発しているという事実。携帯基地局の鉄塔が雨後のタケノコのように増えているにもかかわらず、かえってカバーできないエリアが発生しているという矛盾。普及率を競っているはずの携帯各社で電波を拾うエリアの広さを競おうとしない現実。ボーダーの電波は、謎に包まれている。

「指向性の問題があるかもしれない」と山上先生は指摘する。「電波の強さ」とは別に、「電波



の指向性」という可能性も疑う必要があるというのである。放射角と放射強度によっては、特定の方向へピンポイントで強く電波を放射することもできるのだ。

対馬では、韓国展望所を背にして駐車場の方に下りようとする、携帯はすぐに国内通話に切り替わった。強さであれ、指向性であれ、対馬の陸地ぎりぎりまで電波が届くという現実、「侵食されかけているボーダー」の姿を如実に現している。仮に、電波という名の「もう一つの国境線」を描いた地球儀があるとすれば、おそらく日本という国は、はるかに狭い国土しか有していないことになるだろう。

超指向性ガンマイクの時代

企画の④では、海上自衛隊対馬防備隊本部のすぐ隣に、韓国資本のリゾートホテルが建てられた話を書いた。産経新聞が2008年秋に連載した「対馬が危ない」に、「海上自衛隊の基地に隣接する土地が韓国資本に買収された」とあるのを読み、せっかくの機会だと思ってフォーラム前日に訪れた。

記事を読む印象と実際に見るのとは、これほど違うものかと思った。なんと幅4mほどの道路1本をはさんでホテルの敷地そのものが、基地の境界と「隣接」していたのである。

この湾はほぼ1世紀前、ロシア帝国のバルチック艦隊を迎え撃った水雷艇の前線基地の一角。敷地内には、天皇皇后両陛下が1990年に真珠工場を視察した際の「行啓記念の碑」もあった。「風向明媚」を絵に描いたような静かな入り江にはクルーザーも横付けされていて、かつてリゾート開発計画が持ち上がった北方領土・色丹島の風景を思い起こさせた。シャチが来遊するアラスカの保養地のたたずまいにも似ているような気がした。

約1haの敷地の取引価格が5,000万円だったと聞き及び、もしこの物件が売りに出された時点で知っていたとしたら、蓄えのある友人に出資を求め、「借金してでも買っていただろうな」と思ったほどである。

ハイテクの諜報機器は、日進月歩で開発が進んでいる。超指向性ガンマイクを使えば、数十メートル先の話し声が盗聴できてしまう時代である。対馬市議会の作元義文議長(61)は「仮にその一角に小さな(諜報の)基地でも作られたら……」と不安をもらす。諜報活動が極めて容易なスパイ天国・日本ではあるが、ここまで緩いとなると「平和ボケ」も来るところまで来た感がある。

かつてはそうではなかった。ほぼ1世紀前に制定された外国人土地法は、いまも生きている。第四条には、外国人の土地取引について「国防上必要ナル地区ニ於イテハ勅令ヲ以テ外国人又ハ



外国法人ノ土地ニ関スル権利ノ取得ニ付禁止ヲ為シ又ハ条件若ハ制限ヲ附スルコトヲ得」と、きちんと定めている。だが、敗戦を境に勅令そのものが出されなくなったため、法律そのものが機能していないのだ。

政府は10月中旬、外国人の土地取引の制限について検討し始めた。ようやく重い腰を上げようとしている。

地理的距離 vs 心理的距離

山口県立大学国際文化学部の学生の発表の中で、心を揺さぶられた言葉がある。「地理的距離はなかなか変わらないが、心理的距離は変わる。時間的な距離と同じように」。発表を聞いたときは、「そうだよなあ」という程度の感慨しかわかなかったが、時間がたつにつれ、ふつふつと発酵してきた。

地理的距離は、戦争や外交によって、国境線が移動しない限り変わらない。だが、交通機関の発達で時間的距離は変化する。そして心理的距離も、さまざまな要因で近くなったり遠くなったりしてきた。

なかなか縮まらない心理的距離。だが、何かの加減で劇的に変わることがある。「国境を越える地域連携」と題する発表で、韓国・東西大の張済国教授は、日韓関係を「愛憎の歴史」と分析した。テレビドラマ「冬のソナタ」をはじめとする韓流ブームによって、あっという間に韓国との心の距離は縮まった。「冬ソナ効果」は2004年だけで約2,300億円という膨大な経済効果を上げ、渡韓者は18万人も増えたという。

その一方で、歴史問題や竹島（韓国名・独島）問題などが起きると、即座に「日韓関係が悪くなる」というのも現実である。対馬市の本石健一郎・観光物産推進本部長（57）は「対馬は、侵



攻するときも侵攻されるときも最前線。平和なときはバター貿易で潤うが、ひとたび関係が悪化すると貧しくなる」と語る。いったん何かの摩擦が起きれば、あっという間に元の黙阿弥となる。あるいはそれ以下にもなりかねない。

先に、根室海峡を東西に隔てる“見えない壁”を「心理的なボーダー」と書いた。それは目に見えないだけでない。常に大きく振り子のように揺れ動く性質をもつ。

おりしも韓国と北朝鮮とを隔てる黄海の“見えない壁”の一帯で、3月に哨戒艦沈没事件が、11月には延坪島砲撃事件が起きた。朝鮮戦争の休戦後に国連軍が引いた「北方限界線(NLL)」の無効を唱える北朝鮮は1999年、NLLの南側に別の海上軍事境界線を設定した。見返りなしの支援と協力で「太陽政策」を推し進めた金大中・盧武鉉政権時代が終焉を迎え、李明博政権の「条件付きの互惠主義」を非難するかのように、強硬手段に出始めた北朝鮮。韓国人の「心理的距離」の振り子は、あっという間に開いてしまった。かつてないほどに。統一の日を待ち望む同じ民族の間ですらこうである。いわんや言語・風俗・文化・歴史の異なる民族をや、である。

日韓のボーダーにも領土問題は横たわる。サンフランシスコ平和条約(1951年)で連合国軍最高司令部総司令部(GHQ)が日本領と認定した島根県竹島(韓国名・独島)は、対馬から北東、約350kmにある。韓国による実効支配化が進む中、2005年に島根県議会が「竹島の日」を制定したのに対抗し、韓国の馬山市議会は4カ月後、「對馬島(テマド)の日」を制定した。もちろんいずれの島も日本領なのだが、韓国は1952年、専管水域「李承晩ライン」を一方向的に引き、竹島をラインの内側に入れた。その後、港湾設備を造り、警備隊を常駐させた。すでに半世紀を越えて韓国が実効支配を進める竹島の現実を、ほとんどの日本人は知らない。いや、頭の片隅には多少はあるのかもしれないけれど、すっかり思考停止してしまっている。考える気もなければ、動こうともしない。同じボーダーの尖閣諸島や北方領土についても同じである。そして、「電波の実効支配」さえ起こりつつある。





フォーラムを企画した北海道大学の岩下明裕教授（ロシア外交）は「第2次世界大戦前に持っていた空間はもっと広がった。戦争で負けて空間が減ったとき、地理的な日本はどこまでなのかを考えて来なかった」と振り返った。「日本は弱い部分から切り捨てて来た。樺太や竹島しかり。このままでは北方領土も危ない」と。

「いざとなると真っ先に切られる」のが、まさしくボーダーなのだ。岩下教授は「国境のことを忘れて経済大国となったツケがいま現れていると思う」とも指摘した。

国土の面積こそ約38万km²しかない日本だが、「領海・排他的経済水域(EEZ)の面積は世界第6位(約447万km²)、体積は世界第4位(約1,580万km³)の海洋大国」だと山田吉彦・東海大学教授(海洋政策)は言う。だが、そのボーダーは著しく侵食されて始めている。中には実効支配という名の既成事実がかなり進んでしまったボーダーもある。

国家の根幹を揺るがしかねない問題が次々に噴き出してきた海洋国家・日本。いずれもボーダーが発火点となっている。与那国島の崎原用能教育長（63）はフォーラムで「いまごろになって尖閣は日本のものだと言っても遅い」と語り、ボーダーを長い間ないがしろにしてきた政府、そして国民に対しても憤りを示した後、こう提言した。

「一人でできること、地域でできること、国でないとできないことがある。『それぞれができることをやること』」だと。



厳原から上対馬に移動した樺太国境標石展示



国内なのに「国際電話」

国境とは何か？ 韓国と九州の間に位置する長崎県対馬市で、11月、「国境フォーラムin対馬」（北海道大グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」など主催）が開かれた。対馬と朝鮮半島の交易の歴史は長いが、日韓関係が悪化するたびに翻弄されてきた。日本の西のボーダー・対馬の置かれている状況は、北方領土問題を抱える東のボーダー・根室と似ていた。対馬の現実から北方領土問題を考える。

【本間浩昭】

「あれ？ 韓国の電 帯電話を受けようとして波を拾っている」。晴 て、日本の国番号を示した夜には韓国・釜山 す「+81」の数字が表示された。対馬北端の高台・韓 釜山までは直線距離 国展望所。11月15日、 で50キロ足らず。九州本 土まではその3倍近い ここを訪れたシンポジ ウムの参加者の男性が 突然、声を上げた。携 部では、海外でも通話



国境越える電波

〇〇上〇〇

できる国際ローミング 器を贈る計画を進めて 機能のある携帯電話が いた時のことだ。「な 自動的に国際電話にな った。料金は1分125円。対馬にも 携基地局が多いが、 韓国の電波はそれほど 強い。

◇ 根室と北方四島はか つて電話が「不通だ った。19年前、チェルノブ イリ原発事故(86年) と断られた。KDD(国 際通信電話)からも「日 島の12歳の少女に、根 室市と中津津町のまち 通話はできません」と おしグループが補聴 拒否された。当時の外 対馬の地理 朝鮮半島と北九州の間にあり、本土 を除けば、択捉島、国後島、沖繩島、 佐渡島、奄美大島に次ぐ面積第6位の離島。 朝鮮半島に近い。古くからユーラシア大 陸の文物を日本にもたらす玄関口として栄え た。人口は3万5000人(10月末現在)で、 根室市よりの約6000人多い。対馬海峡は地 政学的に重要な海上水路として世界的に知ら れる国防の拠点。日露戦争で黄海、日本海を 北上する帝政ロシアのバルチック艦隊を迎え 撃ち、勝利を決定づけた。

ロシアの携帯、いずれ根室でも？



対馬北端にある韓国展望所。晴天の日は、釜山の街並みも見える。長崎県対馬市上対馬町鱈浦(わにうら)で

務省の解釈では、「国際電話はソ連の実効支配を追求しかねない行為」だった。ところが、5年後、「国際電話」は可能になる。サハリン州で国際電話回線の機械化が進み、交換手を通さずに通話できるようになった。機械化がポーターを溶かしてしまっ たのである。

ものにならないくらい近いが、携基地局が国後、択捉、色丹の各島の主要都市にしかないためだ。だが、巨額のロシア連邦予算をつぎ込んでインフラ整備を進める新しい「クリル社会経済発展計画」と歩調を合わせるように、四島では携帯電話会社3、4社が顧客獲得を目指して使用可能エリアの拡大競争を繰り広げている。

携帯電話を巡る対馬の現実。根室の近い将来でも、容易にボーダーを越えてくる電波は、ロシアの北方領土の実効支配を一層感じさせるかもしれない。





対馬から見た 北方領土

〇〇中〇〇

- 663年 白村江の戦い(倭国が百済に援軍も敗れ、防人設置)
- 811~894年 新羅の入寇(新羅の海賊が対馬などに来襲)
- 1019年 刀伊の入寇(女真族が対馬や岩岐に侵攻)
- 1274年 文永の役(最初の蒙古襲来)
- 1281年 弘安の役(2度目の蒙古襲来)
- 1419年 応永の外寇(李氏朝鮮による対馬侵攻)
- 1592~98年 文禄・慶長の役(豊臣秀吉の朝鮮出兵)
- 1905年 対馬沖海戦(日露戦争でバルチック艦隊を破る)
- 1910年 韓国併合
- 1952年 李承晩ラインの設定

対馬中部・竹敷に 備隊本部。リアス式の
ある海上自衛隊対馬防 入り組んだ海岸線が天
然の要塞のよ
うな湾のすぐ
隣の入り江に
3年前、韓国
資本によるリ
ゾートホテル
ができた。海
自の敷地と隔
てているの
は、幅4.5ほ
どの道路一本
だけだ。
ここで真珠
の養殖をして
いた会社が経
営不振に陥
り、工場を閉
鎖したのは02
年。同社は海

外国資本の土地買い占め

対馬の歴史
対馬は大陸からの侵攻と侵略が繰り返されてきた。鎌倉時代には元寇の来襲を二度受け、室町時代には倭寇の襲撃に悩む李氏朝鮮に攻め込まれた。逆に豊臣秀吉が朝鮮に兵を送る拠点になったことも、その後、和平交渉の先頭に立った対馬藩は、朝鮮通信使の接待、江戸幕府公認の貿易で潤った。戦後は、韓国が公海上に専管水域「李承晩ライン」を一方的に引いたため、対馬の漁船などの拿捕(たほ)・銃撃が相次ぎ44人が死傷した。

自の司令に土地約1.5
と建物を1億円で売却
したい旨を打診した。
だが、上部機関の意向
で「来年度の概算要求
が固まっているので」
と断られたという。
土地は5年後、同島
在住の日本人に半値で
売却された。「ナマコ
の加工場の建設用地」
という話だったが、近
くに住む男性(63)は
「あつという間に韓国
風の門や八角形の建物
が造られ、韓国からの
団体客を泊める宿泊施
設ができた」という。
国内で外国人や外国
資本による不動産取得
が相次いでいることか
ら、政府は今年10月、
取得制限の検討を始め
た。外国人土地法が戦
前の1925年に制定
された。

リゾート開発の標的に

四島にも外国企業進出の可能性

海上自衛隊対馬防備隊本部(左)の敷地と隣接する
韓国資本のリゾートホテル(右) 長崎県対馬市
美津島町竹敷で11月11日



【本間浩昭】

財務部能成・対馬市
長は「そもそも発端
はこの物件だった」と
明かし、「規制緩和の
影響で不動産取引の届
け出が事後でよくなっ
たこともあり、知らな
い間に(外国人に)買
われてしまう。1自治
体で防げるものではな
い」と、政府に法整備
を求める。
北方領土・色丹島で
も92年、台湾系日本人
が経営する香港企業が
リゾート開発を目的
に、サハリン州政府か
ら土地を借りる話が浮
上ったことがある。太
平洋に面した丘陵地2
78畝を50年間で2億
が開始。計画書には、
三本柱の一つとして
「ユニークな自然や気
候の特殊性を生かした
観光・レクリエーショ
ン資源の開発」が挙げ
られ、「アジア太平洋
の広い地域からの外国
企業の誘致」とも記さ
れている。
作元義文・対馬市議
会議長(61)は「ボータ
ーは自然環境が保全さ
れている分、リゾート
開発の標的になりやす
いし、漁業資源の乱獲
も激しい。対馬も北方
領土もよく似ている。
そんなに時間はない」と
指摘した。



遠くの首都より近くの国

約3万5000人が暮らす対馬に、毎年人口の2倍近い韓国人観光客が押し寄せる。08年の韓国からの入国者は過去最多の約7万2000人。市街地や観光名所では、韓国語が飛び交い、ハンゲル併記の案内標識も珍しくない。

歴史好きの韓国人にとって、対馬は「近くて近い」存在になった。長崎県の推計で韓国人観光客の島内消費は約29億円(07年度)。空路の地方切り捨ての影響で観光客減に悩む対馬にとって、1人当たり約3万円を島に落とすことができる韓国人観光客は、島の経済に欠かせない存在だ。

11月13日の「国境フォーラムin対馬」で山口県立大の学生6人が、対馬の高校生の国境意識(790人、回収率94%)について発表した。主要都市との

約3万5000人が暮らす対馬に、毎年人口の2倍近い韓国人観光客が押し寄せる。08年の韓国からの入国者は過去最多の約7万2000人。市街地や観光名所では、韓国語が飛び交い、ハンゲル併記の案内標識も珍しくない。

歴史好きの韓国人にとって、対馬は「近くて近い」存在になった。長崎県の推計で韓国人観光客の島内消費は約29億円(07年度)。空路の地方切り捨ての影響で観光客減に悩む対馬にとって、1人当たり約3万円を島に落とすことができる韓国人観光客は、島の経済に欠かせない存在だ。

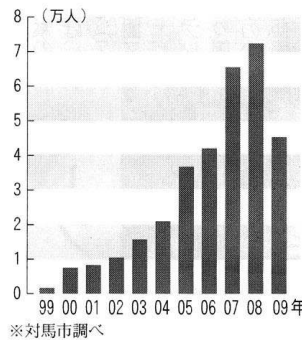
11月13日の「国境フォーラムin対馬」で山口県立大の学生6人が、対馬の高校生の国境意識(790人、回収率94%)について発表した。主要都市との



対馬から見た北方領土

経済交流

対馬市の韓国人入国者数の推移



心理的な距離を聞いたところ、上位には対馬市内や福岡などが占め、ソウルが入り、東京の順位を上回った。同大学の浅羽祐樹准教授(韓対馬の経済)は「全島の89%が森林で覆われ、主食の置網漁、ブリなどの一本釣り、真珠の養殖などが漁業も盛んだが、乱獲や密漁で資源は枯渇傾向にある。島内への観光客は年間約68万人で、韓国人が約1割を占める。04年に6町が合併し、1島1市になった。地元での就職先が少ないため、多くの若者が高卒後に島を離れ、過疎化が著しい。65歳以上の高齢者の割合は28.7%(09年度)」。

領有権棚上げの特区求める根室



記念写真を撮る韓国人観光客
—長崎県対馬市豊玉町の和多都美神社で

立ち入りが緩和され、船員やビザなし交流の参加者が押し寄せるようになった根室市は実は、ロシアとの経済交流すら満足にできない。国の方針で四島の経済交流が公には認められていないからだ。

そうした中、メドベージェフ大統領がロシアの最高指導者として初めて国後島を訪問するなど、北方領土問題とも言われる時代。長判した。【本間浩昭】

谷川市長の発言には、地方生き残りのための切羽詰まった思いが込められている。長谷川俊輔・根室市長は13日のパネルディスカッションで、「日本業者が(四島に)入って実効支配してしまった方が早い。ビザなし(交流)の基本を守ってやっただけだ」と発言した。出口の見えない領土問題に業を煮やし、経済特区構想など目録が領有権を棚上げた形での経済交流を求め始めた。行政改革の流れの中で地方は自立を求められ、「地方切り捨て」と政府の対応を批判した。【本間浩昭】



【現場報告】

国境の島・対馬：日韓交流 活況とすれ違い

佐竹政治

国境地帯の自治体関係者、研究者が課題を話し合う国境フォーラム IN 対馬（北大グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」主催）が11月12、13の両日に長崎県対馬市厳原（いずはら）で開かれ、翌14日には島内実地調査も行われた。国境交流の先進地とされる対馬で、韓国人観光客が詰めかける現場を訪れ、すれ違いともいえる交流の課題もかいま見えた。

フォーラムのまとめで、研究リーダーの岩下明裕北大スラブ研究センター教授は、国境地帯は、《1》国境線が全く決まってない地域、《2》解決した中国・ロシアなど、《3》とうに解決して国境を透明化している米国・カナダなど、の3段階があるとし、「対馬は国境線がはっきりしている。対馬があり、釜山と福岡が交流し、国境を透明化していこうという日本でもっとも先進的な場所。それに比べ、根室、北方領土が一番つらい」と位置づけた。

根室市の長谷川俊輔市長もフォーラムで「根室は領土が画定しないことに苦しんでいる。北方領土では中国、韓国製品がほとんど。日本の業者が入って経済的に実効支配した方が早いと思うが、外務省は認めない」と閉塞感を吐露した。

島内消費 22 億円

対馬の市街や観光スポットでは、ハンゲルの表示が整備され、バスツアーの韓国人観光客の多いことに驚かされる。1999年から釜山と結ぶ国際航路が運航、2008年は韓国人入国者は過去最高の7万2千人を記録した。人口3万6千人の島に倍の観光客が訪れた。09年はリーマンショック、円高ウォン安の影響で落ちたものの4万5千人で、今年は回復基調にある。長崎県の07年の分析では、島内消費額は22億円に上り、266人の雇用を生み出しているとし、産業の柱になっている。

観光目的は「史跡など日韓交流史探訪」「島内各所にある500メートル級の原生林へのトレッキング」「イシダイなどの魚釣り」の三つが主力という。

対馬市観光物産推進本部の二宮照幸課長補佐は、江戸期の朝鮮通信使の交流や幾つもの戦争を振り返り「歴史を見れば、韓国との交流が盛んなときは島は良かった。（戦争期の）事実と事実として現代の交流を進めたい」と願う。

観光客は何を感じているのか。歴史好きのキム・ゼジュンさん（52）、ソ・サンスクさん（49）



夫妻は「きれいな海や景色、(対馬藩主宗氏代々の)墓所が印象に残った」と満足そう。その一方で、女性仲間と訪れた金茶詠(キムタヨン)さん(24)は「素朴な雰囲気期待してきたが、韓国と変わらない。日常生活を見たかったけれど、住民とのふれあいも少ない」と不満顔だ。

竜宮伝説の伝わる和多都美神社では、韓国人ガイドが獅子像の上に手を載せて婦人客に「この獅子がおスカメスカ下を見るとわかるわ。18歳未満の女性は見ないでね」と軽いのりで客を喜ばせる。難読地名や伝説を教育番組風に日本人に説明する日本人ガイドとは大違いだ。

市は「韓国人ガイドはガイド本の知識だけ。対馬のことをしっかりわかってほしいが、毎年ハングル講座を開いているものの日本人ガイドは育てていない」(二宮課長補佐)と嘆く。財部能成市長も「今の受け入れ態勢ではリピーターになっていただけない」と認め、施設整備などに取り組んでいる。現状は、微妙な意識を抱えた両民族が互いにすれ違いながら観光が進んでいるように見えた。

暮らしを伝えて

韓国系カナダ人で北大スラブ研究センター特任助教の池炫周(チーヒョンジュ)直美さん(34)は「表面的な交流ではどこかで限界になる。日本人はこう暮らしていると伝えなくては」と交流の深化が必要と指摘する。

島北部でペンションを経営する比田勝亨さん(53)は、長年地元の船舶代理店で韓国語を使いこなしてきた。部屋には韓国仕様の200ボルトコンセントをつけている。島内で支払いをめぐるトラブルもあるが「ウォンがあるなら電卓で計算してどんどん売ればいい」と積極的だ。福岡より近い360万都市の釜山を精力的に訪れ、友達も多い。「生きるために仲良くなっています。仕事があれば作り、若い人が島に残れるようにしたい」と熱く語ってくれた。

* 本報告は、「北海道新聞」2010年12月4日付・夕刊に掲載された「編集委員報告」の再録です。

(許諾番号 : D1102-1108-00007180)



北海道大学グローバルCOEプログラム

🏠 ライブ・イン・ボーダースタディーズ



比田勝さんが経営するペンションみうだ



センセーショナルだった山口県立大学の学生プレゼン



【現場報告】

辺境から世界が見える：根室、那覇、ポロジノ、南大東、そして対馬をつなぐ時空間

黒岩幸子

大雪に見舞われた昨年12月の「国境フォーラム IN 根室」に続いて、全島が紅葉に包まれた対馬フォーラムに参加した。その間に那覇、ポロジノ、南大東島にも足を伸ばした。常々日本北辺ばかり考えているので、南方で中国大陸や朝鮮半島と日本の境界について知見を得たいという意図とともに、暗く凍てついた北方水域に飽きて、陽が降り注ぐ暖かい海を眺めたいという気持ちもあった。ところが、その眩い南の海で遭遇したのは、ほかならぬロシアの足跡だった。周辺地帯をめぐることは世界を俯瞰することだと、改めて実感した。

南方周縁でロシアと邂逅する

大東島観光大使から「ロシア専門家ならポロジノを知っているか」と唐突に問われたのは、今年1月に那覇で開かれたセミナー（『境界』を沖縄で考える）の打ち上げの場だった。ポロジノは、1812年にナポレオン軍とロシア軍が激突した戦場の地名だ。両軍合わせておよそ30万人が戦い、8万人が死亡したと言われる「ポロジノの戦い」を知らないロシア人はいない。しかし、そのポロジノが南大東島と北大東島の別名と知る人はどれだけいるだろうか。ロシア連邦測地・地図製作局発行の世界地図を開いてみると、確かに南北大東島のそばに「ポロジノ諸島」と記載されていた。命名の経緯は次のとおりだ。

サンクト・ペテルブルグ付近から出航して大西洋を南下し、アフリカ大陸を迂回してインド洋を抜け、マニラからアメリカ大陸を目指して太平洋横断中のロシアの帆船「ポロジノ号」が、1820年8月20日に二つの小島を発見した。ポナフィディン艦長は、艦名をとって両島をポロジノと名づけた。ポロジノ号はロシア帝国の国策会社「露米会社」の所有で、アメリカ北西海岸にある拠点に向かっていた。当時は、アラスカもアリューシャン列島もまだロシア領だった。

ロシアは常に北から日本に迫ってくるというのは、思い込みに過ぎない。シベリア大陸を猛進して太平洋に到達したロシア人は、18世紀に樺太や千島、根室に姿を現したが、19世紀には海路で南からもやってきた。1815年から1841年にかけてロシアは30回も世界周航船を送り出している。

ロシアの東進は、地理学的興味よりも高価な陸海の毛皮に動機づけられていた。ポロジノ号も復路はギンギツネ、テン、クマ、ラッコ、オットセイなどの毛皮を満載していた。1870、80年代



には、英米露などの船籍のラッコ・オットセイ猟船が小笠原諸島を寄港地として盛んにオホーツク海やベーリング海方面の猟場に向かった。

ポナフィジンが報告書に「航海者に有益なものは何もなさそうで...不毛な」と記したせい、ロシアがボロジノ諸島の領有を意図することはなかった。この絶海の孤島のおかげで、日本のEEZ（排他的経済水域）はかなり広がった。

権力のエゴが周縁に露呈する

那覇でボロジノを耳にした翌2月、モスクワ西方100kmにあるボロジノへ出かけた。鉄道駅「ボロジノ」で下車すると、一本道と僅かな人家を除いては雪原が広がるのみ。村役場を目指して歩きながら点在する記念碑を吟味していると、ナポレオン戦争だけでなく第二次世界大戦中の独ソ戦の記念碑も混在していることに気づいた。つまり、ボロジノは二重の戦地だ。

ロシアは西から迫る敵を押さえるために、19世紀にはナポレオン軍と、20世紀にはドイツ軍とボロジノで戦った。ユーラシア深部のこの平原は、大都市モスクワの防衛線であり、モスクワを中心とする周縁だった。ロシアは膨大な損害を被って辛勝したこの二つの戦争を「祖国戦争」、「大祖国戦争」と名づけて深く記憶に刻んでいる。

さらに翌3月、那覇から東360kmの南大東島に飛んだ。小型飛行機の窓から、手のひらにのりそうな小島が頼りなげに海に浮いているのが見えた。1900年に日本人が開拓にのりだし、製糖業で発展して現在約1300人が暮らしている。ロシアで見た雪原とは何ともミスマッチなこの島で、確かに「ボロジノ」という名前は語り継がれていた。会社名や特産品・土産品のラベルに使われているほか、「ボロジノ娘」という島唄のバンドまである。北大東島にはボロジノニシキソウという固有の植物があるそうだ。

9月にモスクワの帝政ロシア外交文書館で、ポナフィジン・ボロジノ艦長自筆の報告書を読んだ。帰路に停泊したリオデジャネイロで露米会社理事会に宛てられたもので、上質の紙に細かいペンで丁寧に記された報告文は、文字が茶色く変色している以外は完全な状態で保管されていた。122名の乗組員名簿も残っているが、航海中に34名の死亡者が出たと記されている。大航海には大きな犠牲が付きものだったのだろう。それから2世紀近くを経て、「不毛」な島で生まれ育った日本のボロジノ娘が「ボロジノ・アイランド」を熱唱しているを知ったら、ポナフィジンは何を思うだろうか。

ボロジノ号が南北大東島を通過してから85年後、同じようなルートで対馬沖にロシア艦隊が現れた。大国ロシアを負かせて溜飲が下がるせい、日本人は日露戦争が好きだ。日本では小説や



映画になった日本海海戦は、ロシアでは「ツシマ海戦」と呼ばれ、ロシア艦隊史上最大の悲劇として痛みと屈辱を伴って想起される。その対馬に降り立ってみると、1905年の戦争の違った顔が見えた。帝国海軍は戦争に備えて、艦船が通過できるように島の細い箇所を掘り切って人工の瀬戸をつくっていた。それ以後、対馬は万関橋で繋がる二つの島になった。島北部の「日露友好の丘」にはロシア軍人とともに日本人の名前も刻まれ、負傷したロシア人水兵 143 人を対馬島民が手厚く看護したことが語り継がれていた。

日露が講和を決めた後に日本軍は樺太を占領し、ポーツマス条約でロシアから南樺太を割譲させた。日露戦争は対馬を物理的に二つの島に切断し、樺太を国境線で折半した。第二次世界大戦後は、その樺太だけでなく千島列島・歯舞群島までソ連に占領された。日本が降伏文書に署名した 1945 年 9 月 2 日、スターリンはソ連国民に対する呼びかけの中で、日露戦争を示唆して「われわれは日本にたいして特別の『ツケ』がある」と説明した。中央のツケは、たいてい遠く離れた周縁の地で支払われる。日本の国境地帯ではそのツケの支払いはまだ終わっていない。

対馬フォーラム直後に、北朝鮮が軍事境界線に近い韓国の大延坪島を砲撃する事件が起きた。朝鮮半島の内部に撃ち込まず、境界線上の小島を攻撃するところに北朝鮮のいじましい打算が透けて見える。その後の日米韓の動向を日本のメディアがかまびすしく取り上げているが、国境フォーラム参加の後では、軍事演習や危機管理の問題よりも、あの島から避難した島民 1300 人のその後の生活が気になる。

根室と対馬をくらべてみれば

対馬を体験すると、根室で見たのは括弧つきの「国境」であったことがわかる。安定した国境線があってこそ、ヒトやモノの自由な往来が可能になる。対馬フォーラムには長崎や福岡経由でなく釜山からフェリーで到着したグループもあり、フォーラム後は島北部の比田勝港から帰国する韓国人参加者を見送った。島の北端から韓国まで 50km 足らずで、最北端にある韓国展望所からは晴れた日には釜山が見える。島の人口は約 35,000 人だが、毎年その倍以上の数の韓国人観光客が対馬を訪れる。

それが日常だからか、急増する訪問者に追いつかないのか、対馬は韓国人観光客に冷淡に見えた。厳原の街中でも「対馬巡検」で島を北上しているときにも大勢の韓国人に遭遇したが、一様に団体行動で、日本人と接することなくガイドに連れられて名所旧跡をたどっていた。日韓交流の機会と島にもっとお金を落としてもらう機会を同時に逸しているような気がしたが、これは北方四島との経済交流を日本政府から禁じられている根室と比較するせいだろうか。



北方領土とのビザなし交流が始まった 1992 年以降の根室で見たロシア対応は、目覚ましかった。ロシア語を話す職員がいるインフォメーション・センター、ロシア語の冊子や地図、市民向けのロシア語講座などが準備された。領土問題を抱えているために些細なトラブルも許されないという背景が、きめ細かなサービスにつながった面もあるだろうが、現金で大量の買い物をしてゆくロシア人の経済効果への反応でもあった。現在、根室には「返せ北方領土！」の看板の隣にロシア語表記の案内図が立ち、ロシア人船員たちが気ままに散策する姿がある。対馬フォーラムに参加した根室市からは大胆な発言があった。国が始めたビザなし交流が進む中で根室と南クリル(北方領土) 双方から経済交流の要望が出たのだから、国はこれを配慮すべきというものだ(11月13日境界自治体報告)。経済低迷と人口減少に悩む地方都市の切実な声だろう。

国境地帯の住民意識については、山口県立大学国際文化学部の学生によるプレゼンテーション「高校生の心象地図:高校生は韓国をどう見ているか」が、フォーラム参加者の話題を呼んだ。対馬の高校生にアンケート調査を行い、高校を基点とした各都市との実際の距離、公共交通機関を使った移動時間、心理的な距離を比較したものだ。その結果、多くの生徒たちにとって東京よりも釜山やソウルの方が心理的に近いことが明らかになった。福岡・長崎の県境や日本・韓国の国境にとらわれない地図が、対馬の高校生の意識の中に形成されている。

根室フォーラム直後の 2009 年 12 月 22 日、北海道根室西高等学校の北方領土学習の授業を参観したのを思い出した。授業に先立って 1 年生 70 人に行われた調査結果を見ると、北方四島の位置を地図上で正確にとらえている生徒は 3 割、四島の名前を漢字で書ける生徒は 1 割しかいなかった。校舎の窓から国後島や歯舞群島が望見でき、ロシア語の授業があり、北方領土研究会が活動し、元島民の 3 世、4 世に当たる生徒もいるというのに。生徒たちが知識として獲得する北方領土と、実際の生活で体験する北方領土との間にギャップがあるように見えた。

成人した日本人の国境意識、その心象地理はどのようなものだろうか。領土、領海、EEZ の境界は正しく認識されているだろうか、境界線の内と外に対してどのような心理的距離を持っているのだろうか。

いま周縁で考えるべきこと：国境フォーラム IN 対馬

二日にわたる対馬フォーラムは、笹川平和財団の助成もあり大規模で多彩な内容だった。なかでも実務会議「日本の境界地域を考える」(11月13日午前)には、韓国釜山市、北海道稚内市から沖縄県与那国町まで日本の境界自治体合わせて 14 市町村の関係者が集まった。各人の報告時間が 5 分に制限されたために概論にとどまったとはいえ、各自治体が置かれている現状と取り組み



は興味深かった。国境を隔てた外国の遠近、領土問題の有無、人口や産業規模の大小など様々だが、中央政府に頼らない独自の国際交流や海洋・経済政策で地元の活性化を志向している点は共通していた。「ボーダースタディーズから見た国境と島嶼」(11月12日午後)では、韓国だけでなくアメリカ・カナダ国境やデンマーク・スウェーデンの間にボーダレスを目指して人工的につくられたオレスン地域も紹介された。

おりしも日本の国境地帯が騒がしいなかでのフォーラム開催だった。11月1日にロシア大統領が国後島を訪問して日本国内の反発を招き、その3日後には尖閣諸島中国漁船衝突事件のビデオ流出が物議を醸した。座談会「ボーダーに暮らす私たちからの提言」(13日午後)出席者の多くが、これら国境地帯の動向に関わる立場にあったが、その発言はメディアのエキセントリックな反応とは程遠い冷静なものだった。以前からあった問題を今になってなぜ騒ぎ立てるのか、陸上に比べて海洋権益は妥協しやすいなどの視点が提示され、「ローカル・イニシアティブ」の重要性が強調された。

グローバルCOEプロデュースのDVD「知られざる北の国境：樺太と千島」の上映、「日本の国境」移動展の公開、「対馬エトピリカ文庫」開設式典まで組み込まれた分刻みのプログラムは、参加者にとってかなりハードだった。

フォーラム終了翌日の「対馬巡検」は、天気にも恵まれて対馬の自然と歴史に触れることができた。朝鮮半島と九州の間に位置した対馬は、半島や大陸からの侵攻、また日本からの出兵ルートになった。何度も蹂躪された一方で、対馬が地の利を得た交易でどれだけ潤っていたかは、小さな島に不釣り合いな大きな城跡や藩主宗家の墓所の壮麗さに窺われる。朝鮮出兵後の日朝国交回復期にあたる17世紀には、円滑な交易を維持するために、宗家は国書の偽造、改竄までやってのけた。繰り返し周縁を襲う暴力に苦しみながら、国境住民が捻り出す知恵はしたたかだ。この日泊まった島北部のペンションは、韓国人観光客向けで、ハンブル表示だけのオンドルの調整方法がよくわからず、あまりに床が温まりすぎて夜中に目が覚めたほどだった。

多くの日本人の心象地理からは、欠落しているか、あるいは曖昧な輪郭を描いているであろうボーダーランドで、世界が収縮して俯瞰できるような気がした。

* * *

与那国、小笠原、根室、対馬と繋がったフォーラムを今後も続けてほしいと言う声は、今次フォーラム中に何度もあがったが、このシリーズは今回で締めくくりとなった。辺境=フロンティアで開催されてきた四回のフォーラムには、研究者だけでなく、行政や財界の実務家、学生や市民が内外から参加した。そこで新たなネットワークが形成され、国境に対する考え方の緩やかな合



意が得られたと思う。しかし、世の中はその合意や概念とは正反対の方向に進み、国境地帯を不安にさせる材料は後を絶たない。ボーダーランドに身を置いてみることで得られたフォーラムの成果を、ネットワークを通していかに世界に発信するかが今後の課題だろう。国境地帯は、常に外的危険に晒されると同時に、そこにしか生まれ得ない柔軟な思考と可能性を内包している。

最後になったが、斬新な発想でフォーラムを牽引してきた岩下氏のリーダーシップとスタッフの仕事ぶりにはいつも感嘆させられた。様々な分野の若手が複言語・複文化主義でエネルギーに協働する陣容は、国境フォーラムの醍醐味でもあった。かれらへの敬意と感謝をもって擱筆する。





【現場報告】

境界地域に住む人々の声から考える：国境フォーラムに参加して

堀場明子

大多数のいわゆる「中心部」に住む日本人は、境界地域である「辺境」地域の人々の生活をどれだけ知っているだろうか。国境フォーラムに参加し、日本の境界地域の実情を垣間見ることができた。対馬の漂着ゴミの実態や韓国人観光客の多さ、ソ連に島を追われ根室に住み着いた人々の北方領土への思い、小笠原諸島の住民が抱える医療問題、与那国島と台湾の地理的・心理的な近さなど日本の境界地域特有の話ばかりであった。「国境」という議論では、最近の竹島問題、尖閣諸島問題でも見られるように、日中、日韓問題とリンクし、相互にナショナリスティックな論争となり非常に政治的な問題として取り上げられることが多い。また、国民国家の主権、領域、国益などという言葉が飛び交う国家と国家の問題として扱われる。「辺境」にある国境地域に住む人々の顔が見えない議論ばかりが目立つ。多くの「中心部」に住む日本人は、国境地域に住む人々の声に、どれだけ耳を傾けてきたであろうか。

「国境フォーラム」は、「辺境」地域の人々の声を聞くこと、現場の声から考える姿勢が貫かれたものであった。そして、国境地域の人々の声をつなぐネットワークを構築し、彼らの声を元に境界地域の共通の課題を認識し、将来へ向けた発展への可能性を探る取り組みであった。「中心部」からではない、「辺境」「ローカル（現場）」からみる国境の議論であった。地域研究は、ローカルから見るグローバルであり、現場の声を聞くことから始まる。境界地域の人々のために、研究を活かして地域の発展に貢献するために活動しようとする「国境フォーラム」の取り組みは、地域研究の社会連携のモデルケースといえる。「国境フォーラム」までの積み重ねられてきた研究と社会連携活動から学ぶことは多い。

国境フォーラムでは、外の世界と国境をまたいだ関係構築についても様々な取り組みが紹介された。海外の取り組みとの比較もあり、多くの新しい洞察を得たと共に、「国境」とは何かを考えさせられた。日本の「中心部」から見れば遠い「辺境」である境界地域、そして「国境」そのものを、外の国々に対する「フロンティア・最前線」と捉える視点があった。また、単に国家と国家の境である「国境」という見方から、国境沿いに住む人々の生活と利益を踏まえた「国境」とは何かを考えさせられた。実際、世界には、「国境」という概念がなく生活している人々がいる。自身の調査地であるインドネシアには、「バジャウ（海の民）」と呼ばれる人々がいるが、彼らはインドネシア、フィリピン、マレーシア、オーストラリアの海の国境を自由に行き来し、海の上



で生活を続けてきた人々である。彼らは、現在、海上に引かれた見えない国境を越えると逮捕される。国民国家という概念が存在するずっと前から続く彼らの生活を、「国境」が遮っているわけである。同じことが例えば台湾と与那国島の間でも存在していた。「国境」で分断されている地域であるが、以前は、頻繁な行き来が存在したと言う。「国境」の存在が、人々の生活を変化させ、不便を強いられているのであれば何らかの改善策が必要ではなかろうか。現在、「辺境」の地に住む人々は、人口の減少と高齢化が進み、経済的に危機的な状況に陥っている。これら「辺境」地域としての存在することによる共通の課題を見極め、新たに「フロンティア」である彼らの国境を越えた境界地域の活性化の取り組みが注目されている。フロンティアだからこそできる隣国との関係構築は、境界地域の人々の生活を発展させる可能性がある。しかし、そのためには、まず、周辺諸国との国境の画定を行わなければならないと言う。ヨーロッパは、EU の名の下に、国境を越えた自由な活動が行われている。アメリカとカナダも極めて国境の壁は低い。互いの利益にかなっているからである。しかし、それ以前に、例えばヨーロッパ諸国は、国境研究では大前提である「国境の画定」を戦争をした隣国と真摯に向き合い誠実に行ってきた。国境が画定した上でのヨーロッパ連合であるという経緯を知った。日本は海に囲まれているからか、それともアメリカに守ってもらっていると意識からか、あまり国境線を意識せずに過ごしてきたのではないか。東アジア共同体の構想もあったが、その前に、国境の画定が必要であるという点に、日本は真剣に取り組んできたであろうか。そして今まで、境界地域の人々の利益を一番に考えて「国境」を考えてきたであろうか。「国境フォーラム」に参加して、「国境」に対する意識が変わっただけでなく、多くのことを考えさせられた。

境界地域の人々の声に耳を傾ける姿勢、日本の「端」ではなく一番「前」、「フロンティア」である境界地域という視点を持つことは、国境を違った角度からみるきっかけとなった。国境沿いに住む人々のニーズに即した国境を越えた連携を始めるためにも、研究から社会との連携を果たした「国境フォーラム」の視点を多くの人と共有し、政策へと提言を行い、実際の政治に反映させることが期待されている。そして、「国境フォーラム」で出会った境界地域の人々のネットワークが、直面する課題を乗り越える原動力になることを願っている。



【現場報告】

「地政学」という名の妖怪：「国境フォーラム IN 対馬」に参加して

高木彰彦

「一つの妖怪がヨーロッパに現れているー共産主義という妖怪が。」という出だしで始まる著名な書物があったが、地政学についても、まさに同様な表現が相応しいのかもしれない。多くの人々にとって、地政学とはまさに実体のない存在だからだ。2010年11月、地政学には「妖怪」という表現がまさに相応しいと思われる二つの出来事に遭遇した。

一つは、2010年11月12～14日に長崎県対馬市で開かれた「国境フォーラム IN 対馬」に参加したことである。オープニング・セレモニーとしてのDVDの上映、「ボーダースタディーズからみた国境と島嶼」というシンポジウム、「日本の境界地域を考える」というテーマによる実務会議、「対馬の心象地理ー高校生は韓国をどう見ているか」というゼミ報告、そして、基調講演と座談会。今回、初めて参加した私にとって、このフォーラムは、最終日の対馬島フィールド・トリップも含めた全ての企画が刺激的で新鮮なものだった。これほど多様な企画が同時に進められていることに、目から鱗が落ちる思いをした。その意味で、このGCOEによる今後の企画にも積極的に参加したいという希望の表明を、まずは私の感想として述べておきたい。

地政学について考えさせられたのは、1日目のシンポジウムで、フロアーの若い参加者から「大学院で地政学を勉強したいが、どこで勉強すればよいのか」といった趣旨の発言が出て、私が答えようかと考えた矢先、主催者の岩下さんが的確に答えて下さるとともに、今後は新しい地政学を作って行きたいと発言されたことによる。後述するように、日本では、地政学と最も密接な関わりを持つ地理学、とりわけ政治地理学は、私も含めて、欧米でますます盛んになりつつある地政学に対して、ほとんど発言してこなかった。新しい地政学を作るという挑発的な発言に対して、私たちはこのまま手を拱いていてよいのかという思いを強くした。とはいえ、こういった状況は地理学のみには留まらないのかもしれない。「地政学」と「学」を冠しながらも、学としての体系のない、いわば妖怪のような「学」が地政学なのである。だからこそ、関連諸分野が手を携えながら、地政学の実体化に向けた努力をすべきである。

このフォーラムの二週間後、奈良で人文地理学会が開かれた。この学会で、政治地理学を専門とする大阪市立大学の山崎孝史教授が、「政治・空間・場所ー「政治の地理学」へ向けてー」と題する特別研究発表を行い、その座長を私が務めた。発表内容の要旨と質疑応答・座長所見については、2011年3月刊行予定の「人文地理」誌63-1に掲載される予定なので、詳しくはそちらを



参照していただくとして、この発表でも、発表内容とは直接関連しない地政学関連の質問がいくつか出された。

とりわけ、最後に出された二つの質問に私は驚いた。一つは、「地理学は現状把握に関しては優れて綿密な実態調査を行うのに、なぜ未来指向の学問を目指さないのか」という趣旨の発言だったが、これと同様の趣旨の主張が、70年程前の日本の地理学界でも盛んに語られていたからである。総力戦体制期である1930年代後半、日本では、地理学者が中心となって、ドイツの地政学書を競って日本語に翻訳したのである。地政学を推進しようとした地理学者たちは、地政学は存在 *Sein* の学問ではなく、当為 *Sollen* の学問であり、未来志向の学問であることを強調したのである。

もう一つの質問は学生からのものだったが、地政学は政治学の中の一つの分野として位置づけられるのかという内容だった。これは、フォーラムで出された発言と同じ類のものであろう。いずれにしても、地理学界においても、地政学は実体のないものとなっている。まさに、妖怪である。そこで、以下では、日本の地政学が、何故、実体のない状況となってしまったのかを理解していただくために、地政学史について簡単に触れてみたい。

地政学という言葉は、もともとスウェーデン人の国家学者ルドルフ・チェレーン *Rudolf Kjellén* が、自らが打ち立てた新しい国家学のうち、国家と領土を扱う分野をゲオポリティク *Geopolitik* と名付けたことに由来する。ところが、その内容たるやドイツの地理学者フリードリヒ・ラッツェル *Friedrich Ratzel* が、1897年に著した『政治地理学』に依拠するものであった。このため、ドイツの地理学者がゲオポリティクに関心を持つにいたった。とりわけ、陸軍将校からミュンヘン大学地理学講座の教授となったカール・ハウスホーファー *Karl Haushofer* が地政学雑誌を刊行するなど、地政学の中心的存在となっていった。ハウスホーファーのゲオポリティクは、ワイマール期ドイツにおける国土回復運動の一翼を担う存在となり、もはや学問というより運動というべき存在となっていった。

ゲオポリティクが日本に紹介されたのは1925年のことである。国際法外交雑誌および地理学評論において、奇しくも同じ年に、チェレーンのゲオポリティクが紹介されている。とくに、地理学評論に3回にわたって連載された飯本信之の論文は「人種争闘の理論と地政学的考察」という題名で、おそらく、これが、ゲオポリティクの日本語訳として「地政学」という用語が初めて使われた例であろう。

やがて、1930年代後半に入り、総力戦体制期になると、アカデミズムの中でも体制迎合的な動きが活発化し、ゲオポリティクの翻訳書や地政学の入門書が数多く出版され、地政学ブームが生



じるに至った。こうしたブームは日米開戦によって頂点に達したが、やがて、敗戦とともに、地政学に關与した学者の多くは公職追放され、地政学も「御用学問」ないしは「似非学問」として糾弾されるに至ったのである。

こうして、日本では、地政学は実体としては一度消滅した。しかし、1980年前後になると、英語圏において geopolitics が流行語となった。その理由は、当時、国際政治に大きな影響力を持ったキッシンジャー米国国務長官がこの言葉を好んだからとも言われているし、イラン革命(1979)や旧ソ連によるアフガニスタン侵攻(1979)など、いわゆる「第二の冷戦」と呼ばれる国際政治上の緊張の高まりによるとも言われている。英語圏における地政学の流行により、日本でも地政学を冠した書物が何冊か刊行されたが、その中には、「悪の論理」といった書名に象徴されるように、負のイメージを強調するものも少なくなかった。これは、まさに戦前の負のイメージを継承するものであり、今日でも、地政学にはこうした負のイメージがつきまとっている。このように、欧米では復活したと言われる地政学が、日本では、戦後、一旦消滅したものの、その後は負のイメージとともに実体のないまま存続しているのだ。私が「妖怪」という語を用いたのは、こうした状況を踏まえたものである。

しかし、いつまでも地政学を実体のない「妖怪」のままにしておくわけにはいかない。そうした思いから、英語で書かれた地政学の入門書の翻訳を進めることで日本における地政学を実体のあるものにしようと決意し、その準備を開始したところである。お国のために献身的であろうとした70年前の地理学者の営為に自らを重ねつつ、何十年か後に、彼らと同じ評価を受ける定めとなるかもしれぬと承知しながら、妖怪の実体化に取り組もうとしている。





北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ



Hokkaido University Global COE Program

Reshaping Japan's Border Studies

スラブ研究センター冬期国際シンポジウム

Winter International Symposium 2010

地域を融かす境界研究

ユーラシアと「愉快」な仲間たち

De-Areanization of Border Studies: Greater Eurasia and its Neighbors

—同時通訳つき—

使用言語：英語

2010年12月4日(土) 9:00~18:30

北海道大学スラブ研究センター 4階大会議室
[札幌市北区北9条西7丁目]

9:00 開会の挨拶

9:30~11:30 セッション1

『グローバル・コミュニティの形成にむけて：中東・欧州・北米の経験』

デイビッド・ニューマン (ベン・グリオン大学/イスラエル)
マーティン・ヴァン・ダー・ベルド (ラドボード大学/オランダ)
マニュエル・チャベス (ミンガン州立大学/アメリカ)

11:30~13:00 ランチオン特別講演

『『前近代日本の境界』ブルース・バートン (桜美林大学/日本)』

13:00~14:00 ミュージアム・ツアー

『「先住民と国境」(北海道大学総合博物館2階)』

14:15~16:15 セッション2

『国際社会学との遭遇：難民・移民・マイノリティ』

樽本英樹 (北海道大学/日本)
ダニエル・ジョリ (ウォーリック大学/イギリス)
ムザンメル・クラシ (サルフォード大学/イギリス)

16:30~18:30 セッション3

『政治地理学の視座：バルカン・中央アジア・沖縄』

アントン・ゴース (プリモルスカ大学/スロベニア)
ルエル・ハンクス (オクラホマ州立大学/アメリカ)
山崎孝史 (大阪市立大学/日本)

■同時通訳用機材の数には
限りがあります。
予めご了承ください。

■一般の方々の参加を
歓迎いたします。
事前登録をお願いします。

事前登録はこちら <http://borderstudies.jp/>

関連
イベント

若手研究者ワークショップ『境界研究：世界の現場・理論の現況』
ロシア・インド・イタリアなど海外の若手が日本各地の研究者と議論します

2010年12月3日(金) 13:30~19:00
北海道大学スラブ研究センター 4階大会議室
(申込不要・使用言語：英語・通訳なし)

主催

北海道大学グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界

協力

笹川平和財団

共催

北海道大学スラブ研究センター
新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」

連絡

北海道大学スラブ研究センター内
「境界研究の拠点形成」事務局
TEL | 011-706-2380/4809 FAX | 011-706-4952
E-mail | info@borderstudies.jp



II 「日本のボーダー・世界のまなざし：境界地域研究ネットワークの立ち上げに向けて」(2010.12.6 東京・日本財団ビル)

【ラウンド・テーブル】「対馬フォーラム：成果とこれから」

司会 古川浩司（中京大学）

報告 加峯隆義（財団法人九州経済調査協会 調査研究部次長）

豊田充（対馬市地域再生推進本部 副本部長）

佐藤由紀（日本島嶼学会理事 小笠原研究者）

外間守吉（沖縄八重山・与那国町長）

* * *

（司会）これから笹川平和財団、北海道大学スラブ研究センターによるシンポジウム「日本のボーダー・世界のまなざし：境界地域研究ネットワークの立ち上げに向けて」を開始します。まず笹川平和財団常務理事の茶野順子よりご挨拶を申し上げます。



（茶野順子）皆様こんにちは。本日はお忙しい中を、笹川平和財団とそれから北海道大学スラブ研究センターが共催するシンポジウムにお運びいただきまして、大変ありがとうございます。笹川平和財団の事業分野の一つ、平和構築、安全保障の一環として、北海道大学スラブ研究センター



が進めている「境界地域研究ネットワーク JAPAN の設立」というプロジェクトを今、私どもは支援しております。

これは、日本の境界自治体が抱える政策課題について、実務家と研究者が共に議論をする場を作り、世界、そしてまた世界のボーダースタディーズへと繋げていこうという野心的な事業でございます。一般的にいま境界、ボーダーと申しますと、尖閣諸島をめぐる中国漁船の衝突問題とか、国後島へのメドヴェージェフ大統領の訪問、一昨日の前原外務大臣の北方領土視察といった、今まで未解決であった諸問題、さらにはこれにかかわる国家間の摩擦などに関わることに注目が集まりがちです。しかし私達のこの事業は、境界地域の問題をセンセーショナルに取り上げるのではなくて、むしろ境界地域で様々な問題に直面する自治体の方々の問題意識を集約し、実務家と研究者が議論する場を積み上げていくことを目指したものです。いわば、現場主義的なアプローチがプロジェクトの基本となっております。

この事業の一環として、11月に「国境フォーラム IN 対馬」なる国際会議が開催され、大変成果があったと私どもは伺っています。そのとき、このプロジェクトを組織されているスラブ研究センターの岩下先生が、例えば、対ロシアの関係について言えば、根室の現状と稚内とは全く違うのだとおっしゃっています。問題なのは、そういう事実を、例えば、新潟や他の地域の方は分かってない、境界自治体の方々にさえ、馴染みのない地域についての議論になると、いつのまにか中央からの目線になったり、あるいはよそ者の目線になったりしてしまう。また、しばしば研究者の視点は現場とかけ離れがちであるということで、やはり一緒に現場の状況をきちんと捉えて理解し、これを共有することが大切であるとおっしゃっておられました。この事業は、現場主義に基づき、実務家と研究者の方々が議論をする場を積み重ねていくことを通じて、境界問題に関する理解と信頼を作っていこうとするのを大きな目的としています。

今回のセミナーでも、沖縄県与那国町の外間町長をはじめ、東京都小笠原村、長崎県対馬市、北海道根室市、沖縄県竹富町、新潟県佐渡市、沖縄県南大東村、そして島根県隠岐広域連合議会の方々々が来られています。こうした皆さまから、現場の、その地域での問題意識というものを聞くのは貴重な機会です。皆さまの参加に心より感謝いたします。

もう一つの本事業の視点を申し上げますと、境界地域の様々な問題を日本固有の問題としてのみ捉えるのではなくて、世界のボーダースタディーズの潮流を捉え、世界のボーダーの文脈のなかで議論をしていこうと考えていることです。本セミナーの後半におきましては、世界のボーダースタディーズをリードする海外の研究者の方々をお招きしており、その中でも4人の方々、国際地理学連合のアントン・ゴースー先生、ベングリオン大学のデイヴィッド・ニューマン先生、「移



行期の境界地域」のマーティン・ヴァン・ダー・ベルド先生、国境地域研究学会のマニユエル・チャベス先生にご登壇いただいて、世界の境界地域について理解を深める企画としております。海外からいらっしゃった先生方にもお礼申し上げます。

もちろん、今回の共催者である北海道大学スラブ研究センターの岩下先生をはじめとする関係者の方々には、セミナー開催にあたりご尽力をいただきました。

昨今、グローカリゼーションという新しい言葉が流通しています。本日はこのグローバル、そしてローカル、2つの視点から色々なお話を聞く貴重な機会となるでしょう。どうもありがとうございました。

(司会) 続きまして、スラブ研究センター教授でグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」の代表である岩下明裕先生から、セミナーの主旨のご説明をいただきます。よろしく願います。

(岩下明裕) パワーポイントを見ていただきたいのですが、地球そのものが我々のプログラムの一つのシンボルです。この写真は日本の周りの部分ですが、これは北海道大学総合博物館にあるグローバル COE プログラムのブースに置いてある地球儀です。私たちは、いつもこれを見て、境界、ボーダーの事を考えております。

今、茶野理事から紹介いただきましたように、世界には様々なボーダースタディーズの組織がありますが、中国、ロシア、日本などのユーラシアや東アジア地域には、この種のネットワークが存在しません。私たちのプログラムはこれをみなさんと一緒につくっていくという事を目標としています。

私たちのプログラムのキーワードは、境界、ボーダーですが、これは主権にかかわるもの、つまり国家の境、国境に限られたものではありません。世界中には境界をめぐる様々な係争が存在します。国境と呼べない場所も世界中にたくさんございます。これらも含めて、一緒に研究していくということです。

この地図は、IBRU という、ダーラム大学の国境研究の組織が作った島嶼をめぐる係争図です。日本については、21番が尖閣、22番が竹島、23番が北方領土となっています。政府的には、尖閣問題は存在しないということですが、この3つは世界的には議論されているという事実は肝に銘じておく必要があります。私たちはワシントンのシンクタンクと付き合いが深く、特にブルッキングス研究所と一緒によくシンポジウムをやっています。来週の15日にワシントンでブル



ッキンスとスラブ研究センターの共催で、中国をめぐる海の境界と北朝鮮問題を日米同盟の枠組のなかで議論する予定です。今日も大使館やメディアの方が来られていると思います。ワシントンの方では来週にはイベントのフライヤーが廻るでしょうから、是非、みなさまと来週ワシントンでお会いしたいものです。

さてブルッキングスのリチャード・ブッシュさんが最近こういう本を出しました。『近さの災い』というタイトルで日中関係を取り扱ったものですが、この中でもかなり部分で尖閣列島問題を扱っており、これをどうやって解決すべきか（あるいは沈静化させるか）という議論をされています。

要は、世界水準で考えると、これをどういう名前と呼ぶかは別にして、尖閣が係争の現場であり、それが存在する以上はどうやって係争を最小限にするか、地域の安全を守るか。これを通じてどうやって国益を守るかということを考えていくということが世界の常識となります。IBRUの所長のマーティン・プラットさんも、政府はリスクを最小限化するために係争をいかにマネージしていくかの責任があり、これは国家として考えなければいけない戦略であると強調されています。

さて、私たちのプログラムのモットーは実務家とアカデミズムを繋ぐということです。ボーダーの現場をきちんとおさえ、現場のリアリティを伝える。そして、世界の中で日本の問題を考えるということです。

『日本の国境』（北大出版会）のなかでも展開したことですが、IBRU 的には日本には3つの問題があるというものの、実は日本が取り巻かれている境界にかかわる問題はこの3つだけではありません。顕在化していない問題がたくさんあります。日本はこれだけ広い海を持っていますから。ここで皆さんにお尋ねします。このなかで対馬に行かれたことがある人、手を挙げていただけますか。結構おられる。今日は全体の参加者数はそれほど多くはないので、逆にいえば問題意識のある方が来られているということですね。では、小笠原に行ったことのある方？ 5人ぐらいですか。与那国はどうでしょうか？ だいたい5人ぐらい。同じ人が何度も手を挙げていますよね（笑）。

関心のある人とない人のギャップが大きいのでしょうか。これが現実でしょう。あまり普通は境界地域などに関心をもたない、東京の方々にも是非、境界の現場を知っていただいて、一緒に考えてもらいたいというのが、このプロジェクトの趣旨ともいえます。

さて、これらが対馬、与那国、北方領土近辺の地図です。私たちはこのフォーラムを4回すでにやっており、去年は根室で行いました。北方領土でやるというのはさすがに難しいので、近い



所で行ったということですが、今日来てくださった与那国の外間守吉町長に加え、財部能成対馬市長、長谷川俊輔根室市長、それから小笠原の代表者の4人で2009年12月に根室で行ったものです。通訳をつけて外国の研究者にも参加してもらいました。インド、英国、カナダなどの方々が参加されています。こういう会議の前後に巡検を行うのですが、船も出して北方領土の現場を見にいきました。皆さん、プロフェッショナルなので、こんなに嬉しそうな顔をしています、「北方領土を見に行った人たちでこんなに嬉しそうなグループをみたのは初めてだ」と船の人が言っていました。こちらが水晶島です。さてさっきのインド人の研究者ですが、非常に嬉しそうな顔をしています。名前もハッピーモンといいます。その後、元島民の方々の声も、外国の方々にも聞いてもらいました。

私たちはリアリティを持って境界の問題を皆さんに伝えるために、北大総合博物館で色々な展示を行っています。いくつかのゾーンに分けて作りましたが、樺太の北緯50度線上に設置されていた日ロの国境標石を展示したこともあります。これ本物で、根室の博物館からお借りしました。このときは一緒に、国後島と根室を繋いでいた海底ケーブルも展示しました。

今日は与那国町長にお越し頂いていますが、2007年の与那国でのフォーラムを皮切りとし、小笠原、根室と廻り、つい先月の11月に対馬でやったわけです。今日のセミナーの第1部は、対馬での議論と成果を皆さんにご報告いたします。

このスライドは対馬会議の様態です。これは国際会議のセッションですが、カナダ、韓国、北欧、日本の境界地域の協力をテーマに組みました。自治体関係者の議論については、このあと報告があるので省略します。対馬新聞など、皆さん見たことないだろうと思いますが、会議は対馬新聞の一、二面を飾りました。展示も対馬にもっていきました。これは国境標石レプリカですが、釜山がみえる上対馬にも持って行って、対馬の人に北の境界の意味を考えてもらうイベントも実施しました。ちなみにこの展示は、12月の後半に、沖縄は那覇に行きます。

私たちが目指しているのは、世界の空白を埋めるネットワーク作りですが、日本にかかわる部分についてはアカデミックなサークルだけではなくて実務、特に境界にいる自治体の人達と一緒に仕事をしようとしています。日本のネットワークを世界の文脈において、そのなかで日本のボーダーというものをきちんと考え、大事にしていこうというプランです。

今日のセミナーは、札幌でやったボーダースタディーズのアカデミックな国際会議と対馬でやった実務を中心とした国際会議、このエッセンスをつめたかたちで東京のみなさまにお伝えするものです。ご清聴ありがとうございました。



(司会) では、セミナーのパート1「国境フォーラム IN 対馬：成果とこれから」を始めます。司会を中京大学の古川浩司先生にバトンタッチします。



(古川浩司) 古川です。よろしくお願い致します。具体的な報告の前に、今回の「国境フォーラム IN 対馬」の意義について、私なりの考えをまずお話ししたいと思います。日本の境界地域は、地理的には離れながらも共通した機能や課題を有していると考えます。そこで日本における境界自治体ネットワークの必要性が、まさに問われており、このフォーラムが開かれました。では、この境界自治体というのは一体何なのかという点を説明します。第1に境界的な機能をもっている、すなわち、詳しくは後ほど説明しますが、いわば国境あるいはEEZにかかわる機能を有している。第2に、境界意識が相対的に高い。そして第3に、中心までの距離と境界までの距離を比べた場合、境界までの距離の方が近い。以上の点が挙げられます。いろいろ詰めていくと、境界自治体と言っても、例えば、前の実務会議でもでた議論ですが、新潟などは境界自治体と言って良いのか、それとも準境界といったものに留めた方が良いのではないかなど議論もあるのですが、一応、境界自治体についてそれなりの定義は出来るのではないかと思います。ここで重要なのは、冒頭で述べた、境界機能をどう考えるかという点です。一つは、国境の監視ということで、CIQあるいは不法操業、不審船への対応にかかわる自治体といったようなことが挙げられます。次に、国土保全にかかわる自治体です。つまり、領土、領海、排他的経済水域などを主張していくために、国土保全の機能を果たしている場所。近年では環境保全、とくに漂着ゴミ問題も重要ですが、国益の観点から言えば、以上の点は「安全保障上の最前線」という整理もできるでしょう。

他方で、境界を通じた交流による相互理解、地域振興といった機能、言い換えれば、国際経済圏、別の言い方をすれば、「国境交流の玄関口」にかかわる場所も挙げられるでしょう。特にこの



点に関しては、対馬、福岡と釜山との交流について報告いただきますが、これらの機能もカウントできると思います。

これら二つの面、すなわち「安全保障の最前線」と「国際交流の玄関口」の両方もしくはいずれかの機能を有している共通点を踏まえた上で、「境界自治体」を定義して、「国境フォーラム IN 対馬」では、日本の 12 の境界自治体及び対馬市の属する長崎県、総合海洋政策本部に加え、韓国から釜山市の関係者にご参加いただきました。

実務会議においては、対馬では国境離島新法に向けた動き、福岡と釜山の関係では超交易経済圏、海洋基本計画を町レベルで作る竹富町の動きなどが紹介されました。他方で、いわゆる領土問題で苦悩する根室の事例も議論になりました。先ほど岩下先生も仰いましたが、これまではこういった互いを知るといふ機会を持つことがなかなかできませんでした。従って、このフォーラムの意義として、「日本における境界地域ネットワークの立ち上げに向けた第一歩」という点を挙げたいと思います。

では、私からの説明はこのくらいにして、具体的な報告をお願いしたいと思います。まず私の隣の九州経済調査協会（九経調）の加峯隆義さんには、福岡と対馬の超国境協力の実情と展望および、その動きの中での対馬でのフォーラムの位置づけについて話していただきたいと考えております。次に対馬市の豊田充さんには、対馬でのフォーラムの意義と成果、それから今後の対馬の方向ならびにいま私たちが模索している境界自治体ネットワークへの期待についてお話いただきたいと思います。日本島嶼学会理事の佐藤由紀さんには、日本島嶼学会としての国境フォーラムへの関わり、及びご専門とする小笠原の状況と小笠原からの期待について、また今後の島嶼学会としてのフォーラムへの展望についてお話をいただきます。そして最後に、今回のフォーラムには公務で参加出来なかった与那国の外間守吉町長に、境界自治体としての与那国の政策と、フォーラムへの期待について対馬でお話しできなかった分を、こちらでお話していただきたいと考えております。そして、4 名のご報告が終了した後に、質疑応答とします。

では、九州経済調査協会の加峯さんからお願いします。

（加峯隆義）九州経済調査協会は非常にユニークな組織です。その名の通り、九州をフィールドとして経済研究を行うシンクタンクですが、満鉄調査部の人達が日本に帰ってきた時に立ち上げたシンクタンクです。昭和 20-30 年代は、シンクタンクなど市民権を得ておらず、情報に対してまだ価値を見出せず、これに対価を払うといった時代ではありませんでした。ですから、運営に関しては財政的な厳しさもあったのですが、幸い九州では、経済界がバックアップしてくださっ



たため、今日まで生存しているという状況です。

「国境フォーラム IN 対馬」については、対馬で現地ロジを担当したという役割が一つ。またプレーヤーとして、福岡・釜山超広域経済圏の形成に関わってきたという側面があります。この二つの顔があり、その両面で報告させていただきます。

「国境フォーラム IN 対馬」には、100名を超える方々が参加されましたが、韓国の釜山からも10名ほど来ていただきました。今、対馬の人口3万5千人に対して年間7万人の韓国人が訪問しています。韓国資本のホテルもあり、韓国の方々が賑わっている島です。対馬の一番てっぺんから釜山までがちょうど50キロです。その距離の近さを実感したのは、国境から釜山が見えるということもあるのですが、携帯電話です。この携帯電話が、その50キロ手前の展望台に立つと韓国の電波に切り替わるのです。私のつかっている docomo は切り替わらなかったのですが、試しに一度電源を落として立ち上げると、しばらく携帯電話が考えていました。日本にしようか韓国にしようかと。それほど距離の近さを感じるどころです。

釜山の方からゲストで、直前に来ることができなくなった方がいらしたのですが、その方のご所属は釜山の釜慶大学という国立大学で、昨年からそこに対馬研究所という組織が立ち上がっています。まだ大学の教授2、3名くらいしか所属はしていないようですが、歴史を中心に研究を始めたばかりというお話でした。そういったところから見ても、釜山において対馬の存在意義と言いますか、関心が高いということを実感した次第です。

もう一つ、研究者の側面として、福岡・釜山超広域経済圏の推進を担っている観点からの報告です。福岡市と釜山市は海峡を挟んでおり、その間に対馬が位置しています。海峡を挟んで人口100万人以上の大都市が向き合う世界でも珍しい地域といえます。この海峡は、大体100万人以上の人達が、1年間に往来しています。その多くは観光客ですが、それをいかにビジネスに繋げていくのか、産業連携を図っていくのか、そういう研究をやっております。

2008年、李明博が韓国大統領に就任し、「釜山を中心とした東南圏を九州と一体的な経済圏として発展させる」という力強いメッセージを出されました。これを受けて、大統領就任の翌月に、釜山市長から福岡市に、「超広域経済圏を作りましょう」という呼びかけがありました。それが2008年3月のことです。2009年8月には福岡市長と釜山市長の間で協力事業についての調印がなされました。23の推進事業と64の推進課題をもとに、今順次、手を付けられるものから着手しているところです。私もその23事業、64推進課題作成に携わった一人ですが、約1年経って3分の1から半分が着手済みです。

事業作成に関わりながら、何か一つ自分の中で物足りないものを感じていたのですが、それは



「国の専管事項を動かさない」という点です。協力事業をつくったとき、基本は「福岡・釜山両市で、まずはできることから始めよう」という視点に立ったため、どうしてもインパクトに欠けるものになってしまいました。「この国の壁をどうにかして打破しないことには、本当の経済圏は出来ない」と感じるに至りました。

そこで良いチャンスが訪れました。「民主党政権が掲げた総合特区制度を使おう」というのです。今年9月にアイデア募集があり、福岡市の方から福岡・釜山インターリージョナル国際戦略総合特区を提案しました。しかしながら、懸念材料が2つあります。1つは、事業仕分けにあって、この特区の予算そのものが流動的であるようです。あともう一つ。ちょうど今日、市長が交替しました。先月市長選挙があって、これまでその特区を推進していた民主党系の市長から自民党系の市長に代わったのです。おかげで、特区がこれからどういうかたちになるかまた流動的になってきました。もっとも私個人は、「いろいろ不安定な要因はあるにせよ、基本路線は変わらないのではないか」と期待しているのですが。

こういう背景のもと、今後この福岡・釜山超広域経済圏を推し進めるために、今、始めようとしているのが「二国三制度」という新しいコンセプトです。「一国二制度」はよく耳にされると思います。中国における香港だとか、日本においても沖縄がフリートレードゾーンを作っていて、これを「一国二制度」と言います。しかし、「二国三制度」は、「日本と韓国の制度とはまた違う、新たな三つ目の制度というのを作っていこう」という斬新なアイデアです。法的な枠組とか、韓国の実情とか整理をこれからしていかなければいけないわけですが、「総合特区制度がもう一度、息を吹き返してくれば、この福岡・釜山超広域経済圏に勢いがつくというのではないか」と期待しているところです。

あと最後に触れたいのは、対馬についてです。福岡と釜山のちょうど間に位置しております。福岡の側から今回、福岡・釜山インターリージョナル国際戦略総合特区というのを出したわけですが、「むしろ対馬の方が地域活性化特区として韓国特区なり国境特区なり、そういったものを積極的に提案していくことが現実的じゃないか」と、先月、対馬でフォーラムを開催しながら思った次第でございます。私の報告は以上でございます。

(古川) ありがとうございます。最後に「対馬からもっと積極的に福岡と釜山との関係を模索するような動きをしていってもいいのでは？」というお話がありました。対馬でのフォーラムの後にアンケートを取りましたところ、「八重山3市町（石垣市、竹富町、与那国町）と台湾の交流が先行事例として大変参考になった」というコメントがあったことを付け加えておきます。では



対馬市の豊田さん、宜しくお願いいたします。

(豊田充) 座って報告をさせていただきます。長崎県対馬市、国境の島・対馬より今日伺いました。与那国から始まりまして小笠原、そして北海道の根室。そして今年、長崎県の対馬でこの国境フォーラムを開催し、特に北海道大学はじめ笹川平和財団、さらには国内外の関係者の方々の出席をいただきまして、無事対馬でのフォーラムを終えたことを、まずここに報告をさせていただきます。それと関係者の皆様には厚くお礼を申し上げたいと思います。

このフォーラム、11月の12-13日に開催されましたが、「面白い日程でセッティングされた」とまず思いました。というのも対馬では、元寇の役(1274年)に元が攻めてきて、対馬の戦場となった海岸が小茂田浜という場所です。毎年この小茂田浜の神社の大祭を11月12日に行っております。したがって、国境として対馬、そして対馬が大陸との歴史の大きい日に、このフォーラムが開催されたことも、意味深いものがあったと思っております。

今回のフォーラムで印象に残ったのが、対馬で初めて同時通訳を使ったということです。フォーラムをするということで、海外からの研究者も来られましたが、本当に一つの場で、同時通訳を使ってできるのか心配でした。しかし、実際に使っている状況を見たら、「ああ、これは対馬でもいつでも出来るぞ」と確信しました。何か次に、またそのような機会があれば自治体の担当者としても、国境自治体としてそのような機会があればどんどん誘致をしてみたいという気持ちにもなりました。

実際、私も、「日本の境界地域を考える」ということで、実務会議に加わったのですが、確かに対馬は韓国との交流は古いです。1300年あたりの室町時代から、朝鮮といいますが、大陸との交流はずっと続いております。そのなかにはいろいろな悲しい出来事などもありますが、現在、韓国から対馬にみえる方々は、先ほど九経協の加峯さんも仰ったとおり、年間7万人で対馬島民が今3万5千人ですので、倍の方々が対馬に来ている計算になります。そのような中、フォーラムで、その韓国からの観光者に対して、「対馬にもこれからずっと来ますか」という質問があったのですが、市長がそのときに、「やはり何かが無いと続かないのではないかな。やはり受け入れの態勢をどうかしていかないと一時的なもので終わるのではないかな。」と危惧する発言がありました。現状としては、韓国から近いということで旅費が安い、近い外国に行くということで、韓国からのお客が多いのではないかと思っております。

先ほど、加峯さんが総合特区の話がされました。実際、対馬市も9月に対韓国ということで、「韓国だけに絞っての自由経済貿易特区はどうですか?」という提案もしました。今の段階では



提案ですが、結局国境、外国に接する地域だからこそ、これを使って経済振興を行い、島が生き残れるような活動をしなければならないと模索しております。日本全体もいわば島ですから、対馬を日本の島の1つとして位置づけていただき、国境を越えての経済交流ができないのかと思います。

対馬は、国際交流という観点でいえば、江戸時代、藩政時代に違った役割を持っていました。朝鮮通信使です。元々は豊臣秀吉の朝鮮出兵によって日本が大陸に攻め入ったことを受け、その時に朝鮮から連れて来られた方々を取り戻そうということで始まったと聞いていますが、この朝鮮通信使は、結局、文化交流、人と人とを交流を促進する形となり、同時に大陸の文化を日本に届けてくるという役割を果たしてくれました。江戸時代の1811年まで12回の朝鮮通信使が来ていますが、その最後の年から来年の2011年がちょうど200年になります。これも何かこの国境フォーラムとの巡り合わせじゃないかと感じております。対馬市におきましても来年の11月にこの200年ということで、記念イベントをしたいと考えております。他の国境自治体と対馬の場合の違いとしては、この朝鮮通信使の存在が大きく、対馬の場合は朝鮮との交流、これが大きな役割をしてきていると考えます。先人達が続けてきたそのようなものを大事にするとともに、また今、人だけではなく経済的なものでも対馬が韓国と様々な経済交流ができれば良いと思います。これらが、これからの離島たる対馬の生きる道ではないかと模索しているところです。

ともあれ、島は島、色々な役割持っていると思います。日本の場合は、島があるから国土保全、海洋資源など豊かな広がりを持ち得ています。先ほどの古川先生のご指摘のように、対馬市は今、国境離島新法を国にお願いしております。「今までの離島振興法の枠を越えて、特に国境に位置する島には特に運賃、飛行機、海の運賃にご配慮いただきたい。物流、物を運ぶのにも船代が掛かりますので、そのような物流に対しての何か支援できないのか。」と。国境離島新法を東京に来るたびに、うちの首長も声を高らかにアピールしています。今回のフォーラムでは色々と本当にありがとうございました。最後にお礼を言って終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(古川) はい、ありがとうございました。対馬市の韓国との交流に関しては、例えば石垣市の方からは、「対馬市が韓国・釜山と行っているイベント交流や行政交流（職員の相互派遣）を是非参考にしていきたい」というコメントがありました。また、お話の中で言及された自由貿易地域に関しては、稚内市の方からも、同様の要望がありました。これらの点は、対馬のみならず、やはり国境地域の共通した課題ではないでしょうか。それでは引き続きまして、佐藤さんにお話いた



できます。宜しくお願いします。



(佐藤由紀) 日本島嶼学会理事の佐藤です。日本島嶼学会とは名前の通り、島嶼地域を研究対象とする研究者、あるいは実務家の集まりです。国際島嶼学会や国際島嶼文化会議という組織と連携して活動を行っております。

これまで国境フォーラムを開催してきた自治体の皆さん、あるいはそれに準ずるような立場の方が対馬での国境フォーラムを通してお考えになられたことや自治体の現状と課題等について報告をされることになっていますが、私だけはすこし立場が異なります。なぜ私がここに座っているのかと言いますと、小笠原村の対馬のフォーラムに参加くださった方が、議会の時期でどうしてもお越しになれないということで、小笠原を研究対象としている私が急遽、代理となった経緯によりここに座っています。また国境フォーラムの共催団体である日本島嶼学会の理事を務めている関係上、その立場から国境フォーラムと当学会の関わりや、これまでの経緯について話をさせていただければと思います。実務家の皆さんとは立場が異なりますので、現場の感覚、あるいは視点とは少し違う部分があるかもしれませんが、宜しくお願いします。

本題に入る前に、小笠原村役場から、初めてこういった私たちの集まりに来てくださった方がいらっしゃいますので紹介します。鶴田さんです。

では、話をさせていただきます。これまでの4回のフォーラムですが、私たちは共催団体として関わらせていただきました。先日、対馬で開催されたこの大規模な国境フォーラムの始まりは、与那国が始まりでした。あの時は9月半ばの台風が開催前にも後にも直撃され、飛行機が遅延に遅延を重ね、参加予定自治体の首長のうち、フォーラムに辿り着けたのは根室市長だけだったよ



うに記憶しています。そういうアクシデントのなかでの開催でしたが、初めての試みは成功し有意義なスタートを切ることができました。当時、岩下先生も確かワシントンのブルッキングスの研究所の方にいらっしゃっていて、飛行機はやっぱり成田に着いた途端に遅延の知らせが出ていて、開催時間ちょうどギリギリくらいに到着されたと記憶しています。

2回目は小笠原村です。小笠原諸島がアメリカから日本に返還された40周年記念事業の一環として開催させていただきました。この時、我々の目の前に出現したのは、台風とか距離、つまり、小笠原村は25時間半の船便、大体6日に1便のペースでしか出入りできないのですが、そのような物理的な壁ではなくて、国境をめぐる私たち研究者集団と小笠原村側の国境をめぐる認識の違いが、高い壁であったように感じました。しかし、与那国のときは参加できなかった自治体も無事来ることができ、今日の与那国、根室、対馬、小笠原の4自治体が顔を揃えたことによって、その後の流れが出来ました。

第3回目は去年のクリスマス前の根室でした。この時も4自治体が揃っての開催となりました。この時、私にとって非常に印象深かったのが、「国境自治体ということでやっているけれども、その先に北方領土があるので、厳密に言うと、うちは国境の自治体ではないのです」という長谷川根室市長の言葉でした。私はハッとさせられ、この時から、根室は国境自治体としてではなくて国境隣接自治体として意識するようになりました。この根室の時には、先ほどの楽しそうな写真に私も写っていましたが、巡検として北方領土クルーズ船に乗せていただき、いわゆる暫定ラインまで連れて行ってもらいました。船の操舵室にGPSが搭載されており、画面上には暫定ラインがこう出ていました。そういうラインで国境を見る、かたちで国境を見ることは、島嶼国家たる日本に住んでいてもそうあることではないと思います。これを自国の国境とは呼べないにせよ、それを目で確認するという機会、いわば可視化されたボーダーを目の当たりにして、他方でやっぱり実際には線など見えませんから、その身体感覚をつかむために、何回も何回も操舵室でGPSを見てそれから甲板に出て、その目の前の海を見て、これを確認できるわけではないのですが、そのようなことをしました。私だけではなく、ラインを確認しようとして、同乗した人たちの多くが同じような行動をとっていました。

そして先月には対馬市の方にお世話になりました。第4回目の国境フォーラムですが、これまで最も規模も大きく、参加者も多いものとなりました。境界自治体、あるいは国境隣接自治体の関係者の方が一同に介してこれだけ発言を行うというイベントは、おそらくこれだけの規模で開催されたことは、これまで無かったのではないかと思います。先ほど加峯さんも仰られた通り、対岸に釜山の町を望む対馬の北端で、誰かが携帯電話に「Kが出ている」と言って、それは「韓



国の、Korea だろう」と。国際ローミングで電波が韓国に切り替わることを経験すると、意識的ではありますけれども、形の無いものが形でみえることで実感を持つ、国境の身体性とでもいうものをここでも強く感じました。対馬が国境の島であるという実感をもった瞬間でした。

もちろん、境界自治体とか国境隣接自治体と言っても、その有り様が違うことも対馬のフォーラムに参加された自治体関係者の方々は実感されたことと思います。対馬フォーラムでの皆さんの話からも、国境感、境界感がそれぞれに異なるということが明らかになりました。他方で、日本が周囲を海に囲まれている島国であるから国境意識が希薄であるという一般に流布している言説を普遍的に使うことがあまり現実的ではないという点も認識していただけたのではないかと思います。また、先ほど岩下先生もこの会の始まりで仰いましたけれども、隣国との間の境界ということのみならず、日本という国家の中にも文化的な境界とか、歴史的経緯に基づく境界とか、あるいは経済的な流れによる境界。様々な内なる境界が確かに存在していることも自覚できたのではないかと思います。

私自身、国境フォーラムで皆さんのお話を伺い、付随して現場の肌合いを確かめる旅を重ねてまいりましたけれども、その中で、歴史経験あるいはジオポリティカルな位置取り、ポジショナリティ（位置取り）、これらが影響して醸成されるローカリティー、場所性を皆さんが認識されておられるのだという印象を持ちました。

少し小笠原村の話をさせてください。数ある境界自治体、国境隣接自治体の中でも小笠原村は特殊な条件下にある場所であると私は認識します。国境を挟んでマリアナ諸島と隣接する小笠原村が、一つの自治体で我が国の排他的経済水域の3分の1をカバーする重要な国境自治体であるということを、皆さんおそらくご存知かと思います。国境に関する政策に関しては、例えば沖ノ鳥島ですとか南鳥島といったところに関する、その活用に関する件というのは、国による政策は最近活発化しておりますが、特に小笠原村自身で行っていることは現状においてはまだありません。地図を見ていただくとおそらく、なるほどと思われるでしょうが、最も近い島でも周辺地域と500キロ以上離れています。東西南北どこに行ってもそうです。この小笠原の地理条件ゆえに、近隣との交流が物理的に困難であったし、他者たる隣人の存在が希薄であるがゆえに、当事者にとって現地が国境として意識しえない状況になっています。言い換えれば、国境地域としてのリスクマネジメントの切迫性が低いと言えるのかもしれません。

小笠原村の国境をめぐる意識状況が興味深いので、私自身の経験を通して少し話を続けます。小笠原村でも南鳥島や硫黄島には、気象庁関係者と自衛隊の職務遂行の為に一時的に住んでいる勤務島民のみで住民が構成されており、民間人が自由意志で定住できるのは父島と母島のみです。



私は父島と母島で 2008 年に全戸配布で国境意識に関するアンケート調査を住民に対して行いました。その結果、小笠原では国境隣接地域であるという自覚がなく、地域の位置取りに対する住民の当事者意識が希薄であるという結果が得られました。他方で、ここが境界地域であるという意識は同時に明確であることもわかりました。周辺地域との関係における地域的な位置付けに関して質問したところ、あくまでも日本の国家領域の範囲内で自らを位置付ける住民が多かったのは当然ですが、小笠原を他のどの地域の一部としても位置付けることのできない固有のバナキュラーな場所という回答、ミクロネシア地域の一部に位置付けるとする回答数が、同じくらいの数ありました。

小笠原は、地図上では太平洋の西北端に位置していますが、正しく太平洋のゲートウェイ、日本と内洋の接触地域と見なしている人も多数いました。住民たちが小笠原という場所のローカリティーに境界性を見出しているということは明らかです。国境を意識しない方のその理由として最も多かったのは、海に囲まれているのでという日本的なものでしたが、にもかかわらず国境を意識する方の理由としては、領海侵犯に関するものでした。要するに、海を通して、国境を意識しない、逆に国境を意識するという二律背反がみられるのです。

アンケート結果をみると、小笠原の人たちは自分らの住んでいる場所を日本の国境として意識する感覚が希薄でありながら、ここが日本と周辺との境界地域であるという意識を持っていることが見て取れます。つまり、国境意識が希薄というよりは、国家の領域を認識の枠組とせず、一種の脱国家化されたローカリティーをもっているのではないかと私は理解しています。このような境界意識のあり方は、今後、小笠原とその国境をめぐる政策を考える際、周辺地域との関係のあり方を模索する際に、有益なのではないかと考えます。

島嶼研究者の立場からみて、国境フォーラムに参加したことで、島という空間の境界感に対する考え方を見直す契機となりました。以前は、島の国境意識が希薄であるとか、島の境界意識が曖昧であるのは海に囲まれているからであるという、一般的な認識を無批判に受け入れてきました。しかし、「国境島嶼である、あるいは国境に隣接する自治体である」と言っても、「境界に対する認識が随分違う状況」や「島嶼地域における境界感の多様性」について認識できたというのは、国境フォーラムに関わることによって得られた、島嶼地域研究者にとっての大きな成果であったと思います。以上です。

(古川) ありがとうございます。日本島嶼学会に対しては、「是非、対馬での国境フォーラムのような集会を継続していただき、連絡協議会のような組織を立ち上げてほしい」というある自治



関係者からの要望があったことを付け加えておきます。では、お待たせいたしました。与那国の外間町長にお話いただきます。よろしくお願いします。

(外間守吉)「私の島に行かれた方はおられるか？」と、さきほど岩下先生が声をかけられたら、5、6名の方が行かれているようですが、何を話そうかと思案していました。眠くなる時間帯なのにも関わらず、一生懸命聞いてくれる皆さんのことを考えますと、少し島の概要を含めて沖縄全体の話をしながらか、我々の島に関わる特別な事情、特殊性をご理解いただければと願います。

与那国島は、日本の一番最西端にあり、過疎化が大変に進んだ島です。国境との関係で言えば、特に台湾と隣接しており、本来ならば台湾に組み込まれてもおかしくないと言えます。つまり戦前には、経済圏域は全て台湾にありました。私たちは日本人として生きるという状況が今あるわけですが、何せ生活様式も含めて全て台湾に行けば、大きな現金収入が入るという状況です。戦後、台湾と切り離されて、ほとんど現金収入がなくなったわけですが、何とか模索しながらも生き長らえてきた。しかし一方では、台湾に行けば常に現金が入るわけですから、幼少の頃から台湾に行って何とか皆で儲けよう、というのが私たちの語り草であったと記憶しています。戦前戦後直後は1万2千人がいた島ですけれども、今ではもう7分の1から8分の1程度にまで減ってしまいました。70年代に日本に復帰して、ボーダーレス化の世界にもかかわらず、相変わらず台湾には自由に行けなくなったままなのは一体、誰の責任だと声を上げたいと思います。台湾と自由に交流させてほしいと我々は日本政府に訴えてきましたが、未だに何も解決せぬままに今日に至っています。

3年前には、台湾との交流をもとに文化圏をつくり、これに経済を含めて更に交流を深めようと、試行錯誤ながらいろいろやってきましたが、なかなかうまくいかなかったという事情もあります。

というのも、その時も、今現在も同じですが、台湾の経済が日本を追い越す、賃金でも追い越すという状況が見え隠れして、台湾からの輸入品にしても日本を超えるような。明日には人件費でも日本を超えるようなことになりそうで、それでは台湾から何を入れるのだと、島で議論がなされている状況だからです。利益が無いことには経済は成り立ちませんから、1600の人口では限度があるのかなとも思います。

台湾は大陸側にあたる西は発展しているのですが、東側、台東は西に比べて疲弊しているような状況にあるようです。そこで花蓮、宜蘭、台東、屏東の4県が八重山圏域を含めて、沖縄と交流したいと最近、提案をしてきました。去年はこれに絡めて何か予算が付けられないかと考え、



沖縄のもつ、いわゆる対米請求権を使って、今年度は与那国町、竹富町、石垣市から3名の職員を先方に派遣し、台湾の方からも3名の方々が来られ、相互交流が実現されました。

ところで、先ほどからこのフォーラムの意義はどこにあるかという話がでていきますので、これに関連して一つ申し上げます。今年11月の対馬でのフォーラムのご紹介がありましたが、対馬の豊田さんからの話、また岩下先生からの話でもあったのですが、国境離島振興法（国境離島新法）についてです。私も3年前に我が与那国町でフォーラムが行われた時に、長谷川市長と2人で話をしました。また根室のフォーラムの中でも、対馬も入れた3市長含めて話をしました。「互いにいろいろ持ち寄って、頑張っていこうじゃないか」ということですが、国境離島振興法については、今年になって実現に向かい一歩近づいております。国境離島特別措置法を今、模索をしています。定義としては、外洋に面した我が国の領域、排他的経済水域の保全等、重要な位置にある離島とし、振興については保全を図ることが特に必要である地域と政令で定めてはどうかということになっています。国境離島地域の線引きは、当該離島の位置とか当該離島の振興に必要性の程度、または保全の必要性の程度、当該離島及びその周辺の安全保障上の状況、当該離島の近隣外国との交流の状況を考慮してとのこと、衆議院副議長からご発案いただいております。私たちのアイデアが現実味を帯びてきたことには、このフォーラムの意義がいかに重要であるかその貢献の大きさを改めて強調することで、私からの報告とします。

（古川） 最新の情報まで紹介していただき、ありがとうございます。それでは残り時間を質疑応答にあてますので、ご質問のある方は挙手してください。

（質問） 自衛隊OBです。先ほどの4人の方の話を聞いたのですが、境界自治体が抱えている無人島の活性化とか活用とかについて教えてください。これとの関連で安全保障の問題についても、どのような考えをお持ちでしょうか。外間さんと対馬の豊田さんにお聞きしたいと思います。

（外間） 国境離島の首長と一緒に、国に対して提言を行っています。尖閣とその周辺水域にかかわる問題です。これはもうみんなやりたい放題の状態、台湾も中国は日本の領海にも排他的経済水域にも頻繁に入ってきます。他方で我々の方からそこに行こうとしたり、そこで経済交流をやろうと思っても、国はなかなかその水域に行かせてくれません。ではここに自衛隊を入れてということに対応するとなると、これはまた事を荒立てるだけです。そうではなくて何とか経済交流ができるように、例えば、交流ができるように尖閣に港を造っていただきたい。これは避難港



としても利用できますし、そこにいつでも我々が行けるような環境を作っていただきたいと要望を出しています。もちろん、防衛上どうしてもそういう制限が必要であるという場合には、受け入れるにやぶさかではないのですが。これが私共、3首長（与那国と石垣と竹富）の今の意見であります。

（豊田） 対馬の場合、周辺に無人島はありません。島の中央部の浅茅湾の周辺には無人島がありますが、これは中の島であり、外海の方ではありません。自治体関係者として、率直に言えば、対馬はもう島そのものが国境という感じですので、ここに人が住むということがやはり大事であり、これをサポートするのが私たちの役目だと思っております。ですから、地域の方は地域のなかで、国境の島のなかで色々な経済活動をやりますが、なかなか過疎化の進行が止まらないのも実情です。そのなかで、先ほど与那国町長がおっしゃられた海を守るための避難港とか、国際条約に即して災害の救助をするための港とか、そのようなものを、国策の一つとしてテーブルにおきながら、雇用の場をつくって地域振興を行う手立てが必要になってくるのではないかと思う次第です。

（佐藤） 小笠原村は、国境自治体として重要なのだと思います。安全保障の観点からはとくに。硫黄島に自衛隊が駐屯しておりますから。しかし、無人島をなにかのかたちで活用するという点については、特に議題になっていないようです。無人島とはありますが、父島周辺にある島についていえば、無人島で独立した島というより、父島の属島のようなもので面積も広くありません。空港の建設地としてどうかという話題にはあがりませんが、安全保障関係では、硫黄島以外には特に現段階では出ていません。

（質問） 乱暴な質問を一つだけします。豊田さんがしきりと長崎県対馬市とおっしゃっていました。私は本当に長崎県でいいのかな、という疑問があります。長年の疑問ですが、「脱長入福」、つまり、福岡県対馬市になった方がいいのではないのでしょうか。加峯さんがこの場所におられるのも、そういう為におられるのか。それとも福岡が全九州を代表しているから、ということなのかわかりませんが、どう考えても現状の交通事情、その他何をみても長崎県に入っているメリットは無いのではないのでしょうか。あれはそもそも明治維新のどさくさのときに長崎にくっつけられただけですから、一体その辺を豊田さんは個人的にどうお考えになっているのか、聞きたくもありません。対馬市議会か何かで全員で決議して長崎やめた、というわけにはいきませんか。ちょ



っと乱暴ですが、本音の質問です。

(豊田) せっかくの機会ですので、私も本音で発言させていただきますが、事実上、対馬の経済圏は福岡です。飛行機の便を見ても、全日空が126人乗りを1日に往復4便就航させています。海の航路でいえば、ジェットfoilが博多港との間に2往復あります。長崎と往来しているのはORCの飛行機で39人乗り。これが1日4往復で、かろうじて行政関係者などがこれを使っています。対馬の子供たちをみても、高校を卒業して、ほとんどが福岡などに行きます。就職、進学で長崎ということは少ない次第です。離島振興法が昭和28年に議員立法で制定されましたが、それ以前に対馬市では福岡県への転県運動がありました。長崎県に対馬に残った理由ですが、海の資源が豊富である長崎県が海洋県だったので、「このまま長崎県に」ということでは・・・長崎県対馬市と紹介しましたが、我々は行政マンですから。これから道州制が実現していけば、そのなかで加峯さんが言う福岡、対馬、釜山の海峡を越えての経済交流も、福岡との関係強化のなかでより進むのではないかと予想します。ですから、国との関係、また道州制のなかで、国境交流の核としての老岐と対馬に目を向けていただきたいと思います。

(加峯) 私の方から小ネタを2点付け加えたいと思います。一つは電話番号です。市外局番を見ますと、福岡は092から始まり、長崎は095から始まりますが、対馬は092から始まります。もう一つ、対馬は縦に長いですが、その一番北に上対馬町があります。今回、上対馬の方々ともフォーラムの折、色々、意見交換させていただきましたが、ある地元有力者の名刺には「福岡圏対馬市」と書いてありました。「県」ではなくて「圏」だそうです。

(古川) はい、ありがとうございました。では岩下先生、宜しくお願いします。

(岩下) 福岡を巻き込むことは、私が考えた部分もあるので、ご説明します。最初に「福岡圏」の話をしようと思っていたのですが、加峯さんにとられてしまいましたので省略します。そこで他の話題をふりますが、このようなフォーラムをつくって、境界問題を議論すると普通、参加者の年齢層が高くなるのでこれを何とかしたいと思いました。若い人を巻き込みたいと考え、山口県立大学の韓国を研究している先生たちと相談をして、対馬の高校生、上対馬、豊玉と巖原に3つ高校があるのですが、対馬で対韓国の意識調査をして、フォーラムで報告をするようお願いしました。どうして彼らに頼んだかと言うと、その先生が下関市民の対韓国意識調査をやられてお



り、これは面白いと思ったからです。対馬は島ですからなかなかよそ者には本音で言いにくいことも、高校生だとちゃんと言ってくれるのかなとか、下心もありましたが、結果は、はっきり言わないかもしれないけど、見事に島の人たちが実感しているとおりにになりました。他方で、外の人が見るとビックリする内容かもしれません。

心の中の距離感を心象地理というかたちで整理して、学生たちはマップを作ったのですが、これによれば、上対馬の高校生にとって非常に釜山に近い。厳原の人はそうでもない。これはまあわかりやすい。より面白かったのは、どこの高校でもすべてが長崎より福岡に近いということでした。境界というのは国と国だけではなくて、色んなところにあるものだと改めて思った次第です。

ただ対馬が長崎県に在る意味が一つあるとすれば、長崎と鹿児島は離島振興法を作った担い手でもあるし、宮本常一先生の存在も大きいのではないのでしょうか。ところで、今回、私がどうして加峯さんに頼んで福岡、釜山と一緒にやったかと言うと、「対馬が危ない」というステレオタイプの議論をつぶしたいと考えたからです。「韓国に乗っ取られる」というものですが、中身にここでは深入りしません。議論の前提として4万に満たない人口の対馬だけを韓国全部と向き合わせることが間違っていると私は思います。釜山の人だけが対馬に来たら、それは大変でしょう。しかし、近くに福岡があるわけです。「200万に近い福岡に北九州や下関を加えて、釜山と向きあい、その枠組のなかに対馬があるということであれば、何も心配することはないだろうに」という考えがありました。事実、その通りだと思います。

ところが、問題は福岡側の意識の欠如です。私に加峯さんや九州大学時代の友人に相談しながら、話を進めていくなかで、対馬の意味を一生懸命に福岡の人に説いてもピンとこないのです。彼ら釜山だけを見ているのです。「何で我々が対馬に行かなきゃいけないのか」という感じでした。それを一生懸命口説いて、口説いた結果、福岡市の人たちも結構たくさん来ていただくことができました。一回行くと対馬の素晴らしさ、自然と歴史の豊かさ、その将来性をみんなが理解します。格好の観光の場所になりますし、釜山と福岡で一緒に何かをやり、世界に発信するときにならずここが重要な場所だという認識を持ち始めています。もっとも、なかなか行政のトップまで、これは伝わっていないとも思いますし、市長が新しくなったことを機会に、福岡市に対して加峯さんが改めて頑張ってロビイングをしてくださるのではないかと期待しています。

(ニューマン) デイヴィッド・ニューマンです。イスラエルのベングリオン大学から来ました。ヘブライ語ではないのでご心配なく。英語で発言します。私たちの境界研究、ボーダースタディー



ズではイスラエルとパレスチナの将来の境界について、また国際的な政治的な境界についても研究を行っています。またイスラエルとヨルダン、イスラエルとエジプトに関わる境界についても研究を進めています。現在、私たちが行っているプロジェクトでは、クロス・ボーダー・リサーチセンター（越境研究センター）をイスラエルとヨルダンの間に、それから、ラタンとアカバに設けるということを計画しています。ここにはエジプトとサウジアラビアとのものも含めて4つの境界があります。

まずヨルダンとイスラエルとで、このクロス・ボーダー・リサーチセンターを作って、これを広げていきたいと思っています。考え方としては、クロス・ボーダーの事業には、ローカルな人達、草の根の人達が参加するべきだということです。政治家ではありません。草の根の人達、地方自治体、観光、環境、それから生態系など生活の質に境界の両側で人々に影響を及ぼすようなレベルでの参加が必要だということです。例えば、蚊は旅券がなくても国境を越えています。ボトムアップによってクロス・ボーダーの協力を構築していきたい。地方自治体レベルから、構築していきたいとこのプロジェクトを行っています。そして、日本とイスラエルと非常に遠く離れていますが、皆さんがおっしゃるローカルな協力、草の根レベルで協力に関心があります。これはもしかするとトップダウンの考え方にも影響をいずれは及ぼすかもしれないと思いますが、いかがでしょうか？



(外間)「日本ではこの二つをやっていない」と、私が小さい時から教わっていることです。一つは宗教戦争、もう一つは人種間の闘争です。これを一つの誇りと思っているわけです。いまイスラエルの先生がおっしゃった、多様な民族、それから宗教をめぐる闘いですが、世界は一つと言



っても、なかなかどうしても相容れないものがあるのでしょうか。日本人には、日本なりの問題解決の方法はあるのだと思っております。マスコミでイスラエルの状況をよく見ますが、非常に気の毒に思います。私自身が解決方法として申し上げるだけの知識や知恵は持っていませんが、話し合いでもって解決できるような方向が模索されることを希望します。

(佐藤) 今、いただいた質問に関してなんですが、先生の考えておられる答えに近いかどうかはわかりませんが、私がさっきさせていただいたアンケートの話に少し付け加えさせてください。アンケートを取った目的は、もちろん国境を問うリサーチをしたかったのですが、もう一つの目的として、そこに住む人達が国境に住んでいることをどのように考えているか、つまり、それを利点として捉え地域振興を模索する可能性があるのかを考えたかったからです。そこで上がってきた声を国の政策に反映させることは、一つ可能な方法ではないかと私は考えております。

(古川) 先ほどの質問は、草の根レベルの動きというのが国家間の関係も変える可能性があるのではないかということでしたので、今日せっかく来ていただいております、南大東島の観光大使吉澤直美さんと、根室市の高橋雅典課長にも、お話を伺いたいと思います。

(吉澤直美) 沖縄県の南大東村、南大東島という一つの島で一つの村となっているところの観光大使をしています。草の根レベルという話に引きつけて島を紹介します。南大東島もユニークな歴史を持っている島で、かつては無人島でした。人が住み始めてわずか110年、有人島としては若い島、若い村です。1300人の人口です。1820年代にロシアの船が近くのを通った折、まだ無人島だった南大東島を発見し、島名をボロジノ・アイランズという名前前で世界に紹介しましたが、これが島の知られる存在となって今日に至っています。今は逆に南大東島はボロジノという名前も愛称として使いながら、島の宣伝をしています。観光大使として私は、草の根レベルで何か出来ないかということを考えています。ちょうど今年が110周年記念ということで、ロシアが発見した経緯を探り、歴史的ルーツを探す旅というのを組織しました。ロシアに現存するボロジノ村を訪問し、役場の方と民間交流で表敬訪問をしてきました。今年9月の話です。

役場の、例えば、村長や議員も連れて行けばいいのにと話もあつたのですが、いやまずは草の根、個人の有志から、一人でも声を発すること、行動することが何かの形で繋がればいかなということなので今回はやりました。ここでお話を伺っていると、世界には様々な歴史もありますし、ここに人が住んでいることさえ知られない時代にも何かの出来事が動いていって100年後、



200年後、あるいは千年後に新しいかたちで動きが始まることもあると思います。この南大東村、南大東島も人が住んで、わずか110年ですが、島の方々にも、こうして世界へ向けて働きかけていく重要性を認識してもらえるようになってきました。紛争と国境をめぐる争いごとといった、大きな出来事について、草の根で何ができるかはなかなか難しく、答えを今すぐ出せるようなことはありませんが、どんなに小さいことでも大きなものに繋がる第一歩だと考え、色々な地域で活用ができればいいなと願っております。

(高橋雅典) 北海道根室市から参りました高橋です。ローカルの人々、自治体等々でのプロジェクトという視点ですが、この視点は正に我々が最も今やりたいと思っているものです。しかし、今、根室と北方四島の実情を見たとき、四島との交流はビザなし交流といった四島交流事業に限られてしかできない状況下にあります。その部分を長谷川市長はなんとか拡大したいと交流事業の展開を国に強く求めておりますが、なかなか実現に至るのは難しいようです。これは対馬のフォーラムでも申し上げましたが、最近、四島在住のロシア人の代表者が根室に来られたとき経済も含めた物流交流などを希望してきました。また一昨年、ロシアのベールィ大使が来られた時も、講演の際に地域間交流の拡大を提唱され、その先に問題の解決があるのではないかとおっしゃっていました。冒頭、岩下先生からもございましたが、実は一昨日、前原大臣が地元で現地視察に来られました。前原大臣がおっしゃったことで、地域として非常に期待をすることは、ロシア外交の新たな取り組みについて省内で検討しているという発言です。具体的なものは示されませんが、市長を先頭に国に対してこれからも色々とアプローチをしたいと考えています。

(加峯) 草の根レベルの交流が国家間の関係を変えるということですが、少し拡大解釈をしまして、地域間の交流が国家間の交流を変えるというふうに解釈するならば、福岡・釜山超広域経済圏の取り組みというのは一つの実験といえます。どういう実験かと言いますと、日本と韓国のFTAは、実は2004年を最後に交渉がストップしています。国同士でうまくいかないものを、まずは福岡と釜山で突破していこうじゃないかと模索しています。「日韓FTAのパイロットゾーンとして福岡、釜山を是非使ってください」という提案を今、国に打診しているところです。福岡・釜山超広域経済圏では、地域版FTAというものも掲げています。

(チャベス) マニユエル・チャベスといいます。ミシガン州立大学の教授です。私は国境研究、アメリカとカナダの国境、アメリカとメキシコの国境を研究対象としております。草の根が二国



の政府間関係にどういふ影響を与えることができるかについてですが、その影響の与え方がローカリティー、その場所それ自体の地域性を反映させているということをお願いしたいと思います。アメリカとメキシコの国境、アメリカとカナダの国境において私が研究しているのは、自治体に何が出来るかということですが、自治体同士が交流して対話することで、国家間の諸問題に橋を架けようとする試みです。日本においては島を実験の中心として取り組むことは出来ないのでしょうか。国の所轄と自治体の所轄。国の専管といった縛りがあってこれは出来ないのでしょうか。

(外間) アメリカとカナダ、そしてメキシコとの草の根レベルの話ですが、要するにそちらはボーダーレスでのおつきあいができ、先進地域ですから、ぜひ勉強させていただければと思います。ただ草の根ということでは、我々は台湾とは 111 キロしか離れていない。日本のこの戦後 65 年をみた場合、1947 年以前は自由に往来できたわけです。日本の敗戦と同時に往来ができなくなり、アメリカの支配下で 27 年続きます。異民族による支配が続いたわけです。ただ「アメリカの支配下では、結構、尖閣や色々なところへ自由に往来できていた」というのが我々の認識でもあります。というのも、アメリカの強さによるのかもしれませんが、そのおおらかさと自由の意識のもと、我々はそれに甘んじて往来していたのかもしれませんが。琉球政府があったとしても、そこに行っては駄目だとか言うような制限はあまり無かったと私は記憶しています。日本への復帰が近付いてくると、なかなか自由に行けなくなっていくというのが現実だと思います。

1982 年になって、「これではいかんだろう」と、台湾の花蓮市と姉妹都市を結んで、互いの文化、地域の特性ですね、これを互いの共通認識として問題を解決できないか、相互の交流が深め、経済を発展させたいという狙いで、今、一生懸命に取り組んでいるのですが、日本政府は、「これは駄目、あれは駄目」と言うのです。

「駄目です」というのは、4 年前に経済特区を申請したときにはっきりしました。ことごとく「ノー」と言われました。110 キロしかないのに、所定の船舶が往来できるようにお願いしたところ、「出来ません、SOLAS 条約があり、この基準に満たない船は駄目です」と言われました。でも石垣から 127 キロあって、それより近い台湾で何故そんなことになるのか私にはよく理解できない。「元々、『構造改革特区とは、規制緩和をめざし、発展の要因を阻害するものがあればそれを一つずつ取っ払ってあげましょう』というのが日本政府の考え方でなかったのですか？」と提起しても、「いややはり駄目だ」という返事しかありません。それともう一つ。CIQ の常駐も難しい。「実績が無いから行けない」と言う。年間 50 千トンの船が 50 回。それと 50 トンクラスの船舶含めての貨物が何千トン無ければ CIQ の開設は出来ないというようなことで、ルール上は今、



台湾と交流ができないのですが、我々は花蓮市と交流協定を結んで、頑張っているところであります。

(佐藤) 小笠原の立場から言うと、おそらく地理的な条件から難しいと言わざるを得ないでしょう。ただ小笠原はアメリカと EEZ の境界を接している、共有している位置にありますから、相手はアメリカということになるのでしょうか、現段階では見通しは立っていません。

(豊田) 対馬市です。「自治体間の経済交流、それを通じて国を越えての交流という可能性はないのか」という話ですが、これがいままさに対馬の課題だと思います。やはり地理的、歴史的に見ても、対馬は、大陸・韓国との交流が重要です。人的な交流は増えてきましたが、経済的にはまだまだです。関税などの問題もあります。先ほど九経調の加峯さんも仰いましたが、「福岡、対馬、釜山、海峡を取り込む圏域の中でモデル的にそのような構想を実現して、それをまた日本の他の地域でどのように展開していくのか？」を考えていければと思います。グローバルな世界で日本がどう向かっていくのかというストーリーのなかで、一自治体の力量と言いますか度量といえますか、その方向性というのをしっかり見つめる時期が来ていると考えます。

(加峯) 日本の場合、例外をなかなか認めてくれないのです。特に国は CIQ に関してがんじがらめにしており、地域が自由に何かをやる場合の障壁となっています。4年前の話がありましたように、構造改革特区には期待もしました。ただこの構造改革特区というのは、特区であって特区でないようなものでした。どこかでこれが実験的に成功したら、全国に波及させましょうというものでしたから。地域に固有なメリットが全く無かった。ただ今の政権が考えている特区は地域の目玉を大事にしようという姿勢がみられ、地域の人達も関心を高めています。特区にはウルトラC的なものを期待したいものです。

(池直美) 北海道大学スラブ研究センターの池です。私から乱暴な質問をさせてください。対馬のフォーラムで、韓国との交流など勉強になりました。素人感覚ですが、「まだまだ地域レベルで出来ることがいっぱいある」とも思いました。例えば、観光一つとってみても、和多都美神社に行ったとき、占い好きの韓国人がみなおみくじを引いていたのですが、全部日本語でした。それで私が韓国語で話しかけたら、「君、韓国語できるのなら、ちょっとじゃあこれ読んで訳して」と言われましたが、例えば、札幌の北海道神宮では、韓国語や中国語のおみくじが用意してあり、



大人気です。小さいことですが、他の地域の人に来て違う目線で見ると、そこで一つでも新しいことをするというのを積み重ねることによっていろいろ変えていくことができるのではないのでしょうか。もちろんリスクを冒すところもあるのですが、それによって得られるものもあるでしょう。

あと一つ小話です。ホテルにいた時ですが、日本では生卵を出すじゃないですか。韓国人は生卵を食べません。生卵を出されると、「何で生卵出すの？」とちょっと怒り気味になります。「いや、それは日本では朝ごはんには醤油と卵をかけて食べるのだ。もの凄く美味しいからちょっと食べてみて」と言ったら、「あ、美味しい」となります。しかし、やはり韓国人の人が生卵を食べないと知っていたら、それを説明する一文をつけたり、説明書きがあると親切だと思います。私は三日間しか現地にいませんでしたが、少し見ただけでも、何か色々出来るなと思いました。コンサルタントみたいな仕組みがあればいいのではないのでしょうか。

(岩下) 今、韓国サイドからの目線で話があったので、私は福岡サイドの目線でお話しますと、今回、対馬でフォーラムをやるのはロジが本当に大変でした。加峯さんが泣きそうな顔をして何回も何回も言って来られましたが、それはやっぱり島ですから不便なことはわかっていたのですが、本当になかなか商売する気がないというか・・・ホテルにインターネットは無いし、空港の近くのホテルはなかなか送迎してくれないし・・・都会の生活に慣れている人は、行ったら多分フラストレーションが溜まることでしょう。「コンベンションとか大きい会議を呼ぶ」と豊田さんは仰いましたが、今の状況では行った人は皆、非常に辛いだろうと思います。韓国人が多いことを問題視するマスコミに言いたいのは、日本人が行かないことをもっと取り上げるべきだという点です。私も学生時代、福岡に10年いましたが、恥ずかしながら、その間一度も対馬にも行ったことがありませんでした。福岡の問題関心の低さは昔の自分に対する批判でもあります。ですから対馬自体が、やっぱりもっと九州全体や日本全体からお客さん呼び込める仕組みを一緒に考えたい。韓国からももちろん呼び込み、その交錯する場の中で対馬を国境の島としてセールスして賑わいをもたらそうとすべきではないのでしょうか。

(豊田) 全くその通りだと思います。対馬の人間は、時々言われるのが井の中の蛙ということで、「島にいたら、島のことしか見えないよ」と言う。ですから結局、受け入れをどうするのかということを考える必要があります。そして一度来た人たちをつかまえて、これをどう次に展開していくかというのが、今後の勉強すべき課題です。来た人にまた再訪したいと思わせ、リピーターが増えていく。そのような島作りということで私たちも頑張っていきたいと思います。何かお気



づきがあれば遠慮なくご指摘ください。

(質問) 4人のご報告を聞いて、また質問とやりとりを聞いて一つ痛切に感じたのは、それぞれの地域があまりに個性的だということです。ここで今、ボーダーリージョンと、あるいはボーダーアイランドということで一応括りはしましたけれども、実際には沖縄が抱えている問題というのは対中国であるし、対馬は韓国であるし、小笠原は一応アメリカというような説明がありました。それぞれの国と日本との関係によって個性的であろうと思います。片方は全然渡航ができない。あるいはむしろ渡航を制限されている。片方はもの凄く往来が激しくなり、何か侵略されているような気分さえ生まれている。片方には全く来ない。来てほしい。そのような個性的な違いがあるところで、行政的に境界離島の問題の特別立法をやるという話がありましたが、共通性を見いだして果たして一つのものができるのでしょうか。政府の対応が、先程からずっとお話があったように、非常に画一的だとすれば、「どこかが交流をやるのだ」って言うと、「どこもやれ」となり、「やるな」と言うと「どこもやらない」ということになりませんか。特別立法の中の共通性をどこに置き、何を政府に要求するのか、教えていただければありがたいです。

(外間) 共通点ではたくさんあります。確かに北と南では異なっており、北海道はロシアを抱え、対馬は韓国を抱え、我々は中国、台湾を抱えているわけですが。ただその中であって、特に本土と比べれば、かなり遅れているという共通点があります。インフラ整備においてもそうです。我が島の港湾において、主要な港湾は全く使えないという状況がございます。港は完成したけれども、周期波が直接港に入ってきて使い勝手が悪い。そこで、港湾の再整備をお願いしてもなかなかうんと言わない。なぜかと言うと、これは技術的な面や、費用対効果において、難しいというような形になってくるわけです。つまり南大東もそうなんですけれども、全くあそこにはもう港は造れないという環境がございます。北もそうなんですけれども。私のところは、港は造れるけれども、何とかその規模に合ったものを作って、そこに船舶が出入りできるようにすることをお願いしても出来ない。また焼却炉の問題においてもそうであります。ダイオキシン、CO²等々の問題があって、世界のルール基準に沿ってくると、これはもう公害になるということで、現在焼却炉は使用できない。またこれらも作り替えなきゃいかんというようなことがあって、作る物、作り直さなければならない物のインフラ整備に対して、お互いの特殊な実情があります。であるからして、それぞれの実情に合わせてこれをルールの中に組み入れてはどうかということで、この制度（国境離島特別措置法）の制度化に向けて現在模索しております。これは後にまた



皆さんの方にお見せしても結構なんですけれども、読み合わせと時間的に大変なことになるので。例えば港湾構築工事の場合には、沖縄のように補助率が10分の9.5でいいですよということとか、領海、領域、EEZにおいては交付税の対象になりますよとかですね。それから定住の為の促進事業として何をどうするのかということ、振興策をどう立ち上げて行くのかということのルール等を作っております。もし参考に必要とあれば、後ほどコピーを差し上げて構いません。参考までに報告とさせていただきます。

(古川) ありがとうございます。時間になりましたので、最後にまとめさせていただきます。先ほどの「それぞれの地域があまりに個性的であるにもかかわらず、一つのものができるのか？」という問題提起に対しては、バラバラのままではなく、「大同小異」という言葉が正しいかどうかはわかりませんが、先ほどの町長のお話も踏まえながら、いかに共通点をまとめて自治体レベルから国を変えていくかを考えていきたいと思います。今日は日本での議論を世界に発信した部分もありますし、海外からのゲストの方々との質疑・応答を通じて海外から学んだこともあったことでしょう。このように、境界地域研究ネットワークが更なる発展をしていくためには、皆様方の協力が必要です。そこで最後に、対馬でのフォーラム及び本日のセミナーの参加者並びに関係者に感謝すると同時に、引き続き皆様のご協力をお願いして、ラウンドテーブルを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。





【エッセイ】

世界のボーダースタディーズとのネットワーク構築

池 直美

2010年12月6日、日本財団にて「日本のボーダー・世界のまなざし：境界研究ネットワークの立ち上げに向けて」というフォーラムが開催された。この会議には、海外から5人の発表者をお招きして、所属するボーダー組織における様々な活動そしてその成果などについて紹介して頂いた。

プリモルスカ大学（スロベニア）のアントン・ゴースー教授は、国際地理学連合（International Geographical Union, IGU）の理事も兼任しており、IGUの機能及び現在行っている様々なプロジェクトを紹介し、政治地理学が直面している課題などについて言及した。ゴースー教授は、IGUの成果にも触れたが、失敗した例なども交えて紹介していただき、失敗例から学ぶことの重要性についても指摘していただいた。

ベングリオン大学（イスラエル）のデイヴィッド・ニューマン教授は、国際的学術雑誌である『地政学(Geopolitics)』の編集者でもあり、ダーラム大学の国際国境研究ユニット（International Boundaries Research Unit, IBRU）とも共同研究などを行っており、最近ではパレスチナ・イスラエルの非公式交渉（Track II）にも関わっている。ニューマン教授は、そういった経験などを踏まえて政策決定者及び実務者との連携における成果及びその課題などについて触れた。同教授は、境界の問題などをより広く知ってもらうためには、ローカルないしは地域の境界研究の拠点が重要でありかつ鍵となっていることを指摘した。

ラドボルド大学（オランダ）のマーティン・ヴァン・ダー・ベルド教授は、グローバルな組織である移行期の国境地域（Border Regions in Transition, BRIT）のメンバーでもあり、北米の国境地域学会（Association of Borderlands Studies, ABS）の理事や機関誌である Journal of Borderlands Studies の編集者なども務めている。ヴァン・ダー・ベルド教授は、EUの例を用いて、国境をなくすことが流動性や統合性を強化するのではないことを説明し、むしろ「他者に魅力を感じてもらえる」ことの重要性について指摘した。

ミシガン大学（米国）のマニユエル・チャベス教授は、ABSの元会長も務め、北米における特にカナダ・アメリカ、メキシコ・アメリカ国境について実務者及び政策決定者とも共同で研究を行っている。同教授は、メディアやコミュニケーションについての専門家であり、ABSの成果などに触れ、特にメディアと境界の関係について言及し、色んなメディアを通じたコミュニケーション



こそが境界にまつわる様々な問題の認識を高めかつボーダースタディーズの分野の発展につながると主張した。

最後のパネリストは、GCOEの拠点リーダーでもある岩下明裕教授が務め、政策提言や社会的貢献などを含むGCOEの活動を簡単に紹介し、またユーラシア大陸における様々な境界の問題について触れ、この地域における境界問題が大陸の境界から海の境界へとシフトしていることを説明し、ナショナリズムと境界地域、そして中央と周辺の関係のパラドックスにも触れた。



移動展「知られざる日本の国境」：南に北をもっていく





北海道大学グローバルCOEプログラム

🏠 ライブ・イン・ボーダースタディーズ



ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.05
「境界地域研究ネットワーク JAPAN の立ち上げに向けて」

編集者： 岩下明裕

協力： 福田宏 合田由美子

発行日： 2011年2月28日

発行者： 岩下明裕

発行所： 北海道大学スラブ研究センター内 GCOE 工作室

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

Tel.011-706-2380 Fax.011-706-4952

<http://borderstudies.jp/>
